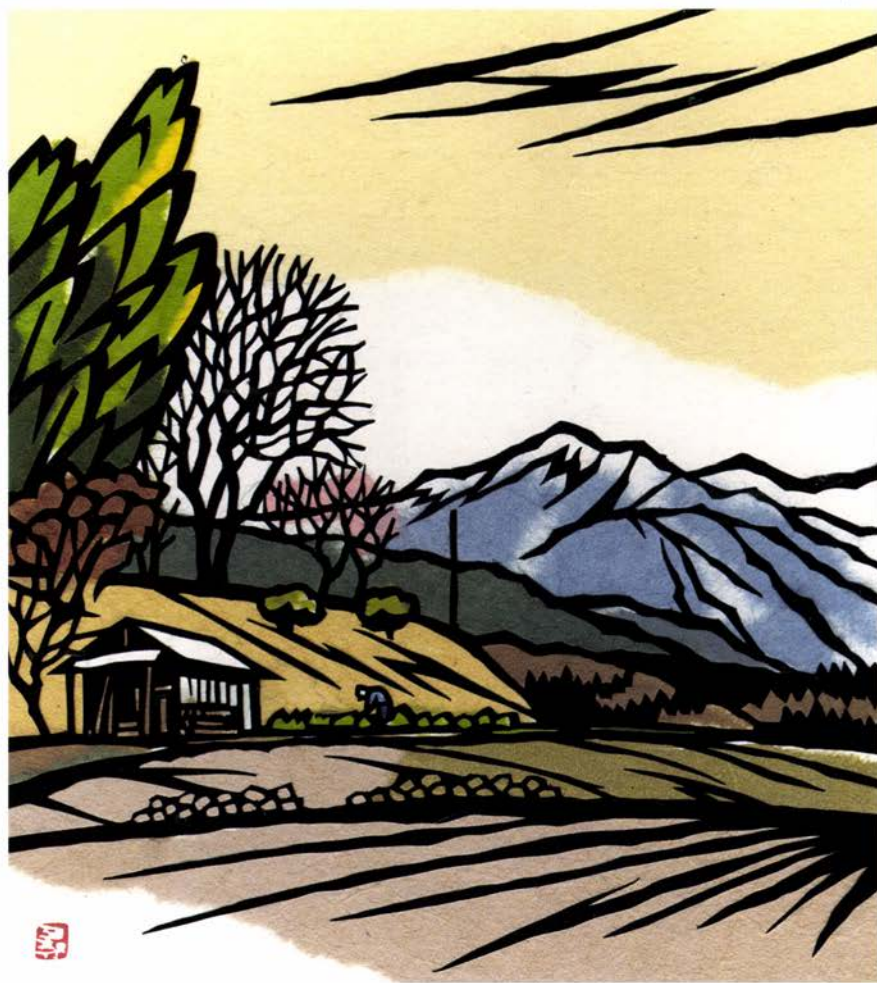


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十五年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇三〇号



日川協加盟

No. 1030

三月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

新家完司川柳集 (六)

平成二十五年

A5判・137頁 1,000円+(税・送料80円切手3枚)

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597

新家完司

TEL 0858-52-2414 FAX 0858-52-2449

Eメール shinke@mx1.tcbnet.ne.jp

日本の原風景

小島 蘭 幸

久し振りに大スクリーンで映画を見ました。タイトルは「東京家族」。「男はつらいよ」の寅さんシリーズをはじめ「幸福の黄色いハンカチ」等、日本の家族を描き続けてきた山田洋次監督の第81作品です。物語は瀬戸内の小さな島で三人の子供を産み育てた老夫婦が、人生最後の上京をと思い立ち、東京で暮らす三人の子供たちを訪ねるところから始まります。

この映画の重要な場面のロケ地になったのが瀬戸内の小さな島、大崎上島です。大崎上島は、私の住む竹原からフェリーで約30分のところにあります。穏やかな海、緑の段々畑、美しい人情は正に日本の原風景だと思います。

私はあの山田洋次監督が瀬戸内海の美しさをどう表現しているか、ただそれだけが楽しみで見に行つたのですが、映像の中での美しさは、ほとんどカットされていました。しかし省略されることによつて私は、より強く瀬戸内海の美しさを感じる事が出

来たのです。映画を見る人それぞれに古里があり、日本の原風景が心の中にあるのですから、ことさら瀬戸内海的美を強調する必要はなかったのだと思います。

父親周吉の家は島の上にあります。今は舗装されていますが細い農道は雨が降ると昔は……。ここを楽しく話しながら近所の娘と末っ子の恋人が歩いて上るシーンがあります。

母親とみこが上京中、長男の家で倒れ、そのまま急逝した葬儀の後、島に最後まで残っていた末っ子達も帰り、ひとりぼっちになった周吉が足の爪を切るシーンがあります。パチンパチン……。

山田洋次監督は東京での家族の今をリアルに、微妙な人間関係を見事に表現しています。そして省略することの美しさ、想像させることの大切さをしみじみと感じさせるのでした。

『穏やかな海は人を包み、整然と連なる段々畑は人々の真面目な暮らしぶりを伝える。「日本の原風景」です』これは大崎上島をロケ地に選んだ山田洋次監督のコメントです。

私は今、急に路郎先生のふるさと尾道がロケ地だった小津安二郎の「東京物語」を見たくまりました。

座右の句

ピンチにはうつ向かないで空を見る (みつ子)

私の句

歳重ね母は無心で童歌

竹山 千賀子

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「恵那市」

■巻頭言 日本の原風景

青森を訪れた川柳塔社の方々

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌⁹⁹

自選集

温故知新

水煙抄

新川柳鑑賞¹³

誹風柳多留——一篇研究⁹¹

中島生々庵句抄

英語 de Senryu¹⁵

愛染帖

檸檬抄「浅い」

江戸を楽しむ³

小島 蘭 幸……(1)

斉 藤 焔……(2)

小島 蘭 幸 選……(4)

木津 川 計……(47)

……(48)

……(51)

西出 楓 楽 選……(52)

麻 生 路 郎……(75)

……(76)

……(78)

吉村 侑久代……(79)

新家 完司 選……(80)

奥田 みつ子・森山 盛桜 共選……(84)

小栗 清 吾……(87)

青森を訪れた川柳塔社の方々

斉 藤 焔

昨年七月一日、川柳塔みちのく二十五周年記念句会開催の際は、皆様お一人おひとりの心温まるご参加をいただき、改めて心から感謝申し上げます。数々の励ましのことばや感動を頂き、とても有意義な記念句会だった。

さて、川柳塔社の多くの方々がかれまで青森を訪れ、交流し、指導して下さいている。その中で、主催の東奥日報社に招かれ、青森県川柳大会に特別選者として訪れ、特別講演された方々をこの機会にここに記しておきたい。

この大会は、戦後間もない昭和22年に第一回大会が開催されてから、県内で最も権威があり、全国でも屈指の歴史を誇る大会として毎年青森市内で開かれている。

○麻生 路郎 第十六回大会(昭和37年)「川柳一筋に」と題して講演。川柳は人間を陶冶する手段だ。作句は人間向上の手段であると説かれる。

一路集「刺 激」……

上田宣子選……(88)

民族の詩歌⁽¹⁰⁾……

伊達郁夫選……(89)

■句集鑑賞『平成二十五年』新家完司 著

稲村遊子選……(90)

初歩教室「増やす」……

三好 專 平……(91)

川柳塔鑑賞……

樋口由紀子……(92)

水煙抄鑑賞……

太田 昭……(94)

せんりゅう飛行船⁽²⁷⁾……

水野 黒 兔……(96)

津軽発おもしろ景色⁽¹⁴⁾……

渡辺 富子……(98)

追悼 阿萬萬のさんのこと

新家完司……(99)

二月本社句会……

高瀬 霜 石……(100)

句会燦爛……

江見 見 清……(101)

■エッセー あつ！腰痛が消えた……

芳賀 博子……(106)

各地柳壇(佳句地十選／村上玄也・倉益一瑤)……

澤井 敏 治……(107)

三月各地句会案内……

柳界展望……(108)

■編集後記(ひとこと／井上桂作)……

朱夏・能子……(126)

座右の句

実印を彫って家族の盾とする

(淳)

私の句

字余りも字足らずもみな私の子

三 浦 強 一

○中島生々庵 第二十四回大会(昭和45年)

「肌のふれあい」と題して講演。小児科医の視点から膚の触れ合い、心の触れ合いについて話される。

○橘高 薫風 第三十四回大会(昭和55年)

「私の川柳」と題して講演。穿ちの真髓を追求される。

○西尾 栞 第四十一回大会(昭和62年)

「川柳アラカルト」と題して講演。私の師、麻生路郎先生は、川柳は情熱だよ、川柳はへたでもよいとよくいわれた。など川柳の魅力について語られる。

○八木 千代 第五十三回大会(平成11年)

「自分の居場所、ことばの居場所」と題して講演。川柳は思いやりが根本。対等に普通のことばで話すのが一番なと話される。

○河内 天笑 第五十六回大会(平成14年)

「ユーモア川柳」と題して講演。川柳作家はみんな哲学者でもあると述べられる。

(文中敬称略)

麻生路郎先生が招かれて青森を訪れてから51年目になる。今後とも川柳塔社の皆様には、様々な機会をとらえて青森を訪れて下さるよう、お願い申し上げます。



小島蘭幸選

吹田市 山本 希久子

ゆつくりと季節に添うている命

住み慣れた街と波長が合うてくる

年改まるも少し粘ることにする

占いの晩成運を抱いたまま

一発逆転狙うジョークをふところに

相性の悪いお方と雨に濡れ

羽曳野市 三好 専平

歩いても歩いても星がきらきら

じつとしている雲をじつと見ている

だれもこないで絵を描いている

ぼろぼろの心のとげがとれない

きつねの声がする丹波の黒豆

いい人はいいね伊豆の海を見にゆく

大阪府 谷口 義

無神論者でぼつくり逝った父

金曜日あたりは烏賊を剥いていた

茹玉子誰も信用していない

腑に落ちぬ位置で桜が咲いている

どさくさにまぎれて後期高齢者

神さまのキャンセル待ちをしています

寝屋川市 籠島 恵子

ストライクゾーンと知らず立っていた

千枚田の雪の景色を思うなり

ストレスを溜めて無口はないだろう

カタカナで返されてきたア・リ・ガ・ト・ウ

だまし絵は時間をかけて解きましよう

身を二つに折って泣く我が家の天使

大洲市 中居 善信

古希過ぎて図太くなつたと苦笑

燃え尽きるほどの仕事はしていない

これからは良くなる事は無いと医者

圧勝のそのうち内輪もめ起こす

たつぷりの時間へ何も浮かばない

やや左歩いて怖いものがない

堺市 栗原道夫

鼻の目からあふれている涙
挨拶を返してくれる電柱よ

早朝出勤缶コーヒで暖をとる
ジョギングは温くなったらやるつもり
春よこいメダカの壺の薄氷

むつかしい顔で表彰してもらう

和歌山市 牛尾緑良

線香の煙よ壁を這いのぼれ
食卓の手袋は手の形して

なさけなくなるまで泳いでいる金魚

西宮市 吉井菜々子

コーヒーと冬のベンチがお気に入り
挫けないように磨いている奥歯

ポストにも怯む対人恐怖症

航行の海から届くおめでとう

鈴の音のように笑っていい兆し

ひよっこりと亡祖父に会えそう宵戎

篠山市 酒井真由

そつとつまむ元旦の塵ひとつ
初春のなぞなぞ遊びきりもなし

城のある風景奴風競う

ほのぼのと交わす新年おめでとう

うしろ手に包み隠しているヒ・ミ・ツ

とんがつていないで跳ねてみてごらん

和歌山市 古久保和子

手に受けて少しうれしいぼたん雪
罫線の粗いノートが都合よい

朝刊も夕刊も底冷えがする

正月は五臓六腑の定休日
少しづつ時代が遠くなる賀状
一兵卒だとは思わぬ一兵卒
四コマ目だけど結論まだ出ない
垂乳根であつたと母の名を刻む
古稀超えて選ぶ私のベストテン

米子市 竹村紀の治

肝臓の息災願う初詣で

厄除けの札を貼りたい活断層

スケジュール病院の日と句会の日

目出度さはひとり分でも屠蘇祝う

本音より弱音が酒を恋しがる

喜寿の歳無事終えて聴く除夜の鐘

藤井寺市 太田扶美代

たぶん嫉妬だらうみかんを投げてくる

たましいもそろそろ古稀の色カタチ

充電したらまだまだ使えそうジョーク

お正月編物三昧してました

雲に乗る話ときどきしています

パースデーケーキしつこく歳を聞いくる

和歌山市 木本朱夏

あかぎれの亡母想いだす寒の水
生い立ちを語る椿が熱つばい

私にも妻の時代がありました

風揚げの父少年の目に戻る

臆病になつてしまつた曲がり角

胸の火を鎮める墨を磨つてゐる

尼崎市 長浜美籠

柚子風呂に手足のばして年を越す

謹賀新年ニューヨークから写メールで

断捨離の中にも思い出がキラリ

手相には出ない私の苦勞性

一枚の賀状と冬をあたたまる

楽隠居にはほど遠い予定表

河内長野市 山岡富美子

ゆで卵つるり正攻法でゆく

誤作動がふえて回路が狂いだす

着膨れてまだ外せない鉤カッコ

情報 of 樹海で迷う正誤表

少しなら走れる脚をもつてゐる

ごみ袋の余熱はわたくしの微罪

鳥取県 斉尾くにこ

語られて語つて何も残さない

たいせつな今たよりなく過ぎてゆく

手の届く範囲となつてはしやぎだす

またねって枝先揺らしたのは風

灯を消せば電飾の家の淋しさ

雪の日も胸にある星の刻印

富田林市 中井アキ

息子三人生んで他人に差し上げた

カラオケ大会ドレス一枚増えました

サヨナラの辻でおんなを捨てました

恋唄を覚えわたしも浅葱色

思考回路少しずらせて起き上る

賞味期限過ぎて優しくなりました

橿原市 安土理恵

老いの坂だれかが押してくれている

雲になり象もキリンも旅途中

景色ばかり愛でて帰つたフルムーン

気がかりのどうにもできぬ持ち重り

老斑をしみじみこれでいいのです

こだわりの酒はゆつくりあたためる

出雲市 伊藤玲子

沢山の褥りに窪む宮の段

絆揃うどの婿殿も酒が好き

豪快な新春酒が底をつく

遠い日の頬ずりしたくなる手紙

薄水をバリバリ夢とランドセル

どつぷりと川柳漬けで呆けませぬ

吹田市 瀬戸 まさよ

端っこに座れてホッとする電車

さようならよりもバイバイじゃあまたね

あの人の話あなたにだけできる

お互いに歎き励ます古稀傘寿

福袋買うお正月汗をかく

台と丘地名定着半世紀

川西市 西内 朋月

期限切れ目を閉じてから食べてみる

赤旗が幅を利かしていた戦後

徳利を振ると悲しい音がする

病院の廊下が聞いている噂

幸せはふつくら焼けたオムライス

ぼつくりを願う裏にもある未練

島根県 伊藤 寿美

意地っ張り独居九年を支えてる

平均寿命後七年を思案する

流されぬ杭がまだある日本海

ハダシのゲン脱原発の街で死す

BSで独りニューイヤークンサート

太陽族だった少年老い易し

和歌山市 福井 菜摘

結び目を少しゆるめて子を諭す

子の目には映らぬ母の匙加減

ふと風の優しさに遇う一人旅

体温が伝わる友の金釘流

ライバルと以下同文という平和

凜としていたい心に花を活け

神戸市 伊勢田 毅

傷跡の過去は言わない父の背な

生々流転余生しつかり生きている

湯豆腐のおかわりをする京の景

女系家族父とペットは輪の外へ

党梯子巧みにバッジ離さない

バラ撒きに白蟻諸手あげている

三田市 北野 哲男

初孫が二人に呉れたお年玉

朝市に母似の婆々の頬かむり

三人が住み分けている狭い家

詩の本を借りたまんまでお見送り

ビルの谷間張っている鬼瓦

節料理終えて包丁逆さ吊り

大阪市 榎本 舞夢

長い年月やつと自分の居場所知る

物忘れしてから喧嘩しなくなり

目の術後部屋が綺麗になり出した

八十路来て年玉もらうこの至福

かに鍋でてんやわんやのお正月

好天気初出席は着物着て

松山市 高橋 宏臣

裸木は仮の姿と芽を愛し
酒瓶に一輪の薔薇赤く咲く
まな板の上には風が寄ってくる
黒白をつけた白が汚される
冬の花びらよ散れ暖房の部屋
遠霞とにかく馬に乗ってみる

堺市 村上 玄也

ソファよりやぐら炬燵が落ち着ける
戦争を知らぬ世代の主戦論
駆け足で時間が過ぎて行く余生
自尊心押さえて世間広くする
度の合わぬ眼鏡で世間量けて見え
免許証返せと周囲喧しい

大阪市 川端 一步

定年が昨日と思う十七年
年金のそろそろ元を取り戻す
甘い酒飲んだことありもう時効
お城から抜け道行くと兵の墓
投げ出した右手を左手が叱る
あの世でも話題はきつと原発禍

堺市 柿花 和夫

中村屋の見栄に覚悟を垣間見た
雪国の我慢飯設で春を待つ
日溜りの笑顔の中に居る安堵

冬薔薇に闘志を貰う万歩計

ゆつくりと生きてせかせかと終活
原点に戻りたくないブーメラン

堺市 奥 時雄

欲望も希望も同じようなもの
ジーンズもダウンも着ると放せない
靴下を穿いて眠ると癖になる
貼るカイロひとつ立派な暖房器
酒だけで冬凌ぐのは無理となり
本年も掲げる度胸ない国旗

奈良市 山本 柳昌

今日の無事朝日に祈る白い息
美しい光は神のメッセーじ
神頼み少うし肩を軽くする
天界で神がタクトを振っている
神さまも人気不人気あるらしい
今少し神と問答してみたい

鳥取市 森山 盛桜

遠目には我が家も美しく見える
秘め事も書けるぞ消せるボールペン
もう遅いオートロックが閉まる音
特大のチラシ見るだけ見て終わる
袴を脱いだ途端によく駄弁る
発泡酒で酔える体に進化した

出雲市 竹 治 ちかし

北風へ向き合う気概消えました
骨抜きが進む政治も人間も

こころ残りとても断捨離できません

鳥取市 福 永 ひかり

忙しさ愚痴を言つてる暇はない

約束を待って一日棒に振る

割れた皿ほつておこうか繋ごうか

口外はできない話肚で聞く

上げ潮へ向かう笛だと信じたい

ならぬことはならぬことだと教え込む

大阪市 井 丸 昌 紀

ご機嫌を確かめにくるリトマス紙

点数を稼ぐのが好き友はなし

不景気にごみが少なくなつてゆく

声なき声聞こうとはせぬ国に住み

囲炉裏端ふわり心も暖まる

コンビニの灯りにほつとしてしまう

和歌山市 堀 富美子

据え膳で子に招かれた大晦日

置き場所を代えたと諭吉見失う

老いの字を塗り潰してたスケジュール

冬冷えに私のハート春が棲む

子にモザイクをして翔んでいるスリル

いっぱいのお会いを呉れた闘病記

朝酒と朝寝を乗せてフルムーン

少しずつ荷物が減つて目的地

正論が我だと思う日の若さ

生かされて一億二千万の一

台所に現神さまが居る平和

何もなしイブも晦日も古い二人

堺市 澤 井 敏 治

あつ春が来ている福寿草の蕾

新走り知らずにヌーボへと騒ぐ

幸せは手のひらにのるほどいい

手刀を切る作法にもいま昔

失うまい人の叫びを聞くこころ

年賀状悪い話は書いてない

大阪市 大 川 桃 花

唐突にスイッチ入る泣き上戸

よろしくと肩たたかれて共犯者

冷蔵庫の掃除今夜は寄せ鍋だ

新年の暦受診日から埋まる

カップルの女を見てるおんなの目

四角い顔ばかり並んだビルの街

奈良県 渡 辺 富 子

妻の笑みあたり一面春にする

歳事記を追つて夫婦でよく遊ぶ

だんだんと幸せ芝居うまくなる

尼崎市 春城年代

新刊書わがものにして足輕し

閑節も軋みはじめる十二月

そとは雨ころほぐれる大根煮

囀りは庭を訪ねるちちかははか

兆から京と思いがけない世に生きる

五七五に遊んで貰う掘炬燵

香芝市 大内朝子

ひと好きの鼻がどんどん丸うなり

ガンの友入院先を教えない

寒い日は繁昌亭の輪に溶ける

華やきの風を招いている笑顔

お人好し人の涙もすぐ背負う

思ひ出を小出しに日日をあたためる

竹原市 岩本笑子

落葉掃くたつた一人の墓參道

何があつたの救急車 消防車

朝昼晩一回位休んでも

定年がほしいと思う妻の座よ

檸檬はレモンいつも優しい顔をして

背を向けて猫の昼寝に付き合うか

出雲市 小白金房子

初もうで大黒天の慈悲仰ぐ

初暦めくる流れの中に立つ

先人の学びを吊るす新春の詩

豊の秋さげて年客新春を呑む
定紋の風呂敷にある亡母の声

落葉道続く地球を踏みしめる

京都市 高島啓子

今年も生きるレンジ買い替えて

空気読みながらゆつくり拭く眼鏡

照準はびたりあなたの胸板に

ものの弾みで明るみに出る隠し事

水が澄むまで知らないを押し通す

高飛車に言われてからの雪催い

藤井寺市 鴨谷瑠美子

てのひらを合わせ余計な欲すて

後ろ姿を見てくれるひと居るかしら

かの人の賀状もまじり夢しきり

消えてゆく時を知ってる冬の虹

セクター試験平成二十五年なり

光もの一切避けて薔薇を挿す

松江市 三島淞丘

腹決めた亀がゆつくり動き出す

掌に運も寿命も握りしめ

喜寿過ぎて遊び心はいま盛り

暮らし向き変えねば金が底をつく

仲の良い家族が踊る洗濯機

削除キー押して思い出軽くする

唐津市 井上勝視

灯明に父の口癖思い出す

右腕も内部告発増えて来た

許せない復興詐欺の記事を読む

振り返る懺悔両手にあふれ出す

口ずさむ哀愁列車老いたナア

唐津市 坂本蜂朗

妻の手の上を承知で酔っている

雪明りちよつと嬉しい千鳥足

まだまだと優先席を避けている

取り敢えず浅漬を出すいい笑顔

高慢な犬だ血筋がいいらしい

唐津市 樋口輝夫

知ってるが私知らぬと姑を立て

初句会凡句を友が褒めちぎる

オレオレと送金せがむ嘘の孫

突然のひどい眩暈が週に二度

オバマ氏の勝因風の事後処理と

唐津市 山口高明

迎え撃つ気も無いくせに火器戦車

圧勝と浮かれる党に見ぬアウラ

研修の社員蓮華座組まされる

屋根裏のユートピアンは四年生

世の暗さ闇の深さが答です

熊本県 岩切康子

曇天に頭も曇る多忙な日

車のライト下サッカー指導される熱

出遅れて先ず県外へ出す賀状

餅もお節も買って待つお正月

三ヶ日食欲あつて有難い

松山市 古手川 光

一足す一一にもならぬ老い二人

ふる里と昔話をして帰る

おまえも歳をとつたなあとふる里

真つ赤な夕陽に学ぶ人生終い方

図太さを持つてこの世を生き延びる

西予市 黒田茂代

一日一回ムンクになつてみたくなる

マリオネットころの乾き訴える

もう誰もわたしを庇つたりしない

暖房の部屋で温もらないころ

雪の白さに魅入られて人嫌い

高知市 小川 てるみ

元旦の物音しないのだけさよ

節分のひと日違いの冬と春

風呂敷の穴から洩れていた事実

ささやかな希望へ老いの灯は消さず

寂しさは亡母の笑顔に会えぬ里

高知県 小澤 幸泉

ペイルート砂漠の神は血がお好き
自叙伝になるほどでないわが歩み
門構えのぞいてみたいひとがいる
聞いてごらんこの古里に春の歌
引き出しのこだけカギがかけてある

東かがわ市 川崎 ひかり

砂の城まだ安泰を信じてる
丸い輪がいびつになつた代がわり
一病と握手しながら生きている
正月もいつも通りに菓のむ
酒ぐせがまた厄介を背おいこむ

東かがわ市 清川 玲子

連れ立つて今年も出来た初詣
少々の酒も付き合う年初め
年賀状恩師もうれし無事らしい
元日の朝にパン焼く孫も居る
平凡に過ぎる日記は白いまま

黒石市 佐藤 古拙

廃校の土台の底のよいとまけ
振り袖にいたずらをする名残り雪
カラフルな画像に飽いて墨を擦る
それぞれに土筆が伸びる土手の春
夢のある風船玉だ壊れない

黒石市 相馬 一花

どうしても子供の顔に似るこけし
ミスコンの鎖骨同士が闊歩する
学校をさばり私塾で力つけ
細く食べ細く飲んでもまだ太る
犬猫も駅長をする日本国

平川市 小寺 花峯

湯上がりの爪は笑つて丸く切る
長い助走から希望を垣間見る
捨て切れぬ種です明日を持ち歩く
正月三が日飲んだだけです手を合わす
一杯の冷酒明日を丸くする

弘前市 稲見 則彦

無伴奏チェロと向きあう膝小僧
ドーナツのB面聴かぬままでいる
大丈夫ママの言葉は万能さ
蜜入りの林檎囁く恋である
スタートは一緒でしたね同期生

弘前市 今 愁女

連日零下温暖化する所為だとは
屋根雪の落下轟音耳ふさぐ
のんのんの雪みて朝の腹ごしら
マンションの住まい羨み雪を掻く
正月だけの賑やか子らにお年玉

弘前市 岡本花匠

七種や臓腑の驕り戒める

延命の追い風と生き恵比寿貌

亡母の世をおしんとくらべ納得へ

振り返るニトロ人生余生楽

磊落の人もびつくり雪の嵩

弘前市 須郷井蛙

風船が一つ子等がよく遊び

体操を忘れ腰痛攻めて来る

定年で妻の手ほどき台所

農学校先が見えないT P P

三次会財布の底が抜けていた

弘前市 高瀬霜石

勲章にいちばん近い頑固者

買い換えか修理にするか妻に聞く

頼む方も断る方も嘘をつく

大切なデیفエンス意地を張ることも

人間は道を選べるはずである

弘前市 高橋洋子

どの児にもきらつと光る夢がある

ここの一番母の一声夢叶う

父と子の真つ向勝負に見る脱皮

歯応えが好きで友達五十年

荒海に命を懸ける大間崎

弘前市 富士慕情

注連縄の太き氏子の心意気

新しい風に乗りたい津軽風

初詣で雪の階段ズッコケル

体裁が悪いが直ぐに起きられぬ

冬の絵を剥がして春の絵を描く

青森県 松山芳生

じわじわと呪文が溶ける舌下錠

C Dのお経に欠伸するホトケ

一目惚れもうブレーキが焼けている

どこまでも続く枯れ野の癌告知

胃袋も魔法の水を飽き出した

札幌市 小沢淳

メドゥーサが地下宮殿の土台石

好きなもの大事なものはそつと置く

妥協したあたりに僕が浮いている

半眼で世間の穴を覗いてる

ネジ一本緩んだままで走ってる

札幌市 三浦強一

のど飴をなめて出番を待つ披露

補聴器を味方に趣味の輪に入り

若かった愛だけだったプロポーズ

命の火いつかは知らぬドナー待つ

尖閣は水鉄砲で護ります

東京都 岸 野 あやめ

富山市 島 ひかる

嗚呼夫婦隙ある様でない様で
まだ恋を知らないらしい正義漢
野心もう萎えたか髪も薄くなり
眠れない真夜中葛湯などいかが
大根に辛味足りなくなるお国

横浜市 小 野 句多留

もう徴が生えております目標は

可児市 板 山 まみ子

スマホ以降地球は軽くなり過ぎだ
初詣善男善女振っている

一〇〇均で購買欲を籠に持ち

五輪誘致他人まかせの都市砂漠

横浜市 菊 地 政 勝

倅せの動悸まわりを温くする

犬山市 金 子 美千代

フクシマへ無事に戻れる日の暦

再建へ握りこぶしが熱くなる

薄味も愛情として受忍する

個性だなカレーライスにソース掛け

川崎市 三 浦 き ぬ

門松の橙プラスチック製

高値だねうなぎはやめてあなご買う

一句だに浮かばぬ時は寝るとする

大正に生まれここまでよくぞ生き

母の年の倍も生かされまだ死ぬ

叔父の絵の談山神社佇みて
野々宮へ急ぐ日暮の竹の道
叔父の絵が今年も居間を春にする
世の中の汚れを癒す銀世界
好奇心一人歩きをして困る

犬山市 関 本 かつ子

手作りのお節娘も母の顔
鶴亀の掛軸部屋を引き締める
同性に好かれる人は本物だ
物静かだけで魅力のある男
安売りのバナナ裏から先に見る

犬山市 吉田 幸子

芸達者弾ける若さ持つ秘訣

ウォーキング三十分の治療薬

血圧も下がり穏やか旅の宿

間一髪ママの大声救われる

年の始めはいつだつて胸躍る

愛知県 早川 遡行

楽しみを膨らませ解く包装紙

遠回りでもトンネルの無い道路

水を買うまでに健康気をつかい

お荷物にならないようにフィットネス

目覚めると圧勝だった自民党

さいたま市 星野 育子

平凡に生きる案外むずかしい

カラスが止まるペットボトルの風車

嫁妻母という広い守備範囲

見栄も義理も分かっているのし袋

議員の目線相手次第で上下

京都市 坪井 孝一

夢植えるきつと無色の花が咲く

シューウィンドーマネキン少し弾み過ぎ

将来がマークシートで決められる

大空には塩のおにぎりよく似合う

お互いを悪友にして無二の友

京都市 西村 益子

孫達に愛ひとつまみお正月

お年玉相殺してる親同志

甘酒を目当てに歩く初詣で

頑固さも粘りも捨てた年女

来年も来られますようお賽銭

京都市 藤井 文代

許すときなぜかやさしく意識なく

毒舌はどん尻からが効果大

明日もと鏡に元気映し寝る

気がつけば貰った善意置き忘れ

叶う額決まったらとおさい銭

京都市 榎本 宏子

わたくしの鮮度を保つ好奇心

強い心になろうと聖書正信掲

ありがとうで済むはじめなら安いもの

お金ある人ほど避ける勝負事

稼ぎ以上の暮しをさせた妻の智恵

亀岡市 井上 森生

脱皮する蛇が今年の合言葉

待つことも待たれることも糧となる

限り有るいのちに限り無い幸が

もしかして次には夢のあるネタか

失敗も発見もある老い最中

長岡京市 山田 葉子

大阪市 奥村 五月

赤ちゃんが笑うみんなも笑ってる

いただいた幸せ少しお裾分け

昨日までを疊んだ旅が背中押す

これで普通みんなそれぞれ思ってる

いきなりのプチッ少年の曲り角

大阪市 池上 清治

満員電車今は無理せずやり過ぐす

就活に縁故の無理はもう利かぬ

新婚の賀状愛児が満ちあふれ

晴れ着写真写し下手だと孫ぼやき

気が晴れぬ時は回転寿司に行く

大阪市 江島谷 勝弘

走っても走っても追いつけぬ夢

また一つ追いかけるモノ見付け出す

朝六時鳥のさえずり聞いてやる

可憐さが忘れられないサユリスト

団子虫平気で掴む孫えらい

大阪市 榎本 日の出

原発の本音を喋る人欲しい

顔と手の皺さえなけりやごまかせる

年齢をかくしてみてもご老人

十三回忌片思いだけ続いてる

グチ聞いた耳を第九で慰める

出稼ぎの父がおせちも連れてくる

ばあちゃんの仏の顔も底をつく

目と鼻で試食してます百貨店

川柳で錆も落ちます気も晴れる

きつちりと効き目があつた副作用

大阪市 笠嶋 恵美

ありがたく寺の鐘聞く朝六時

第九聴く友も私も無事生きて

何でやろ掃除とろとろ持て余す

子等が来て年改まり脱皮する

初詣で神がてんでこ舞してる

大阪市 神夏磯 典子

よく伸びる新芽が背を押してくれ

孫が呑む地酒仏さん欲しそうだ

酔らつきよのほどよい味に癒される

正確な時計が騙す時もある

宝石の力を借りている喜劇

大阪市 熊代 菜月

欠伸して明日を思う日向ぼこ

四つ割りの白菜買って一人鍋

あきらめず頑張りすぎずまた一年

友の数増えて私の宝物

救急車近所の人が出迎える

大阪市 古今堂 蕉子

夢は叶うと叶うた人が言うている

生きてはるいや死なはつたとテレビ見て

一族の頂点になり順を待つ

呑み込んだり吐いたり言葉つて不思議

大事故はしないコツコツ傷つける

大阪市 小谷 集一

おじいさんと声かけられて振り向かず

知らん顔してるがみんな知っている

叱られたことがないから叱れない

中の下の暮らして人の和に馴染む

よく回る独楽は孤独を知っている

大阪市 近藤 正

ブータンに思いをはせる幸福度

彬の碑じつと見守る百日紅

大手振り安保安保とオスプレイ

消費税上げて景気が良くなるか

お水取り春はまだかと二月堂

大阪市 坂 裕之

芸人のいじめ笑つて見る怖さ

寒くても仕事だったら起きられる

難かしい方を進んで取る勇氣

良い人になれなくつても生きてます

現役を続けさせてと絵馬に書く

大阪市 佐藤 忠昭

四家族集めて今日は新年会

今年から孫にも抱負語らせる

今年のメインディッシュはふぐ鍋だ

持ち寄った土産山分け散会に

ばーちゃんとコブ茶飲んでも無口なり

大阪市 澤田 定子

大窓越し自然合掌大落暉

暖房より心地良い冬日向

振袖が行列並び事始め

あかぬけて帰省隣の娘さん

物忘れ脳に故障がきたらしい

大阪市 田浦 實

生駒越え巳年を祝う初日の出

初詣で願い事より先ず感謝

御年玉渡す役目は譲れない

三室戸寺の蛇神さまへ願脱皮

ストレスが鏡の顔も引き締める

大阪市 津村 志華子

饒舌の隙間にぼろり出た本音

生きなはれエールをくれる寒の月

もう米寿ならば卒寿に立ち向う

家計簿の始まり千支の守り札

約束を消してしまったEメール

大阪市 津守 なぎさ

海外に出掛ける親に子もセツト

温泉で過ぐす格安情報誌

風花と仲良しになる露天風呂

風の子があふれて活気づく川原

太陽が真つ赤に燃えたバスツアー

大阪市 寺井 弘子

梅らつきよう持ち味生かす母の味

イケメンに席ゆずられて鏡みる

くど過ぎると亡母を叱った今わたし

涙かれひとり見つめる雪の華

古里の澄んだ青空遠くする

大阪市 原田 すみ子

同じ事娘が言うと聞く夫

同じエリア生きて思考も固定する

負けたこと認めぬ自分居て自分

どこ切つても大阪のおばちゃんである

つまずいた場所にわたしの色がでる

大阪市 板東 倫子

初詣神に不平を申し上げ

節電のためと称して早寝する

就活も婚活もゼロ春の鬱

原点に戻れと諭す除夜の鐘

不況下に何故塔ばかり建てたがる

大阪市 平嶋 美智子

少しだけ浮かれた初春を横に置く

小正月終えて一氣に前を向く

古い二人敵しすぎると雪だより

ああ古里の朋友みんな古い最中

離農する決心したと同期生

大阪市 伏見 雅明

親の愛あふれて子ども溺れさす

海外を日本語だけで押し通す

神様も得意分野があるらしい

めでためでたで職場の華が攫われる

オレオレを笑い飛ばした河内弁

大阪市 升成 好

もう一度探してごらんちゃんとおる

前ばかり気にし気付かぬうしろ指

それなりに老いるに病氣多すぎる

他人にはあつても僕にないチャンス

お日様に甘さ貰った吊し柿

大阪市 松尾 柳右子

旅プランそろそろ実行しましょうか

若者は車中けいたいすぐ出して

楽しみの連続ドラマいまひとつ

夫留守に爪切りの音こだまする

外出の服選びにも楽しみが

大阪市 山崎 君子

堺市 遠山 唯教

シクラメン花にも命新春を
娘に感謝大きな鉢にシクラメン
新春も二日となれば忙しく
“毎度ありッ”酒屋の兄ちゃん好男子
外野席いろいろ楽しいおしゃべりを

大阪市 山本 加お里

親看取り夫看護にある悟り
抱き起す妻は力を残してる
守るもの夢中にさせる力瘤
小話が心の扉あけてくれ
何げなく始めた趣味が心地よい

大阪市 吉内 タカ子

据え膳の味をかみかみ指を折る
孫五人私のおんぶ背が高い
晴れ続き今年経済はれ期待
験担ぎ倒れぬ前の干支守り
初出会いは何年振りねモカを飲む

大阪市 吉村 一風

おかえりと孫に言われて弾み出る
老いてなお矢印ほしいなと思う
お若いと言うて米寿をよろこばす
子を抱いた女の人は強いなあ
おもしろいやりと人にあげとなる

新年の太陽にまず手を合わす
恵まれていると喜び鈍くなる
健康にする儉約が続かない
勤行の悦びに灯が揺れている
残照を歩き続ける影ふたつ

堺市 大久保 のん子

生きるのも死ぬのも同じこわざです
うしろには夢がないからふりむかぬ
風の音散るはなびらの吐息とも
こだわりを少し捨てると生き易い
私を根こそぎ変えたいい出会い

堺市 大隅 克博

二人より一人の方も楽である
噛み砕き言えば焦点暈けてくる
まだ若いのだろうしもやけが出来る
気に入った器が先に割れていく
元気かと聞かれ元気と答えてく

堺市 荻野 像山

やせ我慢杖を使わず転んでる
働いて飲めて吟じるいい巳年
ねんきんで描いた老後甘かった
熱燗でけろっと治る腹具合
特別な味はないけど美味い河豚

堺市 加島 由一

堺市 内藤 憲彦

生きていることありがたい初日の出
命がけなら叶うと言われ諦める

寝込んだら終わり毎日ウォーキング

初夢は水着の妻と浮き輪の子

妻がいてくれたらなああと独り屠蘇

堺市 源田 八千代

三箇日も介護にいとまありません

蜷梅も寒梅も笑む春の庭

部活止め元に戻った肌の色

緊急時当てにはならぬ子ども達

ご近場に看護士さんが居て安堵

堺市 齋藤 さくら

二人きり偶にはいいな寝正月

福袋並んで買ったことがある

三ヶ日過ぎてても御節売れ残り

三番目に婆ちゃん好きと言ってくれ

体罰に愛情あると思われず

堺市 志田 千代

お医者さんとしばらくの川柳談義

鈍くなったそして好々爺になった

読書家で世事に全くうとい人

じゃれているタマの老後も話しく

膳本に今も残っている絆

別れ道とにかく君が先に付け
面影があると言われて若返る
通販の御節料理に慣らされる
雪間から祈りに満ちた福寿草
原点にいつも戻れば良いのです

堺市 西村 りつえ

まだでかい夢を追ってる老いの坂

血圧計の機嫌とりつつ深呼吸吸

マイナスも歩き続けた足の裏

今年こそ幸多かれと天気図に

何もせず疲れ飛ばした晦日蕎麦

堺市 矢倉 五月

パセリ添えチョット格上げ独り膳

介護車がやたら目につく街となる

ガムスルメ噛んで惚けない心意気

お日様を背なに鼻歌出る散歩

へビは神様になれると年女

池田市 栗田 久子

合わす手は神妙神にまず二拝

控えめな美徳新年への感謝

何ほどのこともないけど誕生日

意味もなくうれしい時がたまにある

立春と聞けば心もほぐれだす

和泉市 横山捷也

足裏が覚えてる春種を蒔く
筋道を通すと腹が空いてくる
軸足をどこに置こうか古希の坂
少しづつ老いを感じる初鏡
暮らし向き問わずに古希の同期会

泉佐野市 山本蛙城

買い癖に買うなと別の僕が言う
仏壇を出て来て夢で皆燥ぐ
卒寿過ぎオウと答えることばかり
来客がなくて住みよい紙まみれ
巻脚絆知っていますか若い衆

茨木市 島田誠一

初詣人人の背を拝み
家計簿に疲れた妻の長吐息
願い事ずしり社殿に三ヶ日
手を抜いた犬がのびのびよく育ち
出世道随所に踏み絵埋めてある

茨木市 藤井正雄

子の無理を聞いてた頃が懐かしい
花言葉鈍には無駄な言い回し
行間の愛に気付いてくれません
へそくりを予備費に春の独り旅
投函の帰り茶房のクラシック

交野市 森本弘風

陽を吸ってほんわか布団温い夢
静けさになった二人にまた戻る
念願の年玉貰い孫元氣
あの人も元気で御座す年賀状
風邪をひき句想産まれた五七五

河内長野市 植村喜代

お元旦ゆつくりしてから祝いましょ
体には負けたくないしがんばろう
外はいいちよつと歩けば気分かわる
自分から掛けぬ電話を待つお人
成長の早い孫達の年賀状

河内長野市 梶原弘光

来る年も心の窓は開けておこ
噛み合わぬ夫婦いつもの早合点
前屈の目盛り去年と勝負する
春よ来い土手の土筆もスタンバイ
六十億の歯車担ぐこの地球

河内長野市 木見谷孝代

ご褒美の拍手子どもの芽を伸ばす
見捨てられていない証しの小言聞く
親が逝き小言じわじわ効いてくる
菜園を餌ない冬の鳥に貸す
福袋並び今年の無駄を買う

河内長野市 黒岩靖博

河内長野市 村上直樹

出金に使途を聞かれる高齢者

漫才と間違えられる大阪弁

お早うさん儲かりまつかまあまだ

振り返り器用に生きたとは言えず

天狗鼻かざす御人に近寄らず

河内長野市 坂上淳司

ケータイで繋がれている恐妻家

小言ならまだましうちは無言劇

注連縄を緩めて欲しい男岩

とびぎりの音痴も持てる酒の席

都都逸を教えてくれた四畳半

河内長野市 谷久美子

銀婚を越えて金への共白髪

寒中に一咲き凜と梅の花

抜け殻がまだ温い子の脱皮

心無い世辞が私を迷わせる

口答えかわいけれど腹も立つ

河内長野市 松岡篤

おばちゃんの集いアメちゃん飛び交って

犬よりも僕の散髪安いです

参加賞より気の利いた努力賞

コンピュータ古い頭に容赦なく

名刺など無いから和む老人会

誓い合う手と手の温さ初日の出

金運が舞い込むらしい妻巳年

囀りと思えば楽し愚痴小言

泣き笑いあつという間のエピソード

口笛を吹こう佳日がきつとくる

河内長野市 山室光弘

国訛り抜ける頃には都市砂漠

推敲で語彙の少なさ苛立ちぬ

喉元を過ぎて小言がかくれんぼ

晴れやかに妻の病の良き日には

満願にいつも届かぬ十三夜

岸和田市 堤 檣代

もの思いする暇もない世の中は

携帯が忙しくなるお正月

餅腹でお腹の虫も眠つてる

出来ないわ認めたくない我が老いを

デイサービス一日遊んでもらいます

岸和田市 岩佐ダン吉

勘よりも汗にかけたらどうだろう

頼るのは自分それでも空仰ぐ

思ったまま言うていつでも少数派

また却下それでも僕は怯まない

謝罪ぐらい話し言葉で言いなさい

岸和田市 森 元 ふみよ

新幹線世界に誇る遅延なし
TVで学んだ智識すぐ忘れ
広告紙飽かず読んでる三ヶ日
若者が一丸と成り箱根越え
年重ね神社のルーツ学ぶ今

岸和田市 雪 本 珠 子

理由あつて晴耕雨読遠くなる
生きている同じ淋しさ分け合つて
思いきり泣いて悲しみ吹き飛ばす
気が付けば亡き娘の服を買つていた
魂がよどまないよう祈る日日

四條畷市 吉 岡 修

いい情報届けてるのに気づかない
目配りも気配りもした負けはせん
懐のピンチに誰も来てくれぬ
丸裸の孫にチューしたもう最高
きつかけをつくる努力をせなあかん

吹田市 太 田 昭

八十路越え十年日記買う気力
鈍行からお国訛りが降りて来る
やんちゃくれの友と気炎の酒を酌む
満点の星に拍手をしてやろう
遮断機が降りて鳩尾冷えてくる

吹田市 大 谷 篤 子

辛いことあつた一日笑顔です
素通りの出来ないパン屋でパンを買う
強がりを言つて淋しさ深くなる
一人居に相槌ほしくて草を引く
近すぎて偉い人とはつゆ知らず

吹田市 木 下 敏 子

福の神に認めて貰うほど笑い
初詣で地球の無事を祈るだけ
亡夫の声無理をするなと夢に聞き
うろうろと元気であれば欲は無い
花の名を覚えカメラに入れて見る

吹田市 須 磨 活 恵

欲ばりで花も団子もだーいすぎ
春かすみ眼科耳鼻科と忙しない
思い出も記憶も暈す春かすみ
今しばし片意地を張る冬將軍
風やよい春の扉がひらきだす

吹田市 野 下 之 男

原発はおもちゃでないよ活断層
アカデミー賞妻には頭上がらない
広島の子少しも年取らぬ
開戦日校庭はだし冷たかつた
鴨の子も母を信じて一直線

高石市 浅野房子

高槻市 佐甲昭二

わたくしの生家にもいるでかい蛇
太陽を拝んで日々の家事こなす

あと少し心楽しく過したい

雑煮餅喉につかえる事も無し

百人一首覚えていると自慢する

高槻市 井上照子

風の中募金を叫ぶ声寒い

検査入院生きる願いの麻酔薬

看護師の笑顔に甘え肩借りる

言うは易い復興時は流れゆく

お正月曾孫よちよち晴れ着映え

高槻市 指宿千枝子

元旦の空に日の丸掲げたい

初空にただあるがままと一札

さすられるビリケンさんもご満足

ビリケンさんさする私も福もらい

お日さまに元気をもらう暮しです

高槻市 片山かずお

強すぎる愛が妬心を呼び起こす

やればできる子に産んでると母は言う

手を抜いて何度も続くやり直し

雨の日は雨のトレモロ聴いてやる

身のほどを知れと強気を諭される

隣家との絆を保つ低い塀

膝癒えるきざしに弾む万歩計

温い風入れる隙間は空けておく

気の重い約束握手繰り返す

ほいほいと引受けてから思案する

高槻市 島田千鶴子

除夜の鐘響き空気が入れかわる

お日さまに背中押されて初詣で

ほのぼのとさせる笑顔に座が和む

身の丈を超えて挑んだ日の若さ

吐く息も白く揺れてる寒稽古

高槻市 初代正彦

お陰様平均点で生きている

この部屋は妻も寄せない趣味の島

空の旅つい手を合わす離着陸

正月もせわしい日々の有難さ

のびのびと育て過ぎたか倅達

高槻市 杉本義昭

千秋楽舞台裏にもある安堵

妻が押す歩幅やさしい車椅子

亡母の小道具持つとかすかな息遣い

定年後動かない夫動く妻

よかったね遠い二人に鐘が鳴る

高槻市 富田 美義

渴望の隙間を埋めるメール音
原点に戻るコースをもう忘れ
学歴のギャップを埋める汗の量
紙と札ケジメ付くうち逝く予定
生きている事がトリックにも見える

高槻市 富田 保子

温暖化に早い紅梅凜と咲き
音符など何処ふく風と母の唄
飯の面時々つけて介護する
音立てて飲んだスープは美味かった
見事なり年金泳ぐ初節句

高槻市 峯村 勲弘

ほんわかとさせるぎんさん四姉妹
世渡りは下手省エネは上手です
お土産に宿のタオルとお茶菓子と
ホールインワン記念タオルも雑巾に
ルイヴィトン鞆の隅に栗おこし

高槻市 安田 忠子

夢いっぱい元旦に書く日記帳
川柳の貰って嬉しい年賀状
蛇のような雲に出合った初散歩
流行語うつかり使い歳がばれ
奇天烈な体験できる夢が好き

豊中市 江見 清

乗ってみたい話は三日後に返事
点点で終る手紙の次を読む
つまづいた段差が不思議そうに見る
記憶力を信じ整理に手がつかぬ
カレンダーの丸がわからず日が過ぎる

豊中市 藤井 則彦

ストレスが減って落ち着かない余生
足し算で来た人生に残る悔い
猫までが目を細めてるメロドラマ
母さんの編んだセーターまだ匂う
遠景を見遣る心が生むゆとり

豊中市 松尾 美智代

食文化支えて母のちらし寿し
母から私そして娘へ次ぐお節
とろとろの母のくず湯は風邪に効く
眠る迄ラジオにお守りしてもらう
何もないのにわくわくとするお正月

豊中市 松村 里江

女の業乗せて行きます流しビナ
人恋の風棲む部屋は広すぎる
チョコ選ぶ微妙なところでランク付け
さざえ焼く汐の香りと海女の息
乾杯の泡の向こうに星流れ

豊中市 水野 黒 兎

師のことば伏流水となつて湧く

シャガールの青フルムーンの空の色

マドンナに孫十人のクラス会

常備薬日々記憶力試される

雪の日に素直に溶けるわだかまり

富田林市 片岡 智恵子

事なかれ主義大海に裁かれる

相続と喪の哀しみが絡みあい

子へ孫へ靴すり減つて無位無冠

深呼吸胸にいた悪魔が逃げる

日本国支えた人が減つてゆく

寝屋川市 平松 かすみ

こつそりと買うてこつそり捨てるくじ

毎日が挑戦大台をひかえ

クロスワードあと一問に知恵を借り

脳味噌を掻き混ぜクロスワード解け

じいちゃんのために買いますひなあられ

寝屋川市 森

ひとことのほのぼの拳解けていく

半分こまた半分こして炬燵

被災地の海鎮魂の虎落笛

チャルメラのひびいて寒気団下りる

ささやかが積もった駅の義捐箱

茜

寝屋川市 森田 麗

零れ種愛しいほどの新芽見せ

プードルと孫まるでコントのお正月

孫帰るプードルが未だ起きて来ぬ

亡夫の名で投資の電話留守と言う

肥満度百の金魚一匹存える

寝屋川市 山本 三郎

小粒でも甘いみかんを買い求め

閑古鳥商店街に空き店舗

妻の愚痴聞きながら聞いてやる

哀れみはけつこうですと青テント

葬送の車に手ふるもみじの手

羽曳野市 安芸田 泰子

天命に余生ゆだねてつつがなし

雪景色無口な夜が描きあげ

いたわりが過ぎて弱気にしてしまう

ひつそりと住んで世間に忘れられ

いさかいを避ける手立ての嘘一つ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

日溜りが尖った昨日削り取る

家中の布団干したくなる陽気

孫に会う今日は優しい眉を書く

百均で散歩わたしの暇つぶし

パソコンのひとつマスターした誇り

羽曳野市 徳山 みつこ

蜷梅と南天が来る里だより
緑内障ちよつと休業してみるか
妥協しなけりやマイボディマイハート
広島菜漬闘病の箸元気づけ
痛みの神にもほつこりと煎じ茶

羽曳野市 永田 章司

ツアー客ドル使わずに持ち帰る
国の岐路極論耳に心地良い
鎌首をもたげ世相の裏を詠む
活断層世論氣にする有識者
かあちゃん海外よりも温泉場

羽曳野市 福田 悦子

老人と呼ばれる年の輪に入り
悲喜こもごもニュースは日本駆け歩く
春を待つ桜に雪の綿帽子
困ったら訪ねて行ける友がいる
ランドセル私もあんな日があった

羽曳野市 吉村 久仁雄

老母の耳声なき声がよく聞こえ
ふらふらと迷つて墓地にまだ着けず
耳栓をするそと真実だけ聞こえ
アナログの昔に母は鎮座する
赤い糸よじれて絆太くなる

東大阪市 笠井 欣子

あちこちに痛みあるから生きている
墓掃除済ませてくれた子に感謝
夫逝つて私一人の小宇宙
氣をつけてお餅食べやと来るメール
お正月実家も淋しくなりました

東大阪市 北村 賢子

三が日慌ただしさとあたたかさ
また命重ねる春へ前を向く
だんまりを止そう明るく老い二人
娘を送る父休肝日と言うて
万物が笑える春はもう間近

東大阪市 佐々木 満作

元旦の酒は厳かにいただく
二日目の酒はにぎやかに乾杯
三日目の酒はしみじみと味わう
手乗りインコ妻の頭上で戯れる
菜の花に囲まれ司馬遼偲ぶ会

枚方市 安達 忠央

場の風にいち早く乗る処世術
妻の操縦乗り心地良く五十年
ハイクラス背伸びし続け疲れ果て
その日までしたたかに持つ好奇心
わだかまりそう簡単に消すの無理

枚方市 海老池 洋

一匹と男に生まれ言われない
身長が年々低くなる寒さ
自己申告都合よいよう加減する
臥薪嘗胆笑う日待つ枯木立
例外もあると難病励まされ

枚方市 小林 わこ

眼の前が真つ暗神の悪戯か
良い知恵の浮かばぬ神のお尻ペン
石段の向こう神さま待っている
神さまの手しつかり温めてあげる
氏神さまもそこそこ祝う屠蘇

枚方市 伊達 郁夫

タンポポを摘んで童話に囲まれる
道の雪冬のセリフが積みである
抱き合つて防いでいます隙間風
酒を注ぐ音で命が救われる
ロボットの忠誠心にうろたえる

枚方市 丹後屋 肇

好きという響きハートに絡み付く
元旦の静謐天国の気分
風邪薬飲んで待機の伊勢参り
やんぬるかな男を護りたい後期
初詣妻が阻止する雪の量

枚方市 寺川 弘一

母親はまっすぐわたし愛してた
削除キーでは消せない過去の悔いがある
後悔が遠い記憶を離さない
気力と元氣ライバルからも貰つてる
友が逝くだんだん世界狭くなる

枚方市 二宮 山久

ラストダンス胸の谷間が気にかかり
春風につい誘われるペアシューズ
ひと言が言えないままのクラス会
使つてはならぬ諭吉がある財布
DNA受け継ぐ孫にある自信

枚方市 二宮 紫鳳

手作りのおせちでつなぐ家族愛
暖かい風が吹いてる三ヶ日
おみくじを引いて笑顔の孫二人
その笑顔幸せ行きのパスポート
おせちにも飽きて立ち寄るモーニング

藤井寺市 伊藤 アヤ子

春風が梅の香つれて病室へ
年重ねあの世に近くなつてゆく
明けまして今年も苦勞続きそう
餅を搗き孫が喜ぶ顔見たい
川柳と歌で今年も生きられる

藤井寺市 鈴木 いさお

カッコ良く年取ることがむずかしい
ブランドのセーター買って飾つとく
私の弱味知つて三面鏡
うま過ぎる話に騙されてみるか
締切りが迫ると血圧が上がる

藤井寺市 高田 美代子

原石を信じて磨く温い手よ
牡丹雪にまだためないおんな傘
その辺のはなしは口を濁しとく
末席もいいなと思う温かさ
謎々が解けて漸く春の風

藤井寺市 津田 シルク

山水画一人居るのは私かも
六回目コブラの夢は捨てきれず
先人からのタスキ今風の子が切る
台コンらしひよ鳥達が柿の木で
雪女の嫉妬で雪崩おきました

藤井寺市 増井 ヨシ枝

短冊を水仙にかえ早い春
生命線消えて脱線ばかりする
嫁自慢なんだか裏がありそうだ
富ためて心貧しくなりはった
亡き夫の好きな和服で春彼岸

藤井寺市 俣野 登志子

夫の愚痴未亡人には言い辛い
外孫には甘い爺と婆で居る
目的が決れば行動は早い
野暮用が恨めしいせんたく日和
今暫し古稀の抵抗赤い靴

藤井寺市 吉田 喜代子

菓子キャッチ水上からのサンタさん
痛からう叩き飛ばされてるかるた
諦めた心身元氣うつも去り
亡父命名喜び願う喜寿の年
今日もまた幸色の便が出る

藤井寺市 若松 雅枝

蛇は嫌い巳年の嫁は仲が良い
水槽の金魚大きく冬を越す
でこぼこ道を歩む一人の風の中
外出は医者かポストに決まってる
老舗にも跡継ぐ者が無い悩み

松原市 森松 まつお

楽しみは反省会という会議
二杯目でやつと会話に参加する
取らないからゆつくり飲めと友は言う
皮ひとつ残さずホッケ食べはった
店員の笑顔も酒をはずませる

箕面市 出口セツ子

誕生日生まれてくれて有難う
考える時間作らぬよう多忙
政治より頼りにしてる子とえびす
国民は打ち出の小槌ではないぞ
政治家の描く未来図に夢が無い

箕面市 広島巴子

ひれ酒に酔うてふくふくふく笑い
萩めぐり先人に問う今の世を
厳島壮観鳥の群れ渡る
冬籠り話し相手は仏様
ロウ梅の甘い香りに抹茶たて

守口市 井上桂作

御堂筋のいちよう並木にほればれし
真冬なみ今年の二月心配だ
師走月身を持て余すご老人
やみくもに決めた公約仇となる
忙しい師走選挙も無事終る

八尾市 内海幸生

裸木の悲鳴を炬燵の中で聞く
澄んだ瞳に大人のエゴを弾かれる
裸木を起こす三月慈母の雨
有難いお話寺に置き忘れ
昨日まで帳消し今日の陽を拝む

八尾市 高杉千歩

喜怒哀楽穏やかな日々マイペース
本当に出来ないことが増えている
診察券束ねて春へ脱皮する
微笑んで消えたい望み笑い癖
七坂を越えて老春謳歌する

八尾市 寺川はじむ

うるさいと言われ頼りにされてます
ワンマンショー世界揺るがす北の賭け
褒められて心の種が芽吹き出す
音痴とは言えず拍手を倍送る
拾えずに底値が笑ってる株価

八尾市 村上ミツ子

アベノミクス金欠病に効きますか
どこへも行かず誰も来ぬお正月
大したもの入れぬ母娘の味噌雑煮
家族写真笑い声も写ってる
私を叩くと劣化の音がする

八尾市 宮崎シマ子

いつていらつしゃいを見ている朝の太陽
ライバルに塩を送れる歳になり
お月さん見て二人は倅せなんですよ
右手の傷は左手でカバーする
忘れましょう覚えていたら憎くなる

大阪府 桑田 ゆきの

早々に甘い言葉で詐欺電話
ひたすらに歩いて浄土の灯を頼る
木枯らしがハローワークの窓叩く
何時までも仲良し同士ライバルで
土壇場で思い出したる旧知の名

大阪府 野田 栄呼

おとなしくしてると貸した金上げる
丸い声笑いはじける娘の帰省
子へバトン渡して老いはのんびりと
息子とは本音で喋り恙ない
ぼくちゃんの名で呼ばれてる三十歳

大阪府 米澤 淑子

気負わずに空気少うし抜いて生き
ひとつずつラストへ捨てる欲の皮
年毎に小さくなったテリトリ
越えてきた山の数だけ丸くなる
お念珠に心安らぐ時刻む

大阪府 初山 隆盛

私は已年何度目に見えますか
どか雪が町のくらしに蓋をする
残り夢ひたひた老いの脚で追う
晩景にわが身だぶらせ掌を合わす
尖閣の火種が重くのしかかる

神戸市 井上 じろう

踏まれても黙って笑うできた人
花も実もある高話聞き瞑想す
海外で友と出くわし縁を知る
早春の遠雷を聞き友想う
独り暮し卒寿超えても雨戸閉め

神戸市 木村 貴代子

輝くものまだ沢山にある日本
くしやみ一つ会が明るくはずみだす
百薬の長が仇となるクルマ
幸せに呆けて目標みつからぬ
復興をとえ借金つみ重ね

神戸市 白川 淑子

四季巡る生きております元気です
親しくてとつても遠い片想い
ウォーキング有馬温泉まで2キロ
鍋囲む湯気の向うの顔ゆるむ
エグザイル真似踊る孫お正月

神戸市 山口 光久

おつとりと歩く一日二十四時
気取つてもすぐに地が出る言葉付き
札束の威力めいろへ誘い込む
萎えぬよう皆の中で気をもらう
わたくしを捨ててしまったイエスマン

神戸市 山口 美穂

理由のない褒美わたしへケーキ買う
褒め言葉くすぐったいがありがとう
無いなんて言えず黙って探してる
蕎麦打ちの趣味が高うじた店の味
わたしの夢濡らさないでね冬の雨

神戸市 山崎 武彦

遠く住む一途な母にある祈り
結論は妻に相談して決める
信じ切る喜び知った老いふたり
煮凝りに妻の体温込めてある
帯どめの柄にも凝って初句会

神戸市 山田 婦美子

初詣でやつと諭吉を投げてみた
道真公おお忙しい絵馬の数
いいことがあつたよウフフ茜
平凡な暮しの中にこそある絆
一枚の日めくり天と地との仕切線

相生市 中塚 礎石

年金の所帯は妻に握られる
古希すぎてやつと見つけた趣味一つ
男坂米寿の足に杖は邪魔
脱皮して蛇行を止めた暮し向き
八十路坂たたかい抜いた手を合わせ

芦屋市 黒田 能子

綾織の絆の中に母がいる
しばらくは食べたくはないバイキング
穴あきズボン着物の文化忘れられ
失敗を重ねて自信ついてくる
丸印ここがわたしの居場所です

芦屋市 竹山 千賀子

心地よい人伝に聞くほめ言葉
囲炉裏端昭和の声が燃えあがる
喜怒哀楽ポストに入れて分ち合う
めろめろと孫に溶けいく石頭
大根の白さが光る朝の市

尼崎市 市坪 武臣

尖閣には眠る資源があるはずだ
出口調査に嘘を書きたい欄がある
響かない駄洒落にひとり悦に入る
叱られている夢ばかり亡父の夢
稀に見る美人やつぱりニューハーフ

尼崎市 加川 靖鬼

脱皮するたびに蛇にもある色気
点滴にまず細胞が目を醒す
いかなごの匂い舞子の浜包む
くぎ煮みな尖った形で炊きあがる
桜鯛姿も味も春の彩

尼崎市 軸丸勝巳

大掃除猫の額も広い今日

まだ元氣放物線のお賽銭

倒れ込みタスキを繋ぐ箱根道

炬燵からよいしょこらしよと待て電話

氷点下寒氣も日本おびやかす

尼崎市 山田耕治

日本は平和だ長いコマーシャル

あふれてるのに福袋へと走る

この狭い机の上が片付かぬ

夫真つ黒共白髪とはいかず

再発防止いまさら何を言っている

加西市 金川宣子

特徴をぐさり掴んだニツクネーム

イライラも食べて膨らむ皮下脂肪

娘が作るチョコの味見にギブアップ

好きですねんチョコとおまけの量り売り

妻の座をさつさとおりる女性増え

川西市 米原雪子

激動の昭和丸ごと生きて老い

絞つてもなかなか出ない脳エキス

赤ちゃんをあやせばとろりよだれでて

もったいない自由な時間もてあます

何もせぬ一日なんと長いこと

三田市 石原歳子

待つ人も居ない家へと急いでる

青い実が真つ赤に熟れて誇らしげ

人生を楽しむ逝つた夫でした

手作りの干柿口に今一つ

夫逝つて七草粥の日も忘れ

三田市 上垣キヨミ

自分史に幸せ貯めた日を綴る

お世辞など要らない友と日が暮れる

釜茹でが恐く真面目に生きている

日本の夜明けにしたい巳の年

日向ぼこ猫と一緒に欠伸する

三田市 尾崎一子

ゆず風呂の香りを連れて里みやげ

ジレンマで眉間の皺が深くなる

絶食中おせち期待して晦日

病院を丸ごと照らし陽が昇る

手術前夜無事を祈つて亡夫に酒

三田市 久保田千代

愛枯れて心の尖り治まらず

ショッキングなニュースに慣れていく恐さ

守り継ぐ子のない家を普請する

運命線変える言葉を重く聴く

無事年を越せて明日への水を飲む

三田市 田中 章子

スキップをすると左右の足もつれ
時々はクレーマーにもなるわたし
十一階ひよが赤い実食べに来る
輪になって座ろう上も下もない
雑学がわたしの今を支えてる

三田市 福田 好文

河豚毒に当って死ぬならまあいいか
挨拶の返らぬ人も居る散歩
初詣でアラホー連れて出雲まで
保険満期やら浮かぬ妻の顔
貧乏忘れ夢を語ったいろいろ端

三田市 堀 正和

よくぞまあ板子一枚生きてきた
ネクタイの要らぬところで生きている
生き直すペースメーカーなど入れて
急がない誰も待つてないあの世
友達の立派な墓に嫉妬する

西宮市 秋元 てる

打音検査昔はお医者様もした
言えないが酒毛嫌いに訳がある
どうでもいい事に情熱似た夫婦
聞かれない年齢も明かしてバスを待つ
従いて来た人も輝くノーベル賞

西宮市 足立 茂

年金が孫の笑顔に化けていく
父ちゃんがふんぞり返る母の留守
お隣はウナギ我が家はイワシ焼く
目でサイン指で〇して決めた店
星の降る夜に淋しく発泡酒

西宮市 緒方 美津子

お元日晴れてアピール富士の山
成人式心弾んでいてほしい
米寿です孫の結婚式に席
給料は上がるものだと思つてた
りんとして家族想いの床柱

西宮市 片山 忠

悩まずに貸して取れずに悩む金
洗脳をされて本屋を出られない
フリーマーケットで買ったベルトはすぐ切れる
住職の法話微妙に生ぐさい
捨てられた犬が山から降りてくる

西宮市 亀岡 哲子

旅長し二ヶ月毎に着く路銀
お灯明も凍てたか揺れず本願寺
ちよつとだけ吞めてちよつとの酒に酔う
ご法話を聞きつつ一句ひねり出す
お陽さまも日毎早起きウオーキング

西宮市 西口 いわゑ

三代代揃つて弾む新春の酒
くしゃみ一つ心当りがなくもない
がみがみと言いたい時はガムを噛め
良い方にイメージチェンジして眠る
初鏡女の欲は果てしない

西宮市 牧 洵 富喜子

検診日血液抜いて誕生日
選挙結果源平合戦見るような
おばさまあなたのを越えました
ゆく年やあまた才能雲に乗る
落語講談日本ラ・ラ・ラ・奥深い

西宮市 山 本 義 子

石路の花手足のばして日向ぼこ
すこし媚をうりすぎないか冬わらび
雪おんな不法投棄を見る峠
鍋料理に雪景色など放りいれ
万両の花寒風ついて深い

西脇市 七反田 順 子

景気良い絵馬が跳ねてる初詣で
青い空ふとん晒して子らを待つ
オール電化正月憩勘定書
うつとりと白い恋人聞いている
ブルーメラン投げた所が現在地

姫路市 古川 奮 水

新年のあいさつ出来てありがとう
初春の白鷺城に人登る
息男に祝言らしい畳替え
失せ物が現れ肩の凝り治る
静か過ぎピアノたたいてひとりぼち

奈良市 阿 部 紀 子

巳の年が三人揃い運氣増す
宝くじ五等当たって良い門出
本音ごと言えばどんなに楽だろう
卒業を迎えた孫に感無量
夢に見たハッピーリタイヤほど遠い

奈良市 岩 本 浩 二

美女見ればどうも気になる薬指
悪戦苦闘ジッパー閉じぬ試着室
午前様ドアーチェーンが下りている
iPS行きつく先は不老不死
下戸なのによく吞兵衛と間違われ

奈良市 大久保 眞 澄

カタカナの料理お箸もくださいな
私以外身内はみんな変わり者
活断層に原発勇氣ある国だ
体型だけ達磨に近づいた夫
老人施設見学兼ねたフルムーン

奈良市 加門 萌子

橿原市 居谷 真理子

子供から見れば老いたと思われず
歳末も年明けも聞く救急車

最近の酷暑厳寒地球規模

初恋の男にがっかりさせる老い

相性はどうあれ夫の蔭に居る

奈良市 辻内 げんえい

金字塔あるのに何故か暗い年

ぼろぼろとこぼす涙も嘘まこと

副作用止めるためにはまた薬

まだ夢を熱く語れる古稀の友

金婚で女ごころはまだ読めぬ

奈良市 米田 恭昌

訥弁のつい本音出るお人良し

汚染ゴミまるでジョーカー抱いたよう

家事一切半分こする共稼ぎ

出稼ぎの宿のテレビに里は雪

無器つちよで本音で生きて平のまま

生駒市 飛永 ふりこ

砂丘にてころりまさかの猛吹雪

わたくしの無垢がふわっと日本海

遠い遠い君の慕情をつかまえて

意地っ張り治さなあかん治らない

控え目を意識巳年のモットーに

掌を合わす私の中の父母に

赤く咲きました 雪になりました

真つすぐな竹が荒らしていく美林

オリオンの下をひとりの靴の音

秒読みが始まるネズミみな逃げた

大和郡山市 坊農 柳弘

初孫の命名初老の冴えた筆

シヨックには強い男の進化論

桃は移り気身ごもる術を風に問う

進んでる3D時代に追いつかず

沈思黙考年度変りの春のウツ

奈良県 中原 比呂志

アメリカの漢字一字は苦悩の銃

御破算で四股踏んでいる新年度

年末の幸運の矢が見当らず

泣き虫が受験戦争立ち向う

春はまだ試験の波に立ち泳ぎ

和歌山市 岩本 美智子

短日へ洗濯物を泳がせる

柚子笑うさかな酢のもの湯のけむり

クリスマスだった一人で母食べ

亡夫にも新春を小さい鏡餅

巳の土鈴夫婦巳年の子へ贈る

和歌山市 上田 紀子

和歌山市 武本 碧

枯木にもオブジェの灯り人恋し
拘りをさらりと流し年新た

決起する時期を逃して冬眠中

世の中を確かめたくて小石投げ

太陽光今日はたっぷり電気生む

和歌山市 柏原 夕胡

笑顔になった青空を吸い込んで

幸が宿るよう鉢植えの花を買う

震災以来まだ海を見ていない

ストレスに負けてメタボになりました

トイレという部屋すっぱんにしてくれる

和歌山市 喜田 准一

ふっ切れて次の展開待っている

じつくりと構えて生きる余命表

成り行きに任せて結果吉と出る

ややこしい話にそつと距離を置く

そこまでの話で止める程の良さ

和歌山市 坂部 紀久子

無病息災願ひ餅花軒にゆれ

二人乗る小舟今年も波任せ

アデランス脱いで本音で勝負する

美しい夕焼け明日を予告する

もう少し喋ると愚痴になるだろう

びったりの影と人生謳歌する
流されぬうちにしつかり句読点

楚々としたイメージ剥がす掴み取り

小細工を弄して神に見離され

人生の終のけじめはありがとう

和歌山市 田中 みね

文面に淋しいことも有る賀状

最高に出来たお方が病んでいる

ホカロンを貼って二人の夜が明ける

聞き上手の長女へ電話一時間

超出来た頃まぼろしか孫受験

和歌山市 玉置 当代

身の丈の欲が蟻には物足りぬ

ころもち足せば我が家の味になる

塩こうじ一匙角がとれてくる

まだ七十路これからもゆめふくらます

指の先まで酒めぐらした三が日

和歌山市 土屋 起世子

紅白のヨイトマケ聞き母偲ぶ

まだ欲があつて賽銭コインだけ

人真似の曾孫に貰う初笑い

楽しくて長寿体操独り者

七草粥多めに炊いてほとけ様

和歌山市 福本英子

海南市 小谷小雪

猜疑心鍵穴の蓋忘れてる
線香の贅沢だけは許される
損をするような正月誕生日
深爪をまだ切り足りぬ夜の底
お年始に来てでもメールを手離さぬ

和歌山市 松尾和香

海南市 堂上泰女

ペランダで仰ぐ日の出に包まれる
元旦も変わらぬ暮し湧く元氣
千両の華やぐお墓お正月
生かされて丈夫で長く味も出る
火だるまになつて生きてる喜寿の坂

和歌山市 松原寿子

紀の川市 宇野幹子

鈍い振りして確かめている本音
トイレにも電話備えている介護
いつかきつとなんて信じて夢を描く
覚悟して命を削る朱印押す
ふところの深さあふれてくる温み

岩出市 藤原ほのか

紀の川市 辻内次根

ゆらゆらと揺れてあなたの腕の中
赤い服着てテンションをあげている
再会を信じ赤まるつけておく
盃になみなみ注ぐ血の絆
祝い酒今年も花を咲かせよう

ほらごらん黒潮に乗り春の色
友情というお宝は非売品
お見舞へホットな耳を提げていく
手袋も新しいのは温かい
街路樹は電飾の線あてがわれ

プライドを捨てちゃならぬと寒小菊
偏差値に人間性が振られる
電光石火で気持ち届ける感謝状
穂穂の生命力も添う歳暮

温度差のないこの町で朱に染まる

アラームが鳴つて定位置とりもどす
正座して子の言い分をとくと聞く
セミナーと言うベール着て逢いにゆく
痛点の一つに蹴つた恋がある
ナイーブな男と見抜く爛冷まし

生きている実感がある朝の水
何時も出る一人暮らしのひとり言
転がしていると名句の残る舌
借景の前だ姿勢を正さねば
サッチモで起きて観音経で眠る

紀の川市 北山絹子

夕焼けの色に周りが溶けてゆく
ちっぽけな嘘に振り回されている
雲が流れて連れ添う人の丸い背な
遺言書枕に敷いて寝る余裕
チョコレート売場に花が咲いている

田辺市 岡本昇

老妻の家事に手を貸す初仕事
電動車に極楽号と名付けてる
手前味噌というスパイスを持つている
親の敷いたレールを矯めて乗ってみる
初登庁公約詰めた鞆提げ

橋本市 石田隆彦

宇宙より遠く感じる汚染の地
被災地は帰らぬ人を今も待つ
成しとげた夢も今では過去と言う(山中教授)
ローギアの暮しに慣れた老い二人
護身用の年金減らすいじめです

松江市 石橋芳山

空想を描けば全て砂嵐
避けられているのかこのところ無風
モアモアと沈んで浮上せぬ頭
ちっぽけな心を耳かきに乘せる
ひた走る妄想トンネルが長い

松江市 小川注湖

新年の覇気はみ出している年賀状
スカイツリー雲の切れ間に見る世界
外歩き笑顔が増えたダイエット
初恋は木炭バスの通学で
この紋どころ自民に頼む世の景気

松江市 川本畔

闇雲に探し続ける悴む手
セールの電話へ嘘をついておく
アイロン掛けの夫を窓に干しておく
辞書を引きほつと一息つくコーラ
霜柱きらきらきらと始動する

松江市 錦織禮子

鏡開き靈験の餅懷に
極限のサハラマラソン挑む理由
更新の時を刻んだ顔写真
モーニングサーピス満たされた宇宙
覚悟した断捨離元の木阿弥に

松江市 松本知恵子

湯豆腐がくすくす笑う雪の夜
雪道で盲導犬とすれ違ふ
統投の向こうにあった金字塔
氷砕く勢いあつたその昔
成人式無償の愛の母なみだ

松江市 松本文子

時々ワイングラスに打ち明ける
去る者は去れと大口叩いたが
新年の誓い人には言えません
面白く生きよう意地悪婆も私流
果し状のような賀状を受け止める

出雲市 石倉美佐子

情深い大國様にお縋りする
花の下おままごとでもあるまいに
盃に桜の花のひとひらが
きつちりと彼岸桜は御彼岸に
春の海弁天島まで歩けそう

出雲市 岸桂子

人の世に越さねばならぬ会者定離
利口になって呑み込んでおく言葉尻
自分史に誤算ばかりのペンの跡
日めくりの一枚にある哀の記録
松枯れて名残りとはじめ過疎の町

出雲市 多久和敬子

湯豆腐で心の中も温まる
小さな窓から大きな笑い声がする
年女福と仲良く手を繋ぐ
真実を書かないままに投函す
不器用な指でいつでも頑張って

美作市 大石あすなろ

言い訳を詰めて重たい紙袋
折々を上手に母の袖畳み
ふところの残夢ひとつと冬を越す
昨日とは違う明日へ捻子を巻く
心配の種を覗いた内視鏡

美作市 福原悦子

嘘ひとつ気軽に通ず愛がある
見えすいたうわべを包む下心
さり気なく断る術も知る余裕
身を以って豊かさを知る戦前派
悲しみの味を出してる鍋料理

竹原市 石原淑子

モネの庭私の庭も春の精
雛めぐり世紀を越えた佳きお顔
はいじゃあね ほいでからねとまだつづく
戒めの痛みと思うそこかしこ
雨ざらしの記憶の中にある笑顔

宇部市 平田実男

パスツアートイレよりまず喫煙所
再生の総理はちよつとはしゃぎ過ぎ
基地があるお蔭の事には触れぬ基地
紙オムツ笑えぬ齢になりました
同期の死身辺整理考える

新年の空気の中を初詣

鳥取市 有沢せつ子

よく笑うことで病魔を遠ざける

ほしかった本を買ったが積んでいる

手の甲の血管歳はかくせない

一筋を通して自信を積み上げる

鳥取市 池澤大鯨

凝り性で利害を忘れ酒を呑む

ひとりよがり過ぎて凡人なまくらに

口堅いと言われて黙す小心さ

偏屈が昂じた果てに認められ

黒子には徹しきれずにオダ上げる

鳥取市 奥谷彩子

老いてなお輝く彩も添え生きる

人の輪でなさけ貰うて昨日今日

私自身を断捨離するもう間近

平凡につむぐ夫婦の旅つづく

頂点で打たれる釘になる男

鳥取市 加藤茶人

シンブルが一番飽きる事知らず

寝た振りと言う車内での処世術

私生活は覗きたくないのが美人

半分も言えれば胸のつかえ降り

同情もするが興味もあつて聞き

台風と雪天秤に掛けてみる

黙禱の臉に津波押し寄せる

神話みな太古の恋の物語

神様のマジックだろう御神渡り

免許証の裏の署名にまだ迷う

鳥取市 岸本孝子

喪が続ぎ経を静かにかみしめる

探し物意地になるから見付からぬ

ジャパニーズスूपがとても腹に合う

喜んでふところを出るお年玉

漫才で笑い新年福を呼ぶ

鳥取市 倉益一瑤

火ダルマになつても尻尾など振らぬ

火ダルマに油注いだのは誰だ

転々とした身に温いふるさとよ

しあわせの死角に溜る膿もある

突破口は誠意正面から行こう

鳥取市 鈴木一弘

おみくじをひいて新年運だめし

浅い思慮破れ障子の穴ふさぎ

引越しの荷物自分史をひもとく

黒板の昼のメニューの味けなさ

生き甲斐は祈るまごころあればこそ

鳥取市 高 浜 勇

自分では気づかないもの乱れ髪
ほがらかな人ほど闇は深いもの
びったりとはまらないから味がある
手を加えない方がいい新鮮さ
根は耐える枝葉が伸びて開くまで

鳥取市 竹 口 清 信

女房が俺には出さぬ機密費よ
人間に生まれただけでありがたい
ありがとう一言で済む口の礼
家計簿に主人口座が見当たらぬ
好きな人出来ても口に出せぬ年

鳥取市 土 橋 はるお

地蔵さん全てが立っていらつしやる
勿体をつけて答え出すがよい
スカイツリーでコーヒーなんて夢の夢
お隣の犬の礼儀を見習えよ
花は咲くいつも心の中にある

鳥取市 永 原 昌 鼓

事件事故ニュースにならぬ日を祈る
聞き上手乗せ上手にはご用心
切り札をしまったポッケ穴があり
正月も盆も介護に手が抜けぬ
褒められてつい弾み出す老いの靴

鳥取市 中 村 金 祥

大笑い一日一度欠かさない
ネジ少し捲いて老後を翔んでいる
税務署の地下に埋蔵金がある
足腰を鍛え不意打ちには負けぬ
終幕へ自問自答を繰返す

鳥取市 夏 目 一 粹

もの忘れついに喫水線こえる
まずしさはいつも置きざりだが強い
なんとなく人間臭い人が好き
悪しき水悪しき空気の中にいる
生と死を抱いて活断層の上

鳥取市 西 川 和 子

年賀状今年も勇気いただいた
おはようの笑顔に勇気取り戻す
誉められて明日の勇気を蓄える
ご先祖に勇気を貰う南無阿弥陀
角取れて楽しい今に感謝する

鳥取市 春 木 圭 一郎

ほんとうの強さ心は豊かなり
幸せはわくわくとすることがある
勝敗をつけ見えてくるものもある
やったなら他人の評価気にしない
どうしても相手変わらぬ自分変え

朝練に勤しむ姑の昼寝つき

鳥取市 平尾菜美

絞られる豆腐余儀なく自浄する

札所から心安らぐ氣をもらい

祈るしか手だて尽くせぬスラムの子

志めざす路傍の石である

鳥取市 深澤千恵子

遅れてもあせるな春はきつと来る

喧嘩して待つのが長い仲直り

最初だけ張り切り歩くウォーキング

ボジティブな氣持で生きて若返る

足枷になった指輪に今感謝

鳥取市 福西茶子

七十歳ちよつと大人の仲間入り

アリガトウ父が連発老いてきた

宇宙まで汚して民は飢えている

惜しまれて逝つたのだらう長い列

腹巻きと毛糸パンツが離せない

鳥取市 前田楓花

あの世から私を見てる人ばかり

日本中サンマ焼いたか今日の空

しっかりと生きなきや子供真似をする

衝動買い空しくなつていく財布

大切に想うあなたのあの微笑

髪染めて若さ保つと思ひ込み

塩豆は好んだ亡父を偲ぶ味

無理しない老いの句にでも味がある

孫達よ恩と感謝で生きようね

老いた今忘れたいことたとある

鳥取市 吉田孔美子

釣り装備母の前では言うまに

言い訳も母が代行するニート

婿殿のオアシス行きのバイク音

五十億回心臓の打つ此岸

宇宙基地より近くなつた彼岸

鳥取市 吉田弘子

どれを着よう娘の愛がこもる服

輪切りして病魔を探すこと幾度

自分史を書くに足りない足跡だ

お陽さまとデートの日数減る睦月

集合へ余裕をもつて老いの礼

鳥取市 両川無限

ひもじさを知らぬ世代の長い脚

村捨てて孤独を吊すワンルーム

からし漬け色鮮やかに妻の乱

血の絆代わり番こに母を見る

旅人としてふる里の駅に佇つ

倉吉市 猪川 由美子

仮設ぐらし寒さと孤独思い遣る

流行語大賞欲しいしジंकスも不安

新政権古顔ぞろりお出ましただ

暗い世にせめても赤い物纏う

元日に来てなお嬉し年賀状

倉吉市 牧野 芳光

女房の背中が耳になつてゐる

人間の人間らしい加齢臭

着古した背広が未練抱いてゐる

ギックリ腰くらいで死ぬることはない

この椅子に座ると腰が痛くなる

倉吉市 山中 康子

先生は一味違う人あしらひ

産声へ弾んだトーンはね上がる

飾つても褒める彼氏はもういない

わたくしをほうり出して皆の和

仕合わせは氣に掛ける子や孫がいる

倉吉市 山本 玲子

硝子拭きほのぼの冴える寒の月

この種が育つ大地は安全だ

マネキンと比べてならぬ背格好

味しめて猫は定時にやつてくる

貸し借りのひとつもなくてつまらない

米子市 後藤 美恵子

夢を追ひ走り続けて足がつる

除夜の鐘撞き終え清い空氣吸う

お迎えに備え恋文焚いておく

雪道で転んだ鼻は怪我もせず

懐が心ゆくまで飲ませない

米子市 後藤 宏之

人間に生まれたことがすごいこと

碁敵はまつたの遺恨まだ解けず

ハルピンは出生地です行くつもり

ちよつぴりと勝つてちよつぴり負けてみる

つまらないギャグに笑えと合図され

米子市 高田 振作

頑固者隠れてネジをゆるめてる

笑顔なら恵比寿さんにはかてまへん

最初はグー次もグー出し勝ちました

赤い服似合うポストと消火栓

友達も少しボケたかちようどよい

米子市 中原 章子

腸カメラ鬼が出るのか蛇が出るか

ポリープで命までもは取られない

晴れがましいことの無い儘締め括る

最高値口に入らぬクロマグロ

威張らないなめられないと唱えてる

米子市 成田雨奇

続けている事は葉を飲むことだ
ひとりごとと言えば出てくる米子弁
句集戴くこれで勉強しなはれや
干していて妻のショーツにときめかず
大晦日蕎麦を肴に酒を飲む

米子市 吉田陽子

蛇の頭にあるシナリオが新しい
意見訊く耳がきこえているうちに
エンディングノート買う手が思案する
お茶漬けもいいねと今日は小正月
白髪染めやめるきつかけ見つからぬ

鳥取県 石谷美恵子

温かいニュース読みたい老眼鏡
近いうちお邪魔しますとまだ来ない
近いうちなんて言葉は当てにせん
天罰と思いたくない負が続く
不仕合せ一度も喧嘩せぬ夫婦

鳥取県 岩崎和子

晴れ続き街に出ようか足に聞く
猫もいてみんなお昼寝午後の刻
いじめ止めよう三人娘のロック見る
バックにはギリシャの森か舞う少女
久しぶりハードロックに血が騒ぐ

鳥取県 竹信照彦

害虫と共に天敵までも駆除
家中を自作で済ますしめ飾り
重いのも軽いのもあり雪の精
テレビ見てテレビの中に入つとる
天を指す人差指にある威厳

鳥取県 西谷悦子

青春の思い出よみがえる微熱
玄関の寒さ育てた菊救う
生きるため多少の毒は呑んでいる
私にもちよつと砂糖をひとつまみ
どんな風吹く新政権の行方

鳥取県 細田裕花

真っ白なページの上に初日の出
身勝手な思い渦巻く祈る時
まつすぐの友のボールの良い響き
引き出しの整理しすぎて記憶消え
アベノミクス呪文が効いてきたような

鳥取県 松川行男

お流れがこない私は注ぎに行く
年功とキャリヤ空しく置いて去る
雛壇の上から眺め拳手を見る
義経にならないように幹事長
しわが無い私五十のコマーシャル

鳥取県 山下節子

天罰の真只中にいる地球
腕組んで相手の策を読んでいる
奥の手が読めてだんだん熱くなる
ストーブを囲む方言盛り上げる
会場の空気を読んで席に着く

鳥取県 山本正光

元旦の陽は中天にして賀状読む
新年と米寿重ねて祝う幸
や々と今米寿の石が温みだし

みほとけに護られ生きていく至福
明日逢う言葉をメモに書いて寝る

(前月分) 大阪府 奥村五月

ホッとする孫の来た日と帰った日
休肝日玉子酒だと切り抜ける
機関銃あとは黙秘の妻の口
坪庭に足をひきずり母笑顔
枯れるまで昔語らぬ花名刺

(前月分) 出雲市 石倉芙佐子

北と南の山に抱かれ出雲の国
私にも振って下さい打出の小槌
名も知らぬ鳥も番で寄りそうて
化粧品の名を聞くほどに美しい
お茶の会寂朱の帯を締めていく

(前月分) 東大阪府 笠井欣子

春近し二ツいますランドセル
新聞を眺めて夫吼えている
ヘルパーさん来る日は早く起きている
夫逝ってしきたり変わるお正月
もうとまだ引きずっている八十路です

(前月分) 黒石市 佐藤古拙

理想郷なのかも知れぬ無人駅
否定せず肯定もせず茶を啜る
茶を啜る妻の疑問符ほくしつ
泥舟と知りつつ漕いだ放浪記
深呼吸新雪にまじりたる

(前月分) 黒石市 相馬一花

血圧がどんどん上がる正義漢
自由化を求めて死んだ籠のトリ
どのような風でも回る風車
品の良さを売り物にする詐欺師
せち辛い世には貴重な楽道家

(前月分) 和歌山市 松原寿子

曲げられぬ想い女の意を通す
厳寒へ向かい頭を切り替える
水面を私も風になり渡る
ひと言を伝え切れずに血が騒ぐ
週末へ気分転換あずけよう

川柳塔の

川柳讃歌

99

木津川 計

えんびつに底の底まで覗かれる

西口 いわゑ

鉛筆を握ると鉛筆の神様はいわゑさんの腹の底を覗き、嘘を書くなど命じめるのです。なぜなら「鉛筆の芯は本音をしゃべりたい」からなのです。今号の同人吟に鉛筆を詠んだ句が三句、これは加川靖鬼さんの句です。

もう一句、大橋政良さんは「えんびつを削り余白が温かい」と。恐らくいい句の浮んだ満足感のもたらす喜びなのでしょう。三宅保州さんの名言を生かした筈です。「紙と鉛筆だけでは作句できない。考える力がある」を。

山眠るとはいい季語だ俺も寝る

山本 蛙城

俳句にはいい季語がいっぱいあります。山笑うて春を、山粧うは秋、そして山眠るで冬を巧みに表現しています。

蛙城さんは自然の摂理に体をゆだねたのです。ですが、まさか「春めく」で春情を催し、「水

涸れる」で男を涸らす、そんな器用な方ではありません。まい。が、あいつが遊んでるから俺も遊ぶ、山が眠るから俺も寝る、蛙城さんの愉快な人生です。「夜降る雪が積もる」生き方を俺はしないという選択です。

八勝で千秋楽にしたい歳

北野 哲男

大相撲初場所が高見盛が引退しました。僕の大相撲への興味は、かかってこの人一人の故でした。もう一切の興味をなくしました。

高見盛はアカン関取でした。そこがこの人の魅力でした。十両12枚目で5勝10敗、36歳での引退でした。通算563勝564敗、もう1勝していたら相撲人生を勝ち越しでめくられたのに、あーあ、アカン男たる所以です。だから高見盛は愛されたのです。哲男さん、8敗の人生にも味があるのですよ。

肩書きが重くて巧く歩けない

相馬 一花

「曽根崎心中」の徳兵衛は酒屋の九兵次に騙され銀子二貫目(約二五〇万円)を取られたのです。その九兵次はお初に横恋慕していますが、彼女ははねつけます。「徳様と片時離れて生きていきようか」に立ち去る九兵次は「あ、懐が重とて歩きにくい」。

歩きにくいほどいい肩書きをひけらかす厭味な男もいます。あるいは名立たる社

名を後ろに態度の大きいイヤな奴もいます。一花さん、肩書きやカネで歩きにくい人間を見下し、われらはスイスイ歩きましよう。

名を忘れた人との会話曖昧に

宮崎 シマ子

僕は編集部のスタッフにいつも言うのです。初めて電話をかける相手さんには「上方芸能」という雑誌編集部の〇〇と申す者でございます」と言うべしと。にもかかわらず、「上方芸能」と聞いただけで吉本興業と思われ、漫才作家と勘違いする人は地方にいくほど多いのです。

それはいたしかたないにしても、自分の名前を知ってくれていると思うのは、思いやりもはなはだしいのです。シマ子さんのために先ず名乗りからです。

保険証必ず持つて外に出る

初山 隆盛

いま定期的に次の病院・クリニックへ僕は通っています。狭心症の余後で循環器内科へ、脳梗塞のやはり余後で神経内科へ、前立腺と痛風で別々のクリニックに、耳鼻科にも月一回、歯科も折節に、ですから手帖をにらみながらの病院めぐりです。いつ倒れてもいいように保険証を、そうか持って出た方がいいのか、と隆盛さんに教わったのです。

〔上方芸能〕誌発行人

自選集

小島 幸

消防が見守るありがたい とんど
みんな笑ってとんどの火の粉浴びてくる
犬がいた頃は笑っていたふたり
酒弱くなった饒舌なら許す
虹が丘の五十年後をふつと想う

林 瑞枝

かくしゃくと絵を画く語る兄に負け
花かごの中で賑わう美男美女
春高樓の歌が流れる日野橋で
想い出はみな宝石で夢で逢う
老いてなお元気で渡欧生き上手

前 たもつ

阪神淡路傷跡未だ18年
新入生消えた被災地二度の春
人情の町が悲しいひつたり
指導の名借りた暴力許せない
感謝すれば喜ぶことが増えてくる

政岡 未延子

春はそこ 春を唄って待つてます
山陰の春は自分の心から
心臓へ優しく歌を届けてる
寝る前に静かに今日の歌おもう
いつまでも唄っていたいこの森で

三宅 保州

虎ファン悲劇の主人公振るな
ジャイアンツにまだ居ったのか小笠原
FAと義理人情は相容れぬ
WBCこれがほんとの純国産
どのチームも優勝すると言うキャンブ

宮西 弥生

新しい出会いで幕を開く春
サッカで人も地球も揺れている
安心の安に包まれ水の音
ありふれた言葉でもよい生でよい
三ヶ日巣ごもりすんだ風の旅

八木 千代

【焚火あと】
残り雪 春の狐も咳くような
雪肌の泪に芽ぐむはこべたち
若草を峯にとどける登山道
ありがたや先人たちの焚火跡
稜線はわがたましいの置きどころ

八十田 洞庵

山門に阿吽の仁王寺格知る
姪と会う後ろ姿はもう女

手作りをリボン結びで贈る恋
雨にぬれ木戸口蛙に迎えられ
包丁は使い手の腕知っている

両川 洋々

土の香が匂う男で餓死はせぬ
群れるだけの雑魚だが夢は捨ててない
満ち潮に乗れぬ男の反乱よ
被災地の柩在庫も底をつき
被災地の涙乾けと陽が昇る

板尾 岳人

あたたかなみそ汁出来ました(時実新子七回忌)
便秘には芋焼酎が効くのです
逢えるなら嫌いなトマトでも食べる
蒟蒻のうまさを知らぬ親不孝
チンチンのないうぶ声に五目めし

奥田 みつ子

人と人 結ぶ絆にある不思議
きらきらいといたずら探す子の瞳
いつからか命令をするカレンダー
欠点より長所を褒めて子を育て
一句と向き合う本音ひびかせて

河井 庸佑

逆境で辛抱強さ身に付ける
よろめいてつい本筋を見失う
妥協する心算で来たが気が変わる
迷ったら打つ手が逆に出る不運
幕下りて名人芸にある余韻

川上 大輪

4LDK象さんに狭すぎる
家の太陽日の出はいつもお昼前
わたくしは悪玉菌で出来ている
ピンチです毎年歳が増えてくる
どうにでも動く私の予定表

小西 雄々

小春日へつぶした嘘が二つ三つ
残業の帰り待ってたおでん鍋
どうやって生きた白寿に聞く夜長
神様に抱かれて癒したい失意
花見する場所はやばやと幹事きめ

斉藤 効

芽の息吹聴こえてきそうりんご園
鳥の目の高さで明日を模索する
山柿がぼとりと落ちる寒の計よ
迷うたら明るい方に芽を伸ばす
コマーシャル上手になった冬トマト

塩満敏

春が来たミミズとモグラ目を覚ませ
今年こそ杖無し歩行してみたい
本年は曾孫誕生の年であれ
新しい日本の夜明けもうすぐだ
熊蟬に燕飛躍の準備中

新家完司

宝くじ外れ静かなお正月
元日もやっぱり人が死んでいる
正月はもう済んだぞと虎落笛
ゴミ箱にあふれる無知と無関心
喉飴を舐めて吹雪に耐えている

恒松町紅

いい話ばかりでないと注いでいる
遅い雑草春の顔になる
ほどほどの度合いなかなか決まらない
酒瓶に老いの元気をもらって
筆の先やはり老化は隠せない

津守柳伸

陽の当たる部屋に笑顔の揃い踏み
美しく老いる身内の思いやり
青信号にも確認の要る世相
順番に見送る摂理福寿草
誇りある戦中戦後生きた皺

遠山可住

村おこし老人会が忙しい
ああ亡妻よシャツ一枚を買う思案
心経がすらすら言えて一周忌
永らえて米寿新酒が腹に沁む
大根と鰯粗飽きもせず寒波

都倉求芽

いろは順消えて名簿が後ずさり
雑念が次つぎ襲い忙しい
留守番の日は句を作る余裕ない
病院の個室丸椅子で5時間
正月の挨拶めでたい声沈む

土橋螢

もう一度大きな声で呼んでみる
白雲悠々雪つれて風を呼ぶ
天地人愛燦々と燃え尽きる
過去よりも昨日の風がやわらかい
躓いた石を拾って投げてやる

西出楓楽

心まであたたまらない一人鍋
寒の水ごくり余命をふと思う
ストレスを肴に飲めば胃が痛む
糊代を多目に取ろうもう後期
下心言葉尻から透けてくる

原稿の漢字キカイが無礼討
じいちゃんの芸は漢字の使い分け
大相撲四股名はみんな漢字です
日本に万葉仮名という宝
戒名の漢字一字にあるドラマ

第135回 大阪川柳の会

日時 4月1日(月) 午後1時開場・2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「長生き」北村 紅絵 △「逆」赤松ますみ
△「天の邪鬼」津守 柳伸 △「テンポ」磯野いさむ
会費 1000円 欠席投句 3月30日まで 本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

川柳ますだ 100号記念 誌上川柳大会

課題と選者(各題2句)

「百」	金 築	雨 学	選
「笑 う」	新 家	完 司	選
「コップ」	竹 治	ち か し	選
「みそ汁」	佐々木	博 子	選
	長谷川	石花菜	選
	但 見	文 子	選
	松 本		

投句料 1000円(切手不可) 発表誌呈

締 切 3月20日(水) 必着

投句先 〒698-0036 益田市須子町7-10

瀧谷由紀子 宛

TEL 0856-22-8123 FAX 0856-23-0001

主催及び連絡先

益田川柳会 奥田 勝子

TEL 0856-22-5856

温故知新

『清水白柳遺句集』より

恋すればこそコスモスの線も好き
曾祖父の血脈が知らお人好し
八つ当たりしても手ごたえないひとり
底のないポケットなのさ稼いでも
退屈は煙の消えるまで見つめ
匙に歯がふれて病人ほほえみぬ
雨の音二階を降りず昼になり
紺碧の海へ吸殻捨てにくし
雲を見つめて出世など考えず
眼を病んで風薫る日の窓を見ず
親の口論へ食べかけの箸を置く
留守をする夜の雷が鳴り止まず
今年も春風が傷痕を撫でる
ひとこまは猫に明けとく障子紙
スベアーとしての役目に甘んじる
菊活けてひととき欲を忘れたり
心電図もろとも救急車に積まれ
健康過信地獄の切符買い損ね



西出楓楽選

寝屋川市 荒川 純 甲

石路の黄は故郷の冬の色

チロチロの水音を聞く路の臺

間の手を入れて囃してくる木霊

減速で足りるを知つたいい暮らし

太陽を独り占めしていた卑弥呼

天地人星のかけらをちりばめる

山口市 中前 幸子

こころ晴れるまで見上げている冬木立

自分を壊す積み木を積み直す

涸れ井戸に昔の音がまだ残る

夕映えの丘に残して来た影よ

ゆつくり歩く花野へと続く道

真夜中の口笛魔女の呪文かも

倉吉市 堀 かずこ

そちらでも春は来ますか亡夫に聞く

カラオケにはまっています本気で

傷ついた心を包む人ほしい

人並みに夢を買います宝くじ

会いたいよでも遠すぎる亡夫想う

陽がのぼる今日もいい事ありそうだ

薄荷飴消したい事が多すぎる

ドナーカード泣いてる海を見た日から

雪積もるごめんごめんと呟いて

名案が浮かぶ木魚の四拍子

鯛焼きの愚痴を聞いている値引き札

諦めぬ九九を覚えた日のように

寒空を飛行機雲が溪を切る

浅い脳自分を探す句と遊ぶ

靴底でもろく碎ける霜柱

七種の粥ほのぼのと香る朝

健脚を願って歩くポストまで

ハープティー淹れて話の輪がはずむ

大阪府 畑 中 節子

青森市 菊池 京

鳥取市 近藤秋星

何はともあれ新年に乾杯だ
年賀状ゆつくり書こう正月に

我が賀状待つてくれる人もいる

除夜の鐘しんみり聴いたから寝よう

古里の七草粥は餅が入り

小正月ようやく自分取り戻し

豊中市 貝塚正子

初春に神棚の梅ほころびる

木の芽和え小鉢の中で春になる

今日は躁きのうは鬱で目まぐるし

人生のオマケの今を楽しもう

永い夜金魚に名前つけてみる

風に乗リタンポポの花旅に出る

八尾市 田邊浩三

おでん通先ず大根で味をみる

割り勘だこわごわつまむ河豚の肝

恐いけど河豚蕎麦美人みんな好き

総入れ歯はすべそこ亡母の顔

年賀状心の痛む二三枚

マスクして手を振られても判らない

竹原市 六田半徳

胸を張り祝祭日に日章旗

母猫が子ネコに論す生きる術

サヨナラと言われて返すオゲンキで

大臣も健康保持が出来てこそ
ふる里の山に向かつて深呼吸
このピンチチャンスに変える気概もつ

備前市 森

ふみか

静寂の庭にポトリと落椿

淋しさやか細い音で箸を割る

寒風に胸を張つてるヤツコ風

苔むした苔が聞いている冬の音

脚本は転々とまだ続く

煮くずれてやつとやさしい味になる

堺市 近藤治子

竹踏みで脚腰きたえまだやる気

落葉踏み靴カラカラと高笑い

仕付け糸取らずに着物派手になる

躰するバランスとつて鉛と鞭

躰けられ人間くさくなるペット

一年を笑いはじめで始動する

泉大津市 助川和美

聴診器当ててたつぷり薬出る

ほんまです亭主丈夫で留守がいい

父と子がキャッチボールの冬田んぼ

マイペース妻逝つてから崩れだす

人が行くままに流れる年の暮

どのコース投げて妻はキャッチする

松江市 武島 千代枝

寒中に水仙凜と立ち尽くす
日本の夜明けを待つているひとり
規格外交じってるから面白い
苦手でもお世辞にやる気湧いてくる
この歳で夢の続きを追うている

松江市 藤井 寿代

ハートにはリボンを結び弾ませる
万華鏡のぞき未来は無量大
大吉の札結ばれて神になる
冬空にモザイクかけて春を待つ
胸底に得体の知れぬ虎落笛

松江市 山根 邦代

賀状からやさしい顔の巳が届く
勿体無いその分だけが丸くなる
ゆつくりと歩けばいいと教えられ
長電話切つて気がつく言い忘れ
ショッピングまずは自分のご褒美を

安来市 原 煩惱児

酒呑みと嘘が許せぬ頑固者
酒煙草止めて八十路の半ばゆく
この世から無くならないか酒煙草
孫成長話す言葉ははや娘
爺閑居冬至の柚子湯ゆつたりと

岡山市 工藤 千代子

アルバムを開くわんさか笑い声
思ひ出を拾う午後から雨模様
吹っ切れて排水溝に流す今日
どうしてもはみ出る尻尾また叱る
銀杏がぼとり喪中というはがき

瀬戸内市 東 楨 ますみ

球根が抱いてる春の物語
母さんの花野で迷う一輪車
明日の夢まだ捨てきれぬ欠け茶碗
妻がパー夫がグーでまるく住む
まだもてる気分で爪を赤くぬる

岡山市 藤成 操 江

賀状くるみなそれぞれに春の彩
四捨五入しないでほしいまだ六十路
取説の意味さえ解せぬカタカナ語
不用意に相槌打つてからの雨
思う事あつてしばらく距離を置く

広島県 岸 本 清

風に乗り聞こえる街の息づかい
失態を忘れきれずに夢を見る
抜けられぬ寢床で一句思い付く
纏れずに二人三脚五十年
励ましの一句を添えて友見舞う

竹原市 國 實 力

間違いなし金には縁のない家系
待つ方も期待している試着室
遠慮などしていませんと言う遠慮
舌先で好きな形にしている嘘
没句でも一応化粧変えてみる

竹原市 若 年 幸 子

フレンチへ胡麻の良く合う嫁の味
金運を巳歳の孫に期待する
巳の歳の金運しかと抱く賀状
孫も去に正月も去り大掃除
家カイマシタ事後報告の子のメール

竹原市 土 井 輝 恵

狎犬に阿吽の呼吸聞きに行く
心臓に機械を埋めて細き糸
ペースメーカーリスクも付いて得た命
みんなみんな元気でコロリ夢を持つ
感謝せぬ男の鼻がピノキオに

宇部市 高 山 清 子

公約はダルマに目入れ忘れ去り
脇役の視線気になる主役の座
愚痴こぼすと思わせ我慢聞かされる
にらまれる役を覚悟で手を上げる
年の功潮時よんでしめくくる

松山市 神 野 きつこ

もう一度飛んでみるかと足鍛え
ゆとり教育失敗でした覇気がない
同窓会今さら名前聞けません
ノンアルを飲んで仲間の輪に入る
五十四歳ハローワークの風当たり

今治市 渡 邊 伊津志

絆とは人が結んで人が解く
皆で食う飯はいい味連れて来る
元子供なのに子供が分からない
眼ではない処目にするアイライン
正直に人柄見せる五七五

大洲市 花 岡 順 子

人ごみの中ウィルスに取りつかれ
お見舞いのメール優しい音でくる
インフルエンザ初外出の足を止め
もめるだけもめて落ち着く元のとこ
パソコンが拗ねるとすぐにギブアップ

四国中央市 篠 原 久

掛け違いボタンの穴がもめている
みぞおちの辺りで雪崩おきそうだ
処方せんで出来ない葉恋病
胸痛むいじめ体罰昨日今日
祖父のプライド敵に回して紙パンツ

香南市 桑名孝雄

佐賀県 真島久美子

年賀状やめたが無沙汰詫びは書く
数えと満のこの差おろそかには出来ぬ

長生きと健康寿命とは違う

意気軒昂酒が入った時のこと
休耕田ご先祖様が化けて出る

宿毛市 増田純子

札幌市 佐藤登美子

胸奥の原風景に空の青

生家跡風が踊っているばかり

きれいごとですか正義の勝つ童話

憎んでは駄目だね大地あたたかい

今日せめて善女でいよう初詣

唐津市 北村松風

弘前市 肥後和香子

鉄塔を今年も昇る初日の出

米寿夢まだ希望持つ宝くじ

春なのに虫もつかない娘が不憫

気持よく昼寝の妻だ留守電に

千年の霊気ただよう奥の院

唐津市 吉富節子

塩竈市 木田比呂朗

無人駅肩を寄せ合う落葉たち

困難もくねくね交わす巳の年よ

節電に眠る湯たんぽ胸を張る

台詞忘れパントマイムが客にうけ

ただ酒を味方の顔で呑みに行く

ビフォーアフター恋ほど分かりやすきもの

ボーダーの服じゃ勝負にならないわ

アドリブの中で男が瘦せてゆく

ストレスを消せば無色になる明日

切り捨てる数字のあたり君と僕

おだやかな巳年の朝だ深呼吸

おみくじも吉を引き当ててまず安堵

シクラメン心をいやす冬窓辺

半世紀働き通し節くれ手

便利さは人の五感を鈍くする

海老フライのしつぱくらの幸がいい

無我夢中もうお正月終わってた

一刻者対じよつぱりで花が咲く

これ以上望まぬワインと薔薇サラダ

男きるように薄めのレモンスライス

旅行社のセールスチラシ多色刷り

ケータイも春だはるだとはやしたて

シャッターチャンスにデジカメ電池切れ

鏡見て繰り返してるハイチーズ

インフレを余生の地図が脅えだす

横浜市 巖田 かず枝

国挙げて子育てせぬと減びます

老人の財布を狙う詐欺と国

何事も普通が良いと思う日々

神様に聞いておきたい後の事

好物の菓子と絵本で孫を待つ

富山市 有澤 嘉晃

語り継ぐ長寿の皺がドラマ秘め

裸木が山の孤独を垣間見せ

煩惱を洗う法話へ耳を寄せ

言い訳はあるがもみ手に遣られてる

晩学の辞書に生きがい聞いている

岐阜市 平野 あずま

インフレデフレ真の姿が掴めない

定年も少しうれしい日曜日

生きるのも死ぬるも急がず行くがよい

新しいテレビ中味は変らない

独りの夜炬燵で手酌冬花火

江南市 脇田 雅美

映倫に芸術作を刻まれる

水をやり花は私を信じ咲く

頑張れよ悩む人には通じない

優待券もらい大変義理果す

ねえあなた猫撫で声で扱き使う

豊橋市 藤田 千秋

葬儀屋の話が妙に馴染みだす

心臓の無駄毛わたしはまだ未処理

ネクタイを外し人間とりもどす

スカイツリー人と煙はすぐ昇り

防腐剤塗ってこの世を永らえる

京都市 清水 英旺

裏庭のサザンカも古い花数個

湯に浮かぶ柚子搔き寄せて香にひたる

大晦日心に積もる煤払う

一所懸命生きているかと自問する

七草が過ぎてエンジンかかり出す

八幡市 今井 万紗子

元氣かね福の神からくるメール

神仏同居してます平和です

一言が多い妻との詰め将棋

母が笑う私も笑う夢の中

星降る夜母と捜した父の星

大阪市 阿野 寿美子

したたかに生きた証のマイホーム

たまたまの留守頼まれて羽伸ばし

とちつては水に手がゆく講演者

金メダルラストに賭けて突き進み

妻の財布一筋縄でゆるまない

大阪市 柴本 ばつは

贅沢はできないけれど家族愛
口答えどんどんしてね孫たちよ
父母の恩夫の恩も忘れない
生命とはこうも輝くこども達
関心があるので裏もお見せする

大阪市 高杉 力

講釈がなければ美味しいひつまぶし
新調のクラブで打てど百十二
家路急ぐ男よく似た顔になり
手作りの名刺に自由人とあり
まな板の音で目覚めた頃の幸

大阪市 梅里 南天

星が降るクラリネットを吹く夜は
魂の寒さよけかなクリスマス
羽子板も独楽凧もなく裏通り
年賀状仕事を已めた人ばかり
昔土佐今年は受ける会津藩

大阪市 平井 露芳

換気扇すまん言うてる鍋こげて
イの一番あれからテレビ六十年
過労避けテレビ一服させてます
もう一年行けると定期据置きし
AKBどれも同じ顔に見え

大阪市 前川 善之

母の恩地球の重さより重い
世の中は嘘も誠も入り混じる
八十代生きるも死ぬも神の手に
霜降って野菜甘さを増してゆく
純と愛朝をやきもきさせている

泉佐野市 稲葉 洋

来ましたよあんなに待った春ですよ
心なしか谷川さえも春の音
春風が歩数を二割ほど増やす
卒業という三月にある句点
嘘泣きも愛想笑いも長ける歳

池田市 上山 堅坊

壺を得た指摘ごとくと唾を飲む
陽を浴びて睡眠剤になる蒲団
見識を広げてくれる趣味の友
潮風にねじれた松にみる命
沈黙が気まづくならぬほどの友

貝塚市 石田 ひろ子

願い事一つに絞り初詣で
レントゲンの結果歯科医の思案顔
あついに抜歯戦友死守せねば
木枯しと帰るわが家のおでん鍋
プライドを捨てるとスツと抜ける棘

貝塚市 吉道 あかね

心技体湯治の宿で整える

お湯三昧化粧する暇ないのです

一日に三度は入る三朝の湯

ほほ紅を少し濃くする寒の入り

冬木立私も五感研いでいる

河内長野市 大島 友子

島結ぶ船で嫁入り半世紀

大吉を結び初恋成就させ

上げ底の土産が旅のトリ務め

耳一つ目一つ閉じて波立たず

下駄を投げ買った馬券が大当たり

河内長野市 辻村 ヒロ

飯まだかメールが結ぶ反抗期

チンしてね出掛ける前に妻の声

山の駅蝶が迎えに来てくれる

ウィルスに負けぬ栄養つい肥満

順調に老いていますと年賀書く

河内長野市 藤 塚 克三

要注意今朝の女房愛想良い

安らぎはいい句が出来ておーいお茶

体重計機嫌悪いとよく振れる

登り坂機嫌を取ってペダル漕ぐ

小遣いの値上げは鼻であしらわれ

岸和田市 増田 隆昭

後期高齢まだまだ恋もするつもり

年とつてみても生き下手直らない

呑み過ぎちゃダメよと医者をやさしい目

老いて知るバリアフリーの有難さ

お迎えが来ればアイよと行く気だが

堺市 羽田野 洋介

美しい朝だ今日こそやれそうだ

子には子の孫には孫の小宇宙

ふたつ返事ハイはひとつでいいですよ

無愛想な孫より温いペットの目

賑やかとうるさいのとは紙一重

堺市 大和 峯二

やさしさで真の強さをもしだし

めざす先ちがえど平和あつてこそ

この地球いじめないと嘆いてる

被災地の笑顔の子らに安堵する

十三万リストラ許すむごい国

高槻市 田中 由美子

子別れの後ははるかな二人旅

何気ない立ち振るまいにある美学

夫婦とは見てはもらえぬ仲の良さ

人の輪のまん中において妥協癖

素顔から出る年輪の美しさ

年末の仕事段々略式化

高槻市 鳥居 宏

つまらないTV情性で見てるだけ

詐欺師から立派な話聞かされる

遊んだな人間らしい顔してる

終着点わからぬままにひた歩く

高槻市 原 洋志

ついてくる影をしつかり手なずける

水はけの悪い頭を追づれに

カタカナがひらがなになり雨が雪

ややこしい話はあとで回る寿司

明るさを蒔きにヘルパー今日も来る

高槻市 三谷 白黒

妻病んで日頃の苦勞思いしる

大掃除使わない物多過ぎる

二人だけ平穩無事なお正月

もう一分目覚めた時は一時間

紅白は名前知らない歌手ばかり

豊中市 荒巻 夢

さあ出番だ戦争を知るわが世代

殺し合いを大義と呼んだ愚か者

初鏡母そっくりの顔覗く

たくあんを漬けてた母の腕まくり

寅さんのように刈られた垣根あり

思い出が顔を揃えている昭和

巣穴出る母子に春の風よ吹け

新顔のメインはねんね乾杯す

賑わいが去ってふたりの小正月

今年こそ今年こそはとえべっさん

富田林市 関 よしみ

哀しみと二人三脚して抜ける

奇跡にはまだまだ足りぬ愛の量

桜貝やさしく悲恋聞いてくれ

初めての一步差し出す手が温い

歩の意地で金の歩幅を計ってる

富田林市 山野 寿之

削除キー今日一日を過去にする

世渡りが下手な男の土踏まず

手応えは確か獲物はふところに

忍の字が今日も明日も吹き溜る

核心を突いたところが乱反射

寝屋川市 岡本 勲

買物好きの妻にひかれて払わされ

定年後妻の背中が広く見え

きっぱりと断る役はいつも妻

頼りです医者と年金仏さま

スピードはそれだけど行くあの世

藤井寺市 肥山一文

延延ともてたもてたと酒の席
外国に行くためドルで貯金する
アルバムにまだ生きている母の顔
あの人の影を慕って街に行く
思ひ出す凝つてた母の肩たたき

羽曳野市 藤原大子

あいさつを交わしそこねて気まずい日
言いすぎて戻せぬ言葉責めてくる
ありがたい変らぬ日々が送れてる
望まない痛い場所増え愚痴も増え
迷つてゐる間に事は過ぎていた

羽曳野市 安本美喜

張子の蛇描きよき友垣へ本年も
自治体の知恵を絞ったキャラクター
食べ過ぎの薬内緒で飲んでます
早梅を見しに城下を二度三度
嫁菜きて春の息吹きに感動す

箕面市 酒井紀子

今日のわたし曇りのち晴雨あがる
見ぬふりして晴着みくらべ初詣で
百歳も稀でなくなる長寿国
健康の神話に委ねサブリのむ
上司のごり押し会議白ける

箕面市 寺井柳童

寝正月毎年同じ事を言い
飲み慣れぬワインに多弁目はとろり
温暖化どこへ予報次々氷点下
柿一つ残し夕焼け寺の鐘
手鏡にそつと手がゆく解れ髪

箕面市 村田恵子

正座して父は聖書を読んでいた
本買うと言えば小遣いくれた父
愛されているから父とけんかした
二十年経つても父は夢に来ず
冷めた眼でわたし観ている私いる

八尾市 西川義明

うちの子が話がなんと抱くペット
喜寿の僕趣味のクラブじゃ若手組
成し遂げてゴジラ静かにパット置く
鯛大根とても相性よい夫婦
夫婦でもちゃんと言うてる ありがとう

大阪府 小栢こずえ

返す事出来ぬ恩あり去年今年
里帰り親より高き子を連れて
新米を炊き上げ釜が歌いだす
笑顔良い人にはみんな良い笑顔
物足りぬ愚痴はこらえて腹の中

大阪府 神野 千恵子

恵まれぬことが幸せとは言えず
時間だけたつぷりあつて日がな無為
六方踏むように引退して空ろ
自信など無くてしている高笑い
悔いること一杯あつて日が眩し

大阪府 西川 冷子

総理の席かわつただけで景気づく
霜踏む音静寂破る小気味良さ
駅伝の姿元気を分けられる
冬座敷特等席はいつも犬
霜柱足に感じる里のみち

神戸市 井上 忠貞

一日を大事に生きて今がある
カップめん三分待てぬあわて者
いじめつ子さみしがり屋の裏返し
善徳を積んで来世の切符買う
発想を変えて飛躍の第一歩

神戸市 木村 忠義

健康になると再び欲が出る
とげとげしくならぬよう日々花を見る
日々花と暮らしていいな花屋さん
二二んが四なれど世の中三や五に
不意に字が浮かんでこないときがある

神戸市 能勢 利子

褒められた人の名前は忘れない
褒められて張り切り過ぎて顎を出す
時時は自分に褒美旅に出る
保育園児の散歩笑顔でみとれる
スリムにはなれたが皺の目立つ顔

神戸市 山根 弘子

踏まれてもくじけず生きた戦中派
ボーナスは妻の予算で仕切られる
ハミングで妻嬉しそうボーナス日
老い二人ただ今傘寿通過中
残り火の温み分け合う老夫婦

尼崎市 小池 幸子

骨密度現状維持をよしとする
病んでるか庭のミカンが実をつけぬ
八十半ば入院歴が未だない
マラソンのゴール地点になる笑顔
七草に一草足りぬ粥を炊く

加東市 黒崎 美紗子

初春を揃って祝う帰省客
初春に会えば嬉しい子の育ち
買って欲し足ばたばたと寝ころがる
猪よ来ないでくれとつくる柵
親友を亡くし寂しく増す寒さ

川西市 日野岡 和之

無位無冠天下太平果報者

不器用も活かして粘り底力

血圧は家と病院七変化

百薬に優る感謝のありがとう

たらればを捨てて男の心意気

川西市 山口 不動

新年や巳歳の妻の恐るべし

名画座であの世の人がラブシーン

満月や星ふたつ連れ澄みわたる

雪かきの老人の村明日晴れよ

寝正月晴れ着はバジヤマ独り者

篠山市 石田 久子

つらくても戦中思えば楽なもの

独り居に馴れて自由というきまま

また一人順を待たずに先に逝き

計算に時間がかかる傘寿すぎ

和食好き長生きですと医者が言う

篠山市 永井 かほる

手作りを包んで友に匂届け

美しいごうかな包み中失望

この年で元気な事は太陽だ

句会の日朝から心はずんでる

お正月待ってた頃に帰りたい

三田市 足立 つな子

老いなのか美味しいものも減ってきた

御馳走は風呂が一番老いの身に

メールする友がいるからやる気です

片付いてやる気出てきた花も活け

これでいい平平凡でありがたい

三田市 上田 ひとみ

きつかけは雨の図書館隅の席

知らなかったのは幸せだったのだ

あたらしいしんどいことにぶつかろう

聞いて聞いてと寄つて来るのは雀

あの人の心のなかに入りたい

三田市 多田 雅尚

塾講師やる気引き出す仕掛け人

サザエさん家族揃つて不老不死

ペット好き何故十二支に猫がない

バイキングお酒だったらもと取れる

春よ来い福も早くと豆をまき

宝塚市 丸山 孔一

病癒え頬が楽しむ外の風

根を張った杉の木寺の由緒言う

さりげなく白鷺一羽冬の川

ちよつと来い言われちよつとで三時間

今年こそ診察券を増やすまい

西宮市 株元玲子

足折れて心も折れたハプニング
病む人の十人十色胸つまる
優しさの空気が泳ぐ四人部屋
退院の日青空見上げ深呼吸
福の神連れて来いよと巳を拝む

三木市 山口久子

初参り家内安全祈るのみ
おみくじが小吉なれど身大吉
おじいちゃん集会所でも一言居士
孫娘嬉しい門出祝酒
新年に孫こうのとりさずかりて

奈良市 前田弘恵

一年が早くてあの世近くなり
口角を三日月形に筋トレス
投函をされずカバンで二泊する
父母逝きて疎遠になつていく絆
奥飛驒の雪を掴んだ露天風呂

和歌山市 さかたきく

杉花粉太鼓たたいて飛んで来る
一円は無くてはならずあれば邪魔
ポーナスに狙い定めたコマーシャル
節電に雀もチュンと日向ぼこ
踏みだした年金暮し板に着く

紀の川市 楠原富子

腹を割り痼りが一つずつ溶ける
逆らった父の仕事を継いでいる
幸せの時を刻んだ砂時計
コーヒーの香りで和む小宇宙
うけ売りの亡母の言葉で子を諭す

田辺市 小川イセ

五年日記粹をはみだすありがたさ
父の道具箱時代遅れが詰まつてる
年ごとに物干し台が高くなる
雲ふわり乗って行きたいふる里へ
和洋中詰めて我が家の幸の重

和歌山市 森下よりこ

落選の議員背後の千羽鶴
年月にすっかり草臥れた財布
ラジオ体操老いのからだを目覚めさす
仕事している間は老いを感じない
断わりがいえて肩の荷軽くする

倉吉市 中村毅

私は今年の漢字カネと読む
美しい国から次は強い国
愛犬がスーツ姿に知らん顔
深くバットを置いてゴジラ去る
茶柱に少し期待し街歩く

倉吉市 前田 喜美子

復興を祈る東北二度の冬

神仏を無心に祈る老いた父

迷宮入り事件の鍵が覗けない

試食して回る楽しみ老いの旅

小さくても望みもある八十路

米子市 池岡 たけし

穏やかな元旦むかえ手を合わせ

今年こそ今年こそはで八十路坂

忘れまい食べ物のない苦い道

新年も五体満足初笑い

蛇だつて聞けば欲しがる手や足を

米子市 加藤 正二

血圧が上り下りの年の暮れ

マイペース足がだんだんおそくなる

マイペース気どらず生きて楽しもう

戦中の暮し語つて笑われる

平穩に見えても八十路寒い風

米子市 野川 宣子

已歳の孫は脱皮重ねて若武者に

先輩の学ぶ姿勢について行く

孫三歳夢は大きな未完の絵

八十八の手間ひま掛けて米となる

恙なく今朝もごはんの炊ける幸

鳥取県 小野 鶴子

冬枯れの落葉の底に虫の宿

七光りそろそろメッキ剥げる頃

かくれんぼ影が残つてみつかった

道祖神円満ぶりを憚らぬ

身を切らず血税だけが先走り

鳥取県 下田 茂登子

自信作選者の目から外される

八十路坂検診受けて命乞い

三食と薬忘れぬ老い夫婦

医者梯子老いの一日忙しい

孫美人自慢の種が一つ増え

鳥取県 田口 清帆

年金で暮らす老後のパラダイス

人生は浮き沈みだと覚悟する

机上論ならば平和の花が咲き

干支巳年ゆつくり長く生きましよう

夢に見た静かな時間持て余し

鳥取県 吉野 いさお

しわぶいて体裁てらう胸のバラ

胸襷に驕つた染みの跡がある

歳月に人は流され丸い石

無位無冠なつて気が付く柵の外

足腰がよたよたしても回る口

松江市 相見柳歩
生きていることがうれしい君に逢う

ラブレター行つたきりなら次の恋
考える半分以上君のこと

寝入る時こころの染みの声を聞く

松江市 河西草庵

晩成の樹にもきつと花は咲く

世の中をぎよろり眺めて余生ゆく

抜け殻を入れた財布に夢を溜め

今日もまた腹を立てたり笑つたり

出雲市 黒目英男

是々非々で決めてほしいな政策を

冷たさに悲鳴を上げた水仕事

パソコンもケータイもなく生きている

一心に上達願う寒稽古

雲南市 菅田かつ子

元気かと春告げ鳥が戸を叩く

一目散出かけて行つたミケの恋

探しものしているのです うろうろと

ふり向けばあれやこれやの恥かしさ

岡山市 前田恵美子

一年に一度会う友活性剤

四十年同じおせちで味伝え

元旦の清んだ空気をうんと吸い

新春は朝日もぐんとお洒落する

岡山市 永見心咲

平凡に行きたいと乞う茜雲
駅までのたつた五分というデート

縛られた時間も幸と知つた蟻

吸い込まれる様に改札抜ける蟻

高知市 三谷待太郎

集落も大河もさすが冬枯れて

冬の河アユ師はそこにアユを見る

漁期まだ暦睨んでたぐり寄せ

アユ達よ清流返せと言つてみて

北九州市 小松紀子

これしきの事で腰痛やはり年

グルメの話になると目がいきる

今佳境あのコマージュアルがもどかしい

パンの耳からりと揚げてなつかしい

福岡県 本田さくら

いとし子を見るママの目はちひろの絵

日一日知恵つく孫のいとおしく

オギヤアオギヤア精いつぱいの意思表示

見るさわる興味津々一歳児

佐賀市 清水園實

今年こそ外食せずに食守る

将棋盤係に本気でにぎる駒

食べるだけ食べて悔い出るダイエット

青春の気分で傘寿生きている

唐津市 岩崎 實

爺婆へ福が舞い込む笠地蔵
離婚率増えて仲立ち役も減り
焼き芋ができましたよと落葉焚き
七草でひとだんらくのまとめ買い

熊本市 杉野 羅天

初鳴きの若雉強さ今一つ
蠟梅に春の到来たずねたり
この峯も昔山伏立ったとき
指揮の真似肩を痛めて泣き笑い

山鹿市 三谷 たん吉

困りもん的を射てないお節介
たん生日誕の字忘れ辞書をひく
反省もふんばりもせずまた一年
何げない近所の声にほぐされる

シドニー 坂上 のり子

ポリウムを下げて真夏の夜のジャズ
べつたりと床に寝そべる猫の夏
忘れ物がこまめに歩かせてくれる
今日も飲み会断る勇気ない絆

札幌市 富永 恵子

前向きに進む明日と二人づれ
一行詩今日の私を保存する
外の雪気にしてませんシクラメン
アスパラの緑懐かし雪の山

弘前市 高森 一吞

限界が来たかも知れぬコップ酒
風へ向く男としての拳上げ
左遷地の雪にだんだん足も馴れ
地吹雪や女の涙真正面

東京都 井上 つよし

脱原発シミュレーションで行き詰り
相棒に午後の予定がまた狂い
五円玉で御利益願う神頼み
歳男屠蘇と雑煮で寝正月

東京都 大竹 一良

人の良さにじみ出ている軽い尻
一時の無駄長い目でみる余裕
相性が悪いと言われ子だくさん
無視されて負けるものかと鞭をいれ

東京都 高岡 弥生

ありだよね傷をつけない嘘ならば
親よりも精神的に大人な子
祖父母逝き減ってきたのはお年玉
台所立つてばかりの三が日

佐渡市 高野 不二

熊も猿もいません人もへるばかり
薬がへって寿命がのびる訳でなし
三十年国へ帰れぬ人がいる
いい事があるかと主義をかえただけ

熱海市 三 谷 圭 角

柚子湯入り行く末暫し考える
三時間かけて竹馬に会いに行く
声でかい人の意見が多用され
曲学の真偽正せよ我がメディアア

静岡市 渡 辺 芳 子

明日からの日記に埋まる字にキタイ
たからくじ当選番号見ぬが花
しばみゆく花と自分を見くらべる
何事も一生懸命終りたい

愛知県 樺 嶺 志

青空に向つて叫ぶ福よ来い
澄んだ空御岳久しくつきりと
賽銭に相場あるかと神に問う
快晴だ顔を揃えて空を見る

大阪市 浅 井 公 平

曇り空超高ビルが元氣よい
寒くても朝の空には鳥元氣
淋しさでついメールする年の暮れ
やせたなあ身につまされる靴の隙

大阪市 太 田 としお

アリバイを証明出来ぬ犬と猫
葬式がやたらと多い年の暮れ
大方はお金で融ける悩み事
近すぎて火傷になった美人秘書

大阪市 岡 田 元

宇宙まで抜ける青空風泳ぐ
勝って飲み負けても飲んでぐち飛ばす
父の背が後に続けと道しるべ
過ぎ去ればこの世短く果てぬ夢

大阪市 寺 本 実

子を育て親の心にたどりつく
殺生な言いつつ決める腹づもり
これなんぼ値札見ながら聞いてみる
ラジオ止めひとり暮しをかみしめる

大阪市 栃 尾 奏 子

真実が優しく胸に突き刺さる
憎しみを堪えて明日を輝かす
目覚めよと神がタクトを振って春
故郷のあの日へつづく縄電車

大阪市 藤 田 武 人

肉じゃがに真心という隠し味
地方紙で巻いた野菜を送る母
氣の知れた奴等朝まで交わす酒
大の字になって青空ひとりじめ

大阪市 藤 原 千 恵 子

しんがりは初老の二人ツーリング
七回忌元氣を貰い帰宅する
福引で一泊旅行二人旅
憎しみも怒りも忘れ除夜の鐘

大阪市 松田 聰

探しものあきらめた頃見つけたす
あじけないパソコンだけの年賀状
期待よせ株の動きをじつと見る
年の瀬に整理整頓予定だけ

大阪市 吉田 知之

不祥事に役員並び深々と
毎年の歳暮届かず気に掛かる
七五三子供より親が見栄を張る
作句するたびに迷いが深くなる

河内長野市 穂口 正子

怒られて合点いかぬ子の涙
正論が出尽し本音転がった
欺かれ物言わぬ月寒空に
妻の乱ただひたすらに詫びるのみ

河内長野市 山本 エミ

怒鳴る癪丸い背になり今小言
コーヒーを点てて会話の温い風
重箱のおはぎに母をふと偲ぶ
一人居ヘラジオの声に励まされ

河内長野市 渡邊 修

育ち頃根こそぎ荒らす憎いシシ
震災の備えグッズで部屋満たす
ワイキキで特ダネ狙うルポライター
育めば今年も帰る鶴の里

岸和田市 中岡 香代

感情の高ぶりあらわ更年期
腹立てばストーブの豆煮えたぎり
春風の足音で去る雪女
わんぱくで逞しい子がいた昭和

堺市 梅木 澄空

好物のみやげ味方に午前様
座布団に崩さぬ膝の老い一人
最終のドラマに風呂もそこそこに
雑魚寝したクラブ仲間と露天の湯

堺市 増田 和幸

再開発いう名で廃る商店街
棄権罪あれば政治が変わるかも
年金日論吉札から先に出る
へそ曲り親のDNA受けて

豊中市 源田 啓生

人類がどうこうよりも己が身を
食べて寝て天声人語で脳活性
八十路坂少しきついと聞いている
川柳が支えてくれた後半生

富田林市 古田 千華

つつつと想い出連れて流れ星
でこぼこの人のぬくもり鄙の家
凍る夜は流星群が饒舌に
寒の星神が算盤はじくよう

羽曳野市 磯本洋一

尖る石古希に削れて丸くなり
就活で八十社受け自営業
アイパッド古希の私に無愛想
妻と行く銀婚の旅本音聞く

東大阪市 西田 いくひろ

いたずらな風が私の衣剥ぐ
演歌聴くラジオで僕は眠りつく
器用だと褒めて雑任用される
乱れてる心悪魔の手が忍ぶ

枚方市 松原 保

議長職名誉職ではありません
顔ぶれは敗者復活内閣だ
大河ドラマ分らぬままに最終回
観光地想定外がうらめしい

藤井寺市 田付 絹枝

年^{とし}齢重ね節分豆は鬼にやり
意気込んで味は二の次食べ放題
親友が親の遺産に胡坐かき
目を閉じてしばし聞き入る宮の琴

寝屋川市 小谷 滋彦

歳の差を一個と呼んで現代っ子
冬の夜にふと起きて読む路郎本
老医者^のの打音検診なつかしく
喋り過ぎすってんころり本音でる

八尾市 前田 紀雄

年金でデフレの坂が上れない
歳重ね体の部品煙吐く
ストレスが浅い眠りに輪をかける
古希半ば一汁一菜恙なし

八尾市 山根 妙子

流行語アベノミクスがまず決まり
当分はおせち再生したおかず
独り言感動詞出る冬の風呂
株高でうちのミクスもややうふふ

大阪府 市川 雄太

広まった風邪で職場がパニックに
故郷で見つけた曾祖父の短歌
年明けは皆でワイワイボーリング
始球式してみたかったボーリング

大阪府 坂口 公子

歳とても友皆天へ行き急ぎ
貌知らぬ賀状へ一言を探す
子や孫へ半端ではないお年玉
春麗ら夢見てるようどの貌も

大阪府 高木 道子

せっかちとおっとり姉妹もグルコサミン
此処だけの話と回覧持つて来た
古の神も好きだなネックス
初バブル大間マグロの味如何に

神戸市 興 水 弘

酒だけはベテランですと独り言
予定欄医者に行く日は花マーク
老人会思わぬ才が光り出す
あの世から妻が見ている笑つてる

加東市 岩 本 美緒子

髪洗い支援のケアは午前風呂
花の命初めて咲いた冬ばたん
愛しいぼたんスケッチ素直筆づかい
祝詞述べ年を重ねる一里塚

篠山市 北 澤 稠 民

悩みごとあるから今日も生きられる
薬より効き目抜群好きな酒
物忘れいやなことだけ忘れない
いろいろあつたけれども大晦日

篠山市 酒 井 健 二

年初めまずは知人の訃報聞く
小熊見て逃げの速力自己ベスト
しがらみが消えて学問好きになる
繊細な神経人の身を削る

篠山市 佐々木 勇

スイッチオンオフは私の節目です
青い海囲んだ地図に住む恵み
慈雨だろ里の青田が生き返る
地図上の小国だって意地がある

篠山市 谷 田 久美子

うれしかった余韻が残る三ヶ日
留守をする子猫出窓で手を揃え
曾孫に伝え残してゆく戦
寿司屋出てコーヒー店へ初詣で

篠山市 藤 井 美智子

続けたい老いを見守る五七五
一世紀生きた証の老母の春
底冷えへ老犬湯タンポ入れてやる
愛犬を看取つてつらい雪が舞う

三田市 雑 賀 一 泉

お見合いに冷汗ならぬ玉の汗
古時計内臓替えて生き返る
年の瀬に日本を見せる金の文字
低利子に貯まらぬ預金誰のせい

三田市 辻 開 子

晩酌をたつぷり酌いで仲直り
また今日も寒さに負けて炬燵もり
報道で地名が売れた尼崎
くれからの底冷えエコといわれても

奈良市 尾 畑 なを江

予定入れますます自分多忙にし
雪の下若芽がジツと耐え忍ぶ
人はみな初めての道歩いてく
故里がいつも呼んでる墓参り

奈良県 谷 川 憲

さびた声大売出しによく響く
煩悩を抱えきれずに年が明け
不具合を並べて言えば薬増え
寒空に元氣だせよと百舌が啼く

和歌山市 磯 部 義 雄

正月は四年に一度来ればよい
増税がいつか来た道あと戻り
身の丈に合った立場でものを言う
鉛筆で直線ばかり引く愚直

和歌山市 北 原 昭 枝

雪のみちななの花のみち会いにゆき
偶に会うからいいところばかり見え
ひとりではさみしい夜の冬ごたつ
あの頃を思いだして古手紙

和歌山市 平 田 元 三

やんわりと肩叩きする上司の手
厳寒がやはり待ってた猛暑裏
氣を汲んだつもりが要らぬ御節介
減って行くけど待っている年賀状

岩出市 村 中 悦 男

灯明がゆれる嬉しい神の風
新年の抱負楷書で書く日記
見当らぬ着物姿の初詣で
暖かい日差しを受けて花植える

田辺市 大 峠 可 動

初夢を抱いてうきうき遠回り
妥協する一句振子と揺れている
三月の風と春愁背を越える
許すもの許して生命うたい継ぐ

鳥取市 大 前 安 子

くつきりと私まで来た初日の出
巳の年も惑わぬように這うとする
変化球指一本の動きの差
お正月煮豆こととやわらかい

鳥取市 坂 本 とも湖

消費税国民の夢枯らすなよ
就職に期待かけた子虹が欠け
暮し向き妻が權利を握り締め
曼珠沙華ありつたけ燃え愛を閉じ

鳥取市 谷 口 回 春 子

無邪氣さが頑固な心手なづける
面影を追いつつ歳をとってゆく
この気持ち解ってくれよと目で合図
初孫の顔見て増えた顔の皺

鳥取市 津 村 律 子

医療費の五万円まだまだ元氣
嗜好品煙の量が増え不安
医療費よりも古稀の手習い高くつく
おめでたの幸せくれる第二子目

鳥取市 山下 凱柳

川柳と散歩が日課ボケ防止
眉間に皺美貌の顔が泣いている
賽銭をはずみでつかい夢願う
また没かそれでも懲りず投句する

倉吉市 岡崎 美知江

涙するたび強くなるアスリート
海ほどの涙流して今がある
いちよう切り輪切り短冊母の味
安全を支えてくれる派手な杖

倉吉市 田中 紀美恵

福の神探し歩いて嫁が来た
初仕事五円で神に福願う
今年一年神と仲良くすごしたい
うそつくとべろがもぞもぞ痛くなる

境港市 中井 虎尾

かくし芸大ぶろしきが口出する
冬キライひびやかざれ肌の荒れ
しまつてる知恵ひつかかり出てこない
山眠るここは眠れぬスキー場

米子市 生田 寒之

無免許の妻に運転指導され
バーチャル化進む紅白見惚れてる
一票を馬鹿にするなと揺り戻す
年金のほか頼りのない身です

米子市 田村 周子

八十路きて正月メニュー簡略化
冷凍がに鍋に最適大当り
そば食べて年越気分満喫し
神だのみご利益あつて桜咲く

米子市 見山 温子

老いも主婦師走の風に立ち向かう
クラス会葉見せあい自慢する
回覧が立派な門に一步引く
おでんの中自家菜園が煮えている

米子市 湯浅 俊久

用のない明日に備えて食事とる
積雪へ用意してある言い逃れ
外は雪コタツで眠る魚釣り
いい天気みんな喜ぶプレゼント

鳥取県 大塚 美代子

八十路坂越えても欲は捨てられず
望郷の空を夢見て鳴くカラス
日溜りでうっかり時を見忘れる
行つて見よう昨日と違う道探す

鳥取県 飯野 菖子

明日の日が答えの出ないこの世です
腹の底割って話そう秋の空
子を思う親の願いはエンドレス
酸欠を取り戻したか秋の空

日々練磨お陰世界の金メダル
気苦労が消えて心に火が灯る
丸裸覚悟で向かい大儲け
晩に今日のしあわせ祈る日々

鳥取県 田村孝明

穏やかで平和な暮し望む春
張り切って自分の出来ることをする
また今日も張り切りすぎて肩が凝る
マネキンのような服装係帰省

鳥取県 橋谷静江

川柳文学コロキウム 10周年記念川柳大会

と き 5月11日(土) 受付開始 12時30分
出句締切 13時30分 開会 15時
(昼食は各自お済ませください。)

ところ 大阪駅前第3ビル17階 (株)ティーオー
〒530-0001 大阪市北区梅田1-1-3
(JR大阪駅より徒歩4分) TEL.06-6344-0205

会 費 2500円

題と選者(各題2句)

事前投句 「自由吟」(当日出席者のみ) 赤松ますみ 謝選

宿 題 「魔法」 弘津秋の子 選

「夕方」 門脇かずお 選

「けれど」 本多 洋子 選

「映画」 高瀬 霜石 選

「棚」 辻 嬉久子 選

「情」 久保田寿界 選

席 題 「印象吟」 選者は当日の出席者から決定。

☆印象吟締切は14時40分

宿題は欠席投句ができます。投句料1000円 用紙自由

締切 4月5日 消印有効 投句賞あり。

※事前投句・欠席投句先

〒572-0806 寝屋川市高宮1-6-19 北田 惟圭方

川柳文学コロキウム10周年記念川柳大会事務局

問合せ 赤松ますみ TEL.06-6857-3327

主 催 川柳文学 コロキウム

発行所 川柳雑俳研究会

〒419-0313 静岡県富士宮市西山1417-2

TEL/FAX 0544-16510264

振替 002301217459

URL http://www.edosenru.com/



目次

- 第一章 江戸で飲んだ酒
- 第二章 酒と職業
- 第三章 酒と容器
- 第四章 四季折々の酒
- 第五章 年がら年中酒
- 第六章 酒の肴に(酒と故事)



B6判
232頁
定価 一三〇〇円+税

『江戸酒の文化』 清博美著

◆川柳で覗く江戸の酒事情◆

江戸時代の、人と酒のこまごまとしたかわりを知ろうとすると、その資料として川柳に勝るものはない。

新川柳鑑賞 (13)

麻生 路郎

無理矢理に吞ませあんたもいけますな

(潮花)

「もう一ぱいどうです」

「もういけません。全く不調法なんで」

「いけんことがありますか。あんたのお父さんはなか／＼の呑み手だったからなア」

「父はまアかなりやりましたが、私は全くいけませんので」

「では、もう一ぱいだけ」

「それでは、ホンの少しだけ」

こんな調子で、無理矢理に吞ませといて「しかし、あんたも、なか／＼いけますな。矢張りお父さんの子ですね」

におそれ入ってるさまが髭髯として眼に迫って来る句である。

クダまかれるよりはと詩吟きいてやり

(す頭女)

ボーイフレンドか、愛人かであろう。ハイボールやウイスキーに酔っ払ってクダをまかれるよりは、よっぽどましだと詩吟を聞いてやったというのである。歌謡と違っ

て、女にとっては詩吟は苦が手なのである。作者の実感なのである。ネライに興味を持てる。

お流れを頂戴にでる自己嫌悪

(多久志)

宴会の席と見ていいだろう。宴会がはじまると上席の偉いさんに、われもわれもとお流れを頂戴に出るので、自分もその一人となったが、そのときの自分の心理を解剖して見ると、とにかく見知っておいて貰えば何かの時に、ムリな願いも聞きとどけてもらえるだろうという浅ましい心にフト突き当たったので、自己嫌悪を感じたというのである。作者の実感であろうが、そうしたお流れ頂戴派の心境を心憎いまでに衝いた句である。

絶句して歌詞を音痴が言ってくれ

(賀峰)

宴席などで、三味線に誘い出されて、唄ったものの何んかの拍子に絶句することがある。まことにバツの悪いものである。そんな時に、横から歌詞を言うてくれたので、続けて唄い終る。その言うてくれたのが自分では口々に唄いこなせない音痴であったと言っているのである。一寸面白い発見である。

所望され膳を股いだかくし芸

(春日)

宴会にかくし芸はつきものであるが、指

名されるのを今か今かと首を長くして待っている人と、ヒヤヒヤして首をすくめている人とがいるものである。

この句は舞踊か手品か、その内容は判らないが、所望されて膳をまたいで、出たところを見ると相当に自信があるのである。向うの方では、もう、何が出ようと、そんなことには見向きもしないで盛んに呑んでいる宴会風景を思わされる。

酒女許しお寺もアルバイト

(史葉)

時代の変革は寺を従来の寺として存在させてくれない状態になった。要るものは要るが信徒がそれを負担しようとはしない。勢い寺の経済がアルバイトに道を求めることになり、酒も自由に山門をくぐらせる。月が出た出たの唄声も聞こえるし、女もお好きなようにという訳で今日の寺の多くは席貸化されて来たことをつかんだのである。

献盃献盃B29のように来る

(春日)

いける口と見られたのであろう。追っかけ、ひっかけ盃が来る。それを本土襲来のB29号が、あとからあとからやって来て攻撃の手をゆるめなかったのに比したのである。比喩法の表現技巧で生かされた句である。「献盃献盃」と畳みかけた手法がこの句をいきいきさせたことも見通がせない。

誹風柳多留——一篇研究 91

上人かしまつてうけたまはる。
清 賛。

712 前銭の客だと根津で大事がり

小栗 前銭は、前金に同じ。品物を受け取る前、または支払い期限に至る前に代金を支払ったり、または、受け取ったりすること。またその代金（日）。

主題句は、根津の岡場所で前銭を払う客を大事がるというだけのことと思うが、実態がよく分からない。先人の解には、根津の岡場所は原則として前払いだったとされる向きがあるが、全部が前払いなら「前銭の客だ」と「大事がる」理由がわからない。むしろ、基本的に前払いでないとする、前銭の客は取りはぐれがないから大事にされるということ、辻褄は合いそうな気がする。また、

前銭だなど、おどける根津の客 明四天²という句があるが、これも「原則前払い」では「おどける」ことにならないと思われる。そこで、以下は何の確証もない駄労解だが、「前銭」（前金）は大工の業界でよく使われた言葉ではないかと推測している。現在でもそうだが、普請の代金は、契約時あるいは着工時に一部を前金として支払い、次に中

710 女房の留守内中ウがわんたらけ

小栗 そのままの句。女房が留守だと、亭主は食事の後片付けもロクにしないので、家の中がお椀だらけになつてしまう。

女房が留守でながしにわんだらけ 十三¹⁵
女房の留守押入れへおつつくね 四三³³

清 賛。この状況今も変わらず。

711 さんそつをなせぎいたよと鬼がせめ

小栗 譏奏は、他人のことを悪く奏上すること（日）。

醍醐天皇（延喜帝）が、時平の譏言を信じて道真を左遷した事によって地獄に堕ち

たという伝説を題材にした句。地獄の鬼が「譏奏をなせ聞いたのだ」と延喜帝を責めているというのである。

あんぎのわるさ地獄にて知った人 一四二²²

（参考）この伝説は『太平記』（巻第三十五 北野通夜物語の事）に詳しいが、ここでは「広益俗説弁」を引用しておく。

俗説云、（略）延喜帝崩御の後、室の窟の日藏上人、頓死して冥土にいたり、帝にあひ奉りけるに、帝おほせけるは、（略）朕、在世のとき、父寛平法皇の命にそむき、時平が譏を信じて菅丞相をながしたる罪によって、此地獄に堕ちたり。此由、娑婆にてわが皇子にかたりて、くるしみをすくふべし、と有りければ、

間に一部支払うか、あるいは竣工後に残金を支払う仕組みになっていたのではないか。仮にそうだとすると、「前金」(前金)はいわば業界用語で、明四の句は業界用語をおどけて使ったということで説明できる。あるいは普通は「前金」というところを、根津は錢で払うので「前錢」とおどけたともとれる。主題句の場合は、実際に前錢をくれるので大事にするということももちろんあるだろうが、「前錢」に象徴される大工客を大事がったということではなからうか。

伊吹 賛。前錢が大工客の代名詞になっていたのかもしれないね。

山田 分かりません。ただ、

御吉例など、まへ錢書てはり

幸々安二比2

について、佐藤先生は「輪講三―」で、「前錢を書いて貼るというのは仕舞札のことではないか。諸兄の言うように根津の仕舞札であろう」とされています。もしそうであるなら、主題句は、そのままの句となりますが……。

増田 賛。大工用語なるほど。次回の日を約束して前錢で仕舞い、その客が来た景でしようか。

山口 礎に賛ですが、山田説のように「前錢」と「仕舞い」に関係ありとすれば、根津だけ

の用語であろうし、句の解にはドンピシャリ。清 前錢と大工の関係、調べる必要あり。

713 せんとつて壱人角力の氣の毒さ

小栗 ここで「独り相撲」は、錢湯で滑って転んだことだと思う。たしかに氣の毒なことではある。

伊吹 賛。

板の間のわらいハ壱人角力なり 安元義3
清 賛。

714 きよひめハ添おふせると釜はらい

小栗 竈祓いは、毎月晦日に巫子・山伏・琵琶法師が民家をまわって竈のお祓いをしたこと。またその巫子・山伏・琵琶法師。(江)安珍清姫の句。もしも清姫が安珍と夫婦になったとしたら、安珍は山伏だから、清姫の方は差詰め竈祓いにでもなつたろうということ。存外、いい共稼ぎ夫婦になったのかもしれないね。もつとも、例句のような予想もあるのだが。

あんちんハとても添てもちんきよなり

明五智5

清 賛。

715 一と七日持仏くいものだらけ也

小栗 持仏は仏壇のこと。亡くなったあと初七日までは、仏壇がお供えの食べ物で一杯だということ。観察句で、特に深い意味はなさそうである。

一と日過ぎると持仏入りがおち 安四信7

清 賛。

716 言葉たゝかい事おわり火吹竹

小栗 言葉戦いは、①戦場などで、まずことばで相手をやりこめようと互いに言い合うこと。②言い争うこと。口いさかい(口)。
夫婦喧嘩で、言い争いの後、亭主が火吹竹で女房をゴツンとやった光景だが、「言葉戦い事終わり」が謡曲「八島」の文句取りになっているところがヤマ。

言葉た、かいことおわり去り荷出る

三〇28

舌戦の壺番鐘は火吹竹

八13

山口 賛。「事終り」は舌戦が終つたので、戦いは続いてさらに激烈となつたのか。

清 文句取だから、あまり具体的な事を穿鑿せずとも……。

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から 昭和五十一年発刊)

昭和四十三年

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち

母の忌に今年も同じ雨が降り

母の忌にまだ詫び足らぬ灯を見つめ

雑草という根性で春に萌え

路郎先生三周忌

親のない子ら夢育つ雲の峰

老夫婦無口のままの朝の膳

賭ける気で左右の耳がききわかる

生々流転昼寝する日もある暮らし

言い負けてからの口数多いこと

大器晩成席順などは気にかけず

今に見ろという話から遠く居る

人柄を無口に見せた借り上手

昭和四十四年～昭和四十六年

エスカレーター妻を一段上に置き

ほんとうの総り人生第三期

十万億土近道さけて参りましよ

うちの女房靴下などにたとえまじ

いつ死んでもいいと老骸生意気な

枯れてから又養虫の役に立ち

おだてられながらも若さ崩すまじ

くずれ去る心 石仏群に佇つ

英語 de Senryu ⑮

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

夫より^{かよい}通帳の方を頼つて居
his wife depends for
her bankbook rather
than her husband's bond

弁護士も家賃の方は滞り
even a lawyer
is behind in
his house rent

～リバーウィローのため息～ (阿部佐保蘭の交流：宮森英訳に関する笠原路生の意見③)

宮森麻太郎の英訳川柳 19 句が、彼の著書『英訳古今俳句選集』の緒論 *Haiku and Epigrams* で紹介されたことは前号で述べました。その英訳に対する意見が出てきました。当時大阪大学教授であった笠原路生は、麻生路郎が主宰する『川柳雑誌』に「宮森麻太郎の翻訳が原句に甚だ忠実であるために、原句の内容なり、持ち味が明瞭でない憾みがある」(『川柳の翻訳に就いて』10 巻 3 号 1933) と自論を寄せました。そして宮森が翻訳した古川柳の「町内で知らぬは亭主ばかりなり」*All the town is aware/ Except her own husband.* に対して、「外国人が原句の意味を了解し得るかどうか疑わしい」と述べました。笠原は短詩形の翻訳法として 3 通りの方法を紹介しました。①原句を追語的に直訳。しかしこれはしばしば原句の内容が不明瞭となり意味をなさない懼れがある。②原句を多少パラフレーズ*する方法。原句の意味は伝えることが出来るが、冗長に流れ易く川柳の意義を没却することになる。③原句の内容または調子を表現する最も短い自由詩の形式をとる。そのために原句にない辞句を使用しても差し支えない。笠原の提示したこれら 3 通りの翻訳法は、その後の短詩形文学の翻訳に大きな示唆を与えました。翻訳に関する多様な意見こそが、次のステップへの道となります。文化背景や生活感覚の違いからどうしても翻訳しきれないものには、注釈や説明を加えることも必要ではないかとわたしは思っています。

* 語句の意味を別の言葉でわかりやすく述べること。

参考文献：阿部佐保蘭『川柳と翻訳』

愛染帖

新家 完司 選

河内長野市 坂上 淳司

戦績を付けて暮敵から賀状

(評)「丁寧なことである。もちろん、敵のほうが勝っているのだらう。奮起して、来年の賀状ではキツチリお返しをしてやろう。」

松山市 神野きつこ

更年期大きなパンツはいている

(評)男には理解し難い複雑な女性の身体。更年期ではいろいろな症状が出るらしいが、冷え症になったのだらうか。お大事に！

弘前市 福士 慕情

面壁九年僕はせいぜい二十分

(評)達磨大師を真似てはみたが……。しかし、たとえ二十分でも雑事から離れて静かに坐っておればリフレッシュできるのだらう。

和歌山市 古久保和子

背にカイロ貼って都会へ紛れ込む

(評)颯爽と肩で風を切って繁華街を闊歩しているが、背中にはカイロ。でも、それを知っているのは自分だけだからヘッチャラ。

泉佐野市 稲葉 洋

枯れ葉散る我は天下に疎く居て

(評)「桐一葉落ちて天下の秋を知る」を踏まえての一句。たしかに、大方の庶民は外野席から野次を飛ばす程度の関わりでしかない。

鳥取市 有沢せつ子

ぶれたのはきつとカメラの思いやり

(評)そう、シミや小皺まで分かる写真は不要。「美肌モード」にすると、自動的に修正してくれる「思い遣りカメラ」もある。

高槻市 富田 美義

愉快でもこんな顔しか出来ぬ俺

(評)「こころでは笑っているのだが顔はムツツリ」「気難しいオヤジ」と思われているのは承知しているが、今更どうにもならない。

神戸市 白川 淑子

日中韩仲良く浸かる有馬の湯

(評)国と国になるとメンツも絡んで簡単には妥協できない。だが、原点は人と人。裸になれば皆仲間。仲良くしようではないか。

大阪市 高杉 力

再会の友が知つてた好きな歌

(評)「おまえ、この歌好きだったな」と思いがけない言葉。そのようなことまで覚えていてくれたとは。友とは有り難いものである。

紀の川市 宇野 幹子

サクラサク誰かの絵馬を蹴落として

(評)一人が笑っている陰で、一人が泣いて

いる。それが浮世の定め。だが、有頂天が続かぬのも世の習い。好事魔多し、油断大敵。

東かがわ市 川崎ひかり

年末はボチもせわしい顔してる

鳥取市 池澤 大鯨

犬に服着せても芝居するじゃなし

海南市 堂上 泰女

功德積み試してみんかジャンボクジ

倉吉市 中村 毅

使い道なら決めている宝くじ

河内長野市 大島 友子

推敲を重ね傾く羅針盤

札幌市 三浦 強一

反論の余地なし妻のお説教

尼崎市 春城 年代

のほほんと生きてもきつい坂である

京都市 都倉 求芽

呼名することもあるから来る句会

鳥取県 細田 裕花

塩漬けの家訓出て来たお正月

弘前市 稲見 則彦

ゆるキヤラをイメージさせる妻がいて

和歌山市 柏原 夕胡

大それた願いMサイズが着たい

三田市 堀 正和

銀行とATMでお付き合

瀬戸内市 東横ますみ

踊いた場所ですっきり春を待つ

散髪に行くのはやめた寒くなる
米子市 成田 雨奇

びしょ濡れの赤いバイクにお辞儀する
岡山市 藤成 操江

卒寿越え五年日記の太いペン
田辺市 岡本 昇

派手な服部屋に吊るして春を待つ
奈良県 渡辺 富子

個人的趣味で下着のおしゃれする
枚方市 寺川 弘一

飾り物とると寒さが身にしみる
河内長野市 山岡富美子

お風呂場の鏡は怖いもの見たさ
川西市 山口 不動

追い抜かれ追い抜かれ行くターミナル
夕焼けるあんなところに鉄塔が
京都市 榎本 宏子

朝昼晩規則正しいケアハウス
父の金庫札でいっぱいだと思う
松江市 石橋 芳山

くだらない事だ私がする事だ
ツイッターに鰯が群れをなしている
榎原市 居谷真理子

手加減のなさが嬉しい好敵手
大仏の膝も痛んで古都の冬
津守 柳伸

瓦礫処理遅々と進まず被う雪
小豆粥餅は小粒にする八十路
大阪市

国会中継透視メガネは必需品
青森市 菊池 京

ポスターが雨に濡れてる民主党
大阪市 太田としお

妻の座にとぐろを巻いてメタボ気味
鳥取市 倉益 一瑠

私が生きてる限りお仏飯
八尾市 高杉 千歩

叛逆の鉢巻 青春メモリアル
枚方市 丹後屋 肇

アンボハンタイ叫んだ世代好々爺
大阪は嘘の数ほど橋がある
豊中市 水野 黒兎

レシビなどない母さんのニシン漬け
吹雪かれて尻尾だらりと垂れ下がる
青森市 守田 啓子

コホンコホン美女の咳なら許します
何役もひとりでこなすハーモニカ
弘前市 高瀬 霜石

ひとつでも合えば吉です福袋
人間の在庫が増えている不況
貝塚市 吉道あかね

罪悪感すっかり消えた昼の酒
付き添いの嫁が引き立つ同期会
堺市 奥 時雄

薔薇飾る激しい恋がしたくなる
ダイエットやる気ばかりが日々痩せる
岡山市 工藤千代子

存命は祈るしかないこのいのち
鳥取市 鈴木 一弘

授かった長寿馬齢と申すまい
大阪府 津村志華子

団体で論吉出ていく車検月
紀の川市 辻内 次根

湯気の立つ部屋で思うは亡夫のこと
三田市 石原 歳子

ひさしぶり夢の亡夫と痴話喧嘩
藤井寺市 田付 絹枝

今に見る使いこなしてやるスマホ
この顔のどこが悪いと鏡見る
西宮市 鈴木いさお

口笛を吹くと巳ーさん目を覚ます
強がりな君のお口へチヨコレート
西宮市 吉井菜々子

働いた代価たつたの三十坪
共稼ぎ行方不明の僕の分
大阪市 江島谷勝弘

父死んだ年から神籤引かぬ主義
ケア付きのホームわたくしには高嶺
大阪市 大川 桃花

わたしの前になぜか集まる空徳利
ゴキブリも立派になった台所
榎原市 安土 理恵

息止めて乗る満員のエレベーター
御神木監視カメラを付けないと
京都市 高島 啓子

三田市 上田ひとみ

取りあえずあったかいもん用意する
やわらかくもある母でいたいです

大阪市 田浦 實

落選の言い分けに出るお人柄

新刊の帯から読める世の動き

大阪府 初山 隆盛

相談に行つて宗教勧められ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

ワンメーターほどの弁解なら許す

鳥取市 高浜 勇

ネガティブな言葉はスルー聞き流す

神戸市 能勢 利子

重役の椅子取りゲーム見てる夫

枚方市 伊達 郁夫

少しづつ毒舐め毒に強くなる

堺市 矢倉 五月

イニシャルで入れたアドレス誰やった

岩出市 村中 悦男

本読みの子どもの声も遠い過去

佐賀県 真島久美子

その時はアナタの名前など呼ばぬ

倉吉市 牧野 芳光

山賊と山姥がいて賑やか

大阪市 谷口 義

にんげんやからお金のことも考える

三田市 福田 好文

無職にもしない無職と無い無職

海南省 小谷 小雪

冬の目のまん中へつちやらでいよう

唐津市 井上 勝祝

大人の裏を覗いた子の無言

八尾市 吉村 一風

スリッパはきちんと揃え置き直す

鳥取市 福西 茶子

揉めだすとすぐ仕切り屋になつて

香南市 桑名 孝雄

修身が大事な時に邪魔をする

大阪市 笠嶋 恵美

全没も勲章にして生きていこ

八尾市 田邊 浩三

計画は立てます鬼が笑つても

河内長野市 穂口 正子

介護ホーム眼下に墓場葬儀場

宇都市 平田 実男

葬式の梯子財布もくたびれる

岸和田市 雪本 珠子

泣かないわ恋は陽炎なんどもの

大和郡山形市 坊農 柳弘

口止めをされる話は聞かんとく

寝屋川市 森 茜

くしゃみする席からさつと逃げてくる

大阪市 奥村 五月

親じゃない神がさすけた嫌な顔

鳥取県 西谷 悦子

カニの食べ方三歳に伝授する

大阪市 析尾 奏子

母ちゃんのどこへ触れても愛だらけ

西宮市 牧淵富喜子

領空侵犯ヤクザ社会を見るような

弘前市 高森 一吞

父に似てきた骨格で女好き

芦屋市 黒田 能子

まんざらでない長生きを楽しもう

三田市 北野 哲男

家族葬子の尺八を聞く棺

三田市 足立つな子

戻るなら指輪を交わす頃がいい

池田市 上山 堅坊

悩みゼロなんて脳味噌死んじまう

藤井寺市 若松 雅枝

読めそうで読めぬ鮎屋の魚偏

米子市 高田 振作

下戸だって飲んで暴れてみたくなる

箕面市 広島 巴子

冬籠りレシビのような日記帳

大阪市 阿野寿美子

一人立ち家のぬくもりよく判り

寝屋川市 岡本 勲

定年後妻のしもべで勤務中

鳥取県 大塚美代子

帰省して天橋立股のぞき

東大阪市 西田いくろ

年度末予算はちゃんと使い切る

豊中市 松尾美智代
ところと煮込んでいます終の恋

岡山市 永見 心咲

長老がおとなし過ぎて煮えぬ鍋

島取市 谷口回春子

ぬくもりを抱いて絵手紙やつてきた

豊中市 荒巻 夢

孫よりもベット可愛い老いの春

高知県 小澤 幸泉

菜園も鳥居も並ぶビルの屋根

和歌山市 松尾 和香

巳の皮を入れて金運掴みとる

米子市 生田 寒之

減量も禁酒も拒否しまだ生きる

和歌山市 福井 菜摘

思い切り笑って今日を消化する

羽曳野市 吉村久仁雄

兄の顔の田植えの泥が笑つてる

西宮市 緒方美津子

盛大な拍手社長の根深節

枚方市 松原 保

あの新芽寒さ耐えたか見に行こう

三田市 久保田千代

花はいいただ咲いてただ散っていく

鳥取市 春木圭一郎

出来るなら思い出される人になる

大阪市 吉内タカ子

初日差し明るく動く両手指

和歌山市 磯部 義雄
いじめではないと言ひ張る教育者

米子市 中原 章子

運転をやめさす事の策を練る

堺市 内藤 憲彦

先生と言われただけで舞い上がる

羽曳野市 宇都宮ちづる

書き初めに挑戦と書く古希間近

羽曳野市 永田 章司

後期入り更新止めたバスポート

三田市 上垣キヨミ

画数は同じと知った鬼と姫

鳥取市 岸本 宏章

偏食の僕にはできぬレポーター

和歌山市 上田 紀子

私の弱さ知ってる糸切り歯

八尾市 前田 紀雄

年明けてアベノミクスが喧しい

富田林市 中井 アキ

取り敢えず消臭剤をふって待つ

神戸市 田中 章子

シルバーの割引きを聞く癖がある

鳥取市 竹信 照彦

間伐は金にならぬがせにやならぬ

和歌山市 土屋起世子

赤い靴右脳が少し若やいだ

河内長野市 梶原 弘光

結んで開いてホームの父はもう照れず

鳥取県 山下 節子
本堂にストープ三つ置き法話

奈良市 岩本 浩二

同期会先ずは寂しい訃報から

東大阪市 北村 賢子

しかめつつら止めて互いの杖になる

堺市 荻野 像山

杖つかう女房あこで僕つかう

大阪市 柴本ばつは

あなたとのご縁こんなに続くとは

豊橋市 藤田 千休

鼻クソを目クソが喰う選挙戦

尼崎市 小池 幸子

寒い夜は芋粥にして一人膳

和歌山市 平田 元三

向かい風老いのペダルを苦しめる

神戸市 山田婦美子

手と足が動けばそれで十二分

鳥取市 夏目 一粋

わたくしのためかと思う初日の出

大阪府 小栢こずえ

祝日を忘れて来ないバスを待つ

三田市 尾崎 一子

惚けないで鏡にそっとチューをする

高槻市 島田千鶴子

私の影遊ばせている水溜り

安来市 原 煩惱児

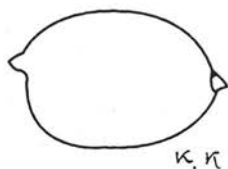
人間の戦地球を壊すまで

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 726句)



「浅い」 奥田 みつ子 選

浅く濃く筆の流れが生きている
浅はかを悔いるが汗は悔いるまい
浅瀬だと気付かずもがき続けてる
大都会浅瀬ばかりを泳いでる
浅はかなわたしに寒い風の刑
夫逝つて日のまだ浅い夢のよう
これからはゆっくり妻と行く浅瀬
浅いほど速い流れが足すくう
浅からず深からず良いお付き合い
遠浅のような人生身に合つて
浅知恵をしぼつて日日の糧にする
浅瀬には油断を誘う潮もある
まだ浅い春へ希望の芽が覗く
浅学の私を笑う電子辞書
何を盛つても許してくれる浅い皿

和歌山市 坂部紀久子
寝屋川市 籠島 恵子
大阪市 井丸 昌紀
松山市 神野きつこ
鳥取市 倉益 一瑠
三田市 石原 歳子
篠山市 遠山 可住
鳥取市 深澤千恵子
富田林市 古田 千華
京都市 清水 英旺
和歌山市 北原 昭枝
八尾市 内海 幸生
香芝市 大内 朝子
高知市 小川てるみ
長岡京市 山田 葉子

「浅い」 森山 盛桜 選

大丈夫期限切れでも日が浅い
何を盛つても許してくれる浅い皿
浅い眠りあの世この世が入り交じる
浮き袋つけて浅瀬で溺れてる
浅瀬に浮いている天使の誘惑
丁寧な河豚盛つてある浅い皿
浅瀬には隠しておいた糖衣錠
底の浅い男の胸にとび込めぬ
損失は浅くて済んだ真剣度
正義論浅い青いと諭される
浅漬けが旨い自由という朝陽
白状をあつさりさせたスープ皿
浅い眠りへ迷い込む怖い夢
浅い池月が浮かんで深くなる
悪口を聴いていますよ浅い夢

堺市 梅木 澄空
長岡京市 山田 葉子
箕面市 広島 巴子
札幌市 小沢 淳
松江市 藤井 寿代
藤井寺市 鴨谷瑠美子
富田林市 山野 寿之
大阪府 米澤 俣子
鳥取市 吉田孔美子
京都市 坪井 孝一
岡山市 工藤千代子
和歌山市 古久保和子
八尾市 村上ミツ子
鳥取市 竹口 清信
青森県 松山 芳生

浅い河けれども篤く流れたい
風評に右往左往の浅はかさ

広く浅くそれも一つの生き様か

傷は浅いと己に鞭を打つ八起

浅くとも渡れぬ河があるを知る

浅漬けに柚子の香って祖母想う

浅漬けの旨み引き出す塩麴

浅漬の紫紺の茄子に箸すすむ

浅漬けとお茶でしめたいフルコース

知りあつて浅いが何故か姉のよう

つき合いは浅いが息は合っている

浅学は恥じぬまだまだ日は長い

浅はかな狼が好んで戦する

微笑みを味方と思う浅い読み

浅い夢おほろおほろに亡母に逢う

風花が舞うて受験の春浅い

その奥は何も見えてこぬ上辺

浅知恵をさげて寡黙になる八十路

考えが浅いと知らぬ間にひとり

秀句

浅い色重ねて染めた夫婦色

春浅い茶の間に初孫の知らせ

寒の水浅瀬に清し水鏡

岩出市 藤原ほか

羽曳野市 永田 章司

大阪府 神野千恵子

枚方市 海老池 洋

西宮市 秋元 てる

寝屋川市 森 茜

河内長野市 木見谷孝代

大阪市 澤田 定子

堺市 志田 千代

奈良市 阿部 紀子

和歌山市 喜田 准一

西宮市 片山 忠

出雲市 竹治ちかし

高槻市 富田 保子

吹田市 須磨 活恵

橿原市 安土 理恵

和歌山市 柏原 夕胡

吹田市 太田 昭

三田市 久保田千代

米子市 後藤美恵子

岸和田市 増田 隆昭

神戸市 山田婦美子

立場上かしくく深入りは避ける

春浅く夢の続きを組み立てる

浅知恵を口にするから軋み出す

見出しほど分かっちゃいない週刊誌

微笑みを味方と思う浅い読み

浅はかも良いではないか無味無臭

底浅い男同士の不味い酒

浅はかな器に欲を食へこぼす

引き汐で残る友情ほんまもん

会えるまで浅い眠りで待つている

傷心へ角度の浅い日が当たる

三日見ぬあいだの花の浅い春

桃の実も流れて来ない浅い川

浅い知恵けつこう役に立っている

浅いのも含め全身傷だらけ

その奥は何にも見えてこぬ上辺

浅い傷だからジョークにしてしまふ

浅かったはずの殺意が揺れ動く

浅瀬しか知らず一生ここに住む

秀句

考えが浅いと知らぬ間にひとり

浅いとこ選つてこつそり越えて来た

痛烈な批判を浴びる浅い傷

池田市 栗田 久子

吹田市 須磨 活恵

和歌山市 喜田 准一

堺市 内藤 憲彦

高槻市 富田 保子

大阪市 谷口 義

奈良市 宇賀 史郎

紀の川市 宇野 幹子

神戸市 山崎 武彦

青森市 菊池 京

紀の川市 辻内 次根

堺市 荻野 像山

岐阜市 平野あずま

西宮市 牧淵富喜子

大阪市 伏見 雅明

和歌山市 柏原 夕胡

藤井寺市 太田扶美代

松江市 石橋 芳山

米子市 竹村紀の治

三田市 久保田千代

堺市 奥 時雄

川西市 西内 朋月

子の恩

小栗清吾

「子を持つて知る子の恩」という名言を吐いたのは、有島武郎でしたか。俚諺「子を持つて知る親の恩」のもじりですが、親にとつて子を持つ有り難さ・うれしさを、これほど見事に言い表した言葉を他に知りません。

親が子をかいいいと思うのは、江戸人も同じです。世の中を斜めに見て、何でもかんでも一回半ひねりしなければ気の済まない川柳作家も、親子の句はびっくりするほど素直に作っています。

寝ていても団扇の動く親心

初31

赤ちゃんに添い寝している母親。自分もウトウトしながら、でも無意識に団扇を動かしていて煽いでやっている。親心などとわざわざ言い立てなくても、自然に動作に出て来るのです。

物差しで昼寝の蠅を追つてやり

三9

昼寝している子の傍で、縫い物をしている

母親。子の顔に蠅が止まりそうになるのを、手にした物差しで軽く追つてやる。静かな午後の幸せな一時です。

よく寝れば寝るとて覗く枕蚊屋

拾九13

「枕蚊屋」は、子供用の小さな蚊屋です。枕蚊屋の中で子供が眠っている。あんまり静かに眠っているので、息をしているかどうかと、ふと不安になって覗いたりします。

母の笑窪を突つて乳を飲み

二二7

子を抱いて乳を飲ませている母親。子が乳を飲みながら手を伸ばして、母親の笑窪を突つていている。母親がほほえみながら顔を近づけているでしょう。わが子の小さな柔らかない指の感触を思い出させるような句です。

にわか雨添え乳に亭主使われる

二七33

「添え乳」は、添い寝して乳を飲ませること。にわか雨が降ってきて、洗濯物を取り込まなくてはいけないのだけれど、添え乳中の女房は身動きが取れない。そこで、「お前さん、ちよつと洗濯物取り込んでおくれな」と亭主が使われるのです。

添え乳して棚に鯛がござりやす

一四19

こちらは、添え乳中に、亭主が外出から帰ってきたような場面でしょう。昼飯時かもしれない。食事の用意をしなくてはならないの

ですが、そこは赤ん坊優先。「お腹が空いているなら、戸棚に鯛がござりやすから、出して食べておくれ」と。添え乳の女房にはかありません。

わが子が可愛いのは亭主も同じですが、どうもやるのが不器用で、いつも女房に叱られます。

寝かす子をあやして亭主叱られる

七11

女房が寝かせつけようとしているのに、傍へやってきてあやしたりして叱られます。会社勤めのご亭主には、ご経験がおりの方も多いでしょう。

軽々と赤子を抱いて叱られる

二二6

亭主は丁寧に抱いているつもりなのですが、女房から見ると無造作で危なっかしうてしかたがないのです。単に不慣れなだけなのか、それとも先天的に下手なんでしょうか。ところで、親馬鹿ぶりを冷やかす気味に見ている句もないではありません。

子をあやす内は本気のようでなし

四27

聞いて馬鹿なものを赤子に物を言い

二〇19

親が子供をあやす様子は、とても正気の沙汰とは思えない。何もわからない赤子に物を言うのは馬鹿なものだというのが、しかし、そこが親心というものであります。

「刺 激」

上 田 宣 子 選



春の陽に刺激されたか軽い靴
近隣が国防の隙刺激する
艶やかな着姿で目を奪う
春そこに辛い刺激を持つ花粉
料理より香辛料が気に入られ
刺激などいらぬ福島返してね
居眠りへ窓全開で冷気入れ
シミュレーションゲームみたいね父の舟
三面の過激な記事に馴らされる
反対の意見もあって引き締まる
妻がいるだけで刺激になっている
数の子がガツンと叩く総入れ歯
駅伝を見てジョギングをやり始め
シヨック死は困る刺激もほどほどに
とうがらし切ったその手で目を擦り
心地よい刺激求めて美術館
嫌煙の喉に紫煙が突き刺さり
美しい声に反応してしまう
少々の刺激じゃ迷い抜けません
身を守る程度の刺激臭は出す

高槻市	島田千鶴子	四條畷市	吉岡 修	高槻市	片山かずお	大洲市	花岡 順子	大山市	関本かつ子	伊那市	丸山 健三	堺市	矢倉 五月	鳥取市	平尾 菜美	札幌市	小沢 淳	大阪市	坂 裕之	和歌山市	上田 紀子	鳥取市	福西 茶子	横浜市	菊地 政勝	香南市	桑名 孝雄	河内長野市	谷 久美子	倉吉市	中村 毅	可見市	板山まみ子	和歌山県	森下よりこ	倉吉市	岡崎美知江	岡山市	永見 心咲
-----	-------	------	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	------	-----	------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------

刺激ない暮しに咲かす寒ぼたん
目覚しに本格コーヒーを溶れる
折れかけた望みへ凜とした朝日
亡父の背に未だ刺激を受けている
見え透いた世辞も時にはいい刺激
ライバルが刃物の上を歩いている
笑わせて座を丸くするピエロ役
覇気のないアリにラッパを吹いてやる
インパクトない素うどんの昼下り
夏蜜柑あのおすっぱさが君の味
ツーンとくる味が分かればもう大人
胸底に飛雄馬の汗が落ちている

吹田市	木下 敏子	吹田市	奥 時雄	堺市	内藤 憲彦	堺市	河内長野市	坂上 淳司	和歌山市	武本 碧	弘前市	稲見 則彦	鳥取市	斉尾くにこ	藤井寺市	太田扶美代	弘前市	高瀬 霜石
-----	-------	-----	------	----	-------	----	-------	-------	------	------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------

「夢見る」

伊 達 郁 夫 選



晩成の大型夢見たまま老いる
夢見るも夢砕くのも我が心
百までの夢を見ている古希の初春
夜の九時僕はいつでも夢の中
いい夢を見させてくれた膝枕
でかい夢見るときいつも酔っている
きつとまだ悪い夢見ていると妻
錯覚のままポジティブな夢をみる
夢を見て夢を掴んでいる気迫
ボクの夢 宇宙服着たクレヨン画
蒼天へ明日を夢見る竹とんぼ
リハビリーで一步あるいた夢を見る
スカイツリーに上り宇宙の夢を見る
暗闇の中で素振りをする冬芽
三月の潮騒だった夢一夜
夢を見る暮しが好きな鳩時計
傘寿とて夢と花追う旅衣
初夢は途中で切れた奴唄
衣食住足りてフワフワ夢を見る
夢で見た話に好きな色をつけ

鳥取市 有沢せつ子
高槻市 富田 美義
高槻市 片山かずお
大阪府 江島谷勝弘
藤井寺市 若松 雅枝
堺市 澤井 敏治
弘前市 稲見 則彦
紀の川市 宇野 幹子
東大阪市 北村 賢子
貝塚市 吉道あかね
和歌山市 福井 菜摘
堺市 遠山 唯敦
大阪府 板東 倫子
弘前市 高瀬 霜石
青森市 守田 啓子
大阪市 神夏磯典子
西宮市 緒方美津子
和泉市 横山 捷也
堺市 矢倉 五月
大阪府 初山 隆盛

ポケットで夢見のかげら温める
親の夢子の夢どれも金が必要
萎むまで夢見てすごす宝くじ
波に揺れ夢見ています真珠貝
バラ色の老後の夢は捨ててない
翼ひろげ少年の夢宙へ翔ぶ
エステ通いしてます夢を見ている
もしももしも夢の中から出られない
安泰な老後夢見たのが不覚
夢のある暮らし夢見て夢のまま
夢一つあつて見上げる冬の月
貧乏で育った輩のでかい夢

佳

正夢となつて此の世に生まれ出る
引き出しで夢が眠ったまま老いる
まっ白な手帳第一章は夢
年甲斐もない夢を見て鏡見る
i P S たつぷり夢が見れそうだ

人

満開の夢を見ながら枯葉舞う

地

夢八分はんのり咲いて日向ぼこ

天

夢いくつ投げ出したやら忸怩たり

軸

夢食べて生きているからでかい山

富山市 有澤 嘉晃
神戸市 白川 淑子
豊中市 水野 黒兎
高槻市 島田千鶴子
鳥取市 岸本 孝子
奈良市 渡辺 富子
西予市 黒田 茂代
榎原市 居谷真理子
堺市 村上 玄也
大和郡山 坊農 柳弘
米子市 生田 寒之
三田市 上垣キヨミ
鳥取市 吉野いさお
弘前市 福士 慕情
篠山市 遠山 可住
堺市 奥 時雄
鳥取市 夏目 一粋
河内長野市 山岡富美子
三田市 尾崎 一子
四條畷市 吉岡 修

「くねくね」

稲村 遊 子選



余生とてくねくねとする道である

くねくねと言うから眠くなるのです

くねくねと回り道してくる噂

くねくねと逃げる記憶を追いかける

くねくねと脱皮しながら目的地

くねくねの道に楽しい思い出も

くねくねと惚け上手で世を渡る

くねくねと気儘勝手な自家野菜

くねくねは好かんしっかり立ちなはれ

くねくねと裏道抜ける近回り

くねくねとしつこい人は無視をする

困難もくねくねかわす巳の年よ

氣いつけやくねくね道の下り坂

蛇行して歴史を刻む河である

肩を貸す方もご機嫌千鳥足

筋違い私に蛇が迫り来る

昨晚の日記くねくねさせた酒

決断を風に任せている柳

自分史を行きつ戻りつした迷い

くねくねとやがては辿りつくあの世

岩出市	村中 悦男	河内長野市	松岡 篤	四條畷市	吉岡 修	奈良県	渡辺 富子	京都市	榎本 宏子	亀岡市	井上 森生	和泉市	横山 捷也	河内長野市	木見谷孝代	西予市	黒田 茂代	大阪市	寺井 弘子	鳥取市	夏目 一粋	唐津市	吉富 節子	高槻市	初代 正彦	弘前市	福士 慕情	大山市	金子美千代	鳥取市	平尾 菜美	唐津市	坂本 蜂朗	和歌山市	上田 紀子	松山市	神野きつこ	紀の川市	宇野 幹子
-----	-------	-------	------	------	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	------	-------

幾曲り遠かったなあ通学路

おかしきは哀しきくねりながら生き

くねくねとしてもぶれない芯がある

私も知らぬわたしの脳回路

魂胆があつてくねくね鼻濁音

くねくねと本音見せたくない背中

くねくねもいい見えぬもの見えてくる

脇道のくねくね拾うもの多し

死んだふりばかりしている会議室

くねくねと文句言う智恵つけてくる

答弁はくねくね狙う時間限れ

くねくねと行こう大人の道だから

佳

くねくねの字でも自筆で書く誇り

借金取りが来たらくねくね逃げてやる

くねくねと縫っても決める糞糸

くねくねと隙間を抜けてゆく野心

札束を積まれくねくねする正義

人

言い訳をくねくね尻尾でています

地

生きるとはS字カーブが続いてる

天

もうくねることない川が寂しそう

軸

しがらみを解いてくねくねしたい日も

堺市	奥 時雄	鳥取県	斉尾くにこ	豊中市	松尾美智代	羽曳野市	徳山みつこ	奈良市	米田 恭昌	倉吉市	岡崎美知江	鳥取市	吉田 弘子	篠山市	遠山 可住	弘前市	高瀬 霜石	吹田市	木下 敏子	唐津市	仁部 四郎	橿原市	居谷真理子	奈良市	加門 萌子	鳥取市	福西 茶子	堺市	荻野 象山	和歌山市	土屋起世子	高槻市	富田 美義	河内長野市	山岡富美子	貝塚市	吉道あかね	鳥取市	岸本 宏章
----	------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	------	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------

民族の詩歌 (10)

― 仮名遣いと川柳

三好 專平

戦後になってから、おおむね川柳は「現代かなづかい」を使うようになった。しかし、俳句や短歌の世界はそうではない。むしろ、歴史的仮名遣いのほうが優勢のようなどころがある。

私の属する短歌誌「コスモス」(宮柊二創刊)では、新しい人しか現代仮名遣いを使わない。私も初めのうち歴史的仮名遣いを使っていたが、今は現代仮名遣いを使っている。理由は、好きな作家が現代仮名遣いを使っていたからである。好きな作家とは、坪野哲久や近藤芳美などである。

次は、ある知的障害者の手紙である。

こんにちわほくわとおきよおでうまれましたとおさんわびよおきでしにましたおかあさんわとおくえいきましたほくわよくはなじおだしますばんがすきですさよおなら

発音通りに書き、句読点もない。

現代仮名遣いは完全な表音主義を取らないので、「は」「へ」「を」「づ」などを残す。これがいいことなのかどうかは、わからない。中途半端だという人もいる(日本語撲滅論もあるくらいだから)。くだいようだが、もう一つ野口英世の母の手紙、

おまいの、しせには、みなたまけました、わたくしもよろこんでをります。(お前の出世には――以下略)

現代仮名遣いは、昭和六一年の「内閣告示」による。それ以前は、それに従わない。

手を出した方が負けだと下馬でいひ

誹風柳樽

当然、古い仮名遣いだが、一般的に江戸時代は、あんまり定家仮名遣いにこだわらないところがある。それが現代にも続いている。

基督のやうな顔して鰻ある

三太郎

はきつちり「歴史的仮名遣い」で作られている。引用するときには、現代仮名遣いになおすことがある。

伝統の束縛から逃れ、座にいて、自由を何よりも愛した川柳は、音読され、洒落を楽しみ、少しばかりの賞金で酒を飲み、花街に繰込み、ワイワイと騒いだ。

現代のサラ川・ベケボン川より

宝くじ当たると辞めるが合言葉
気合いだと娘うんざり気が合わず
オレ流を通して職場戦力外

◆ 句 集 鑑 賞 ◆

『平成二十五年』

新家完司 著

樋口 由紀子



新家完司さんの句集『平成二十五年』が予定通りに上梓された。『平成元年』に始まり、五年ごとの刊行、六冊目である。できるようなかなかできることではない。この偉業にまずは敬意を表したい。

トイレの戸いちにち何度開けるやら
ハエタキ命中しなくなってきた
黙禱は三十秒が丁度いい
そろそろと歩いていても歳はとる
七十年何回爪を切ったやら

六冊の句集で一貫しているのは独自の見つけである。彼の川柳を読んで気づかされるが多々ある。一体、一日にトイレの戸を何度開けているのかと数えたくなる。ハエタキが命中しなくなったことも、黙禱の時間も、言われてみれば確かにそうであることをうまく一句にしている。

ややこしい男もいるが僕の町
混浴は足湯でさえも恥ずかしい
飛行機の欠点たまに墜ちること
退屈に耐えて老人力がつく

彼は一貫して、日常を詠む。彼は日常の、そして、人のある種の、くだらなさ、つまらなさをよく知っている。それだからこそ、それらをひっくり返して、日常が好きで、人が好きなのだろう。しかし、若い頃からそうではなかったような気がする。人のくだらなさやつまらなさを嫌悪した時期をしつかりと通過して、今の彼が存在していると思う。だから、句に奥行きが出ている。また、本当の寂しさも知っているから、いくら明るい句を書いても、それだけに終っていない。彼は見かけによらず（失礼）繊細で、まわりが

よく見える、気配りの人である。

タンは塩レバーはタレと決めている
うぬぼれはボケの始まり辞書を繰る
ええかつこしいのペンツとロレックス

正直、まどろっこしくなった箇所はなんばがある。それはもう完司さんが言わんでもええやんかと思うところでもある。

飲めるだけ飲んで眠れるだけ眠る
声の出るうちにいっぱい歌わねば

「ガンガン」「バタンキュー」。これは新家完司さんのインターネットのブログで繰り返し使われている言葉である。翻訳すると、ビール、焼酎をガンガン飲んで、バタンキューとベッドに倒れこんで寝るという意味である。ストレス社会にあつて、これは神業に近い。なんとしあわせで、なんと健康的なと、少々呆れながらも羨ましくなる。

おもしろい空だいろいろ降ってくる
本日は愉快だったと太く書く

そうか、こういう気持ちで生活してい

るから「ボタンキュー」することができ
るのかと納得する。言葉は過剰にならず
にセーブされているが、「おもしろい空」
「太く書く」はさりげないが巧みである。
作者と作品は別だという説がある。し
かし、目くらましにあっているかもしれ
ないが、実物の完司さんはそんなに単純
な人ではないとわかってはいるはずなの
が、どうも完司さんの場合は同一化し
てしまう。これも技だろう。

こつそりと死んでいくのはむづかしい
葬式の受付ばかりやらされる
孤独死は失礼自由死と呼ぼう
脱ぎ捨てた喪服も黙り込んでいる
ともだちと決めたなら死んでもともだち
死んだ友みんな頭の中にいる

「死」もこのように詠む。へんに刹那的
にならずに現実的である。完司さんとは
ときどきメール交換をしている。その
ときどきだが、彼はいつも最後に「達者
でいてください」「元気でいてください」
と書く。そうそう、この鑑賞文の依頼の
ときも、そうであった。私は完司さんよ
り十歳も若く、どう見てもひ弱で病弱な
タイプではない。どちらかと言うと元氣

すぎて困られる方で、いつまでも死なな
いおばあさんになることを心配してくれ
る人もいるほどである。しかし、そんな
私にさえ、彼はそう言ってくれる。ご両
親が早死されたせいかもしれないが、彼
は死がたえず意識下にある。死を見据え
ている。彼は知っている人が亡くなるこ
とに耐えられないのだ。

守らねばならない靴の右左
日本語しか解らないから此処にいる
まだパワーあるぞと棒を振り回す

同じものを見ていてもどこか違う、何か
違う。彼の句集を読んで、いつも考えるこ
とがある。あたりまえのことを書いていて
感動すること、あたりまえのことが書いて
あるから感動しないことの差異は何なの
だろうか。心を揺さぶるのは一体、どこに違
いがあるのだろうか。それは共感ともち
よつと違う。感動するということと共感す
るはイコールではない。共感したから共鳴
したから、感動するのではない。完司さん
の川柳には人の妙味がある。

あきらめたとき美しくなるこの世
あの世でもずっと地球を見ていたい

句集の最後におかれた二句である。新
家完司さんをもっとも表していると思っ
た。この二句を読んで、小説家の角田光
代のエッセイを思い出した。

「人はその人の人生をそうするしかな
く、生きている。喪失はほかのもので
埋められることではない。人々は喪失
を抱えたままで生きている」

人にはそれぞれいろんな空虚、空白を
持っている。それが穴になり、心にある。
その穴を埋めるためにいろんなことをす
る。彼は川柳で喪失を書いているのではな
いが、埋めているものが川柳に表われてい
るのだ。それが新家完司さんの目である。

いちにちがひらひら東から西へ
三分も仰げば飽きる青い空
グー・チョコキ・バーどれを出しても
負けそうだ

その目も特別というのではもちろんな
く、演出的というのでもない。限りなく
ナチュラルなのだ。ずっと変わらぬこの
味があるから安心して句集を読むことが
できる。

『平成三十年』も楽しみに待っています。
(川柳「カード」発行人)

初歩教室

題 — 増やす

太田 昭

作品が、五音・七音・五音で構成されていると言っただけでは日記にもなりません。

古川柳時代から「皮肉味」「軽味」「滑稽味」は川柳の大切な三要素として欠かすことの出来ない持ち味とされており、だからと言つてこの三要素を、全て折り込まなければ川柳でないと言ふことはありません。

昨今の現代川柳を見ますと、無季俳句に近い川柳とは程遠い作品を目にしますが、やはり川柳である以上、古来からの三要素の香りを感じさせる作品であつて欲しいものです。

【少しの修正で良くなる句】

原 年金が足りない不義理また増やす 寒 之
添 年金が足りず不義理をまた増やす
原 子孫増えて足の踏み場の無いほろ家 紀美恵
添 孫が増え足の踏み場の無いほろ家
原 家の庭植木増やして森となり 久 子
添 植木増やし森のごとくになった庭

原 体重は増えてるきつと旅帰り	美紗子
添 グルメ旅体重増やし家路つく	
原 髪の手を増やす努力の無駄を知る	宏 造
添 髪の手を増やす努力も無駄と知る	
原 増やそうと思つても増えぬ友(中)	修
添 増やそうと努力はしたが友増えず	
原 類が友呼んで増えてく趣味仲間	大 子
添 類が友を呼んで増えてく趣味仲間	
原 心労が男の貌に皺増やす	史 郎
添 心労の顔に増やした皺の数	
原 孫増えて年玉増えて貯金減り	洋 一
添 孫増えて年玉増えて貯金減り	
原 乱立で漁夫の利を得た議席増	きつこ
添 乱立で漁夫の利を得た議席増	
原 復興の明かり増やそうアップにし	道 子
添 復興の明かりを増やす予算枠	
原 正月は堂堂増やす酒の量	眞砂子
添 堂堂と酒を増やした三が日	
原 お年玉増える金額減る貯金	一 文
添 お年玉増えて貯金は減るばかり	
原 コツコツを別通帳に貯めている	元 三
添 コツコツと貯める勝ち別にする	
原 投信で増やすつもりが何てこと	妙 子
添 投信で増やした金もふいになり	
原 デフレ脱却借金増えて行く	紀 雄

添 デフレから脱却しても負債増え	
原 寝溜めした財布は増やす策が出来	安 子
添 寝溜めしてお金を増やす策が出来	
原 ユーターン見越し増やした餅の数(備)	富 子
添 婦省の子らを見越し増やした餅の数	
原 空洞化シャッター商店増えてます	和 幸
添 空洞化シャッター街が増え続け	
原 相槌に寄付を増やせとせがまれて	滋 彦
添 相槌に寄付増額をせがまれる	
原 点検を増やす後から事故起こる	勝 治
添 点検を増やした後に事故も増え	
原 お正月家族がふえて箸増やす	(村)恵 子
添 正月の増えた家族に箸も増え	
原 一年の重み増しおり古曆	(宮)俊 子
添 一年の重みも増して古曆	
原 発言を増やすと役に踊らされ	(富)恵 子
添 進言を増やすと役に踊らされ	

【添削句】

原 デジタルで興味を増したテレビジョン 英 男
添 テレビジョン興味を増したデジタル化
原 老い二人頓珍漢の会話する エ ミ
添 頓珍漢の会話の増えた老い二人
原 えべっさん笑つて増えぬ皺の数(渡) 修
添 笑つても皺の増えない恵比寿さん

原 天氣図にだるまが増えて寒波来る 洋 志

添 天氣図の増えるだるまに来る寒波

原 増やしたいものはお金と信頼だ 回 春 子

添 お金と信頼増やしたいけど儘ならす

原 虎のファン負けて自棄酒増えていく 憲

添 自棄酒の増えて敗戦虎ファン

原 一步一步命減るのに増えてる荷 のり子

添 一步一步命は減つて荷は増える

原 スケジュール増やすばかりで薬漬 定 廣

添 増やしたのが塩漬にしたスケジュール

原 趣味の友増やし余生を豊にす 孝 明

添 趣味の友増やし豊かにする余生

原 お賽銭効いた分だけ増やしとく 信 二

添 ご利益があつて賽銭増やします

原 初暦たのしみ増やし友増やす (株) 玲 子

添 楽しみと友を増やして初暦

原 増えるのはシワに白髪に体重よ つ な 子

添 体重に白髪も増えて数もより

原 ほしくない一年ひとつ年重ね 開 子

添 ほしくない年を一歳増してゆき

原 令も増え病気の数と診察券 こすえ

添 診察券歳の数だけ増えてゆき

原 物置の使わぬ品が増えつづけ (株) 節 子

添 納戸の品使わぬのに増え続け

原 戦時中産めよ増やせと子沢山 登 美 子

添 産めよ増やせとせがまれていた戦時中

原 もう一本呑みたい口の世辞を聞く (前) 洋 子

添 もう一本欲しがる夫の世辞を聞く

原 お正月増えていくのはゴミばかり (高) 弥 生

添 正月が過ぎて増やしたゴミの山

原 お正月体重計は増すばかり (石) 久 子

添 体重ばかり増えてしまった寝正月

原 趣味持ってたんだん増えてゆく賀状 ひろ子

添 趣味の友増えて賀状も増えてゆく

原 年重ね夢と願いが増えてゆく 志 津 子

添 歳重ね夢も希望も増える幸

【入選句】

増えてきた妻の小言とおせっかい

国民は年末ジャンボ夢増やす

小遣いを増やしてくれよなあ頼む

言い訳をする程増やす脛の傷

見ぬ振りができずに増える悩み事

増やしたくない雑草が天下取る

戦時にはどこも子供が多かった

作句数増やしスランプから抜ける

節約をして増税に身構える

貯蓄より脂肪と年がふえていく

こっそりと育毛剤を吟味する

投信で増やすつもりが塩漬に

食べて寝てメタボ育てる三ヶ日

【佳句】

淋しさを増やす独りの雪の夜

株分けて満開の夢影らませ

住所録赤線ばかり増えていく

年金で増やしてやれぬ遺産分け

いつの間にゴミだけ増やす独り者

医者梯子朝昼晩と薬増え

【今月の推せん句】

蝦蟇口に諭吉を誘ふ蛇の皮

津村律子

蝦蟇口に蛇の皮を入れておくとお金が逃げず貯まると言うことを知っているのは、

高齢の人かも知れない。しかし、冒頭に記

述した川柳の三要素を感じさせる如何にも

川柳らしい作品。

生き甲斐を増やせば財布軽くなり 田付絹枝

座五の「財布軽くなり」が、上五の「生

き甲斐を」を生かしている。この句のよう

に座五の据わった作品は、落ち着きを感じ

させる。

増やすまで待てず徘徊する諭吉 永見心咲

擬人法を用いた川柳らしい作品。諭吉で

ある一万円札が徘徊すると言う表現は、実

に愉快な発想で楽しくなる。

何れにしても、以上の推せん句は、川柳

の楽しさを十分に感じさせる。

川柳塔鑑賞

同人吟 水野黒兎

— 2月号から

時よとまれこの紅葉をそのままに

津田シルク

嵐山の、東福寺の、或いはご近所の里山でも「この紅葉」には圧倒されます。時よとまれとこの至福の時間の中に長く留まっていたいとの気持ちが溢れている。

子を抱けば菩薩のような若いママ

加島由一

少子化と言われて久しく、日本の出生率は平成22年で1・39、四十年後の人口は九千万人程度まで減ると予測されている。そんな時代であればこそ、子を抱いている母親は慈愛に満ちた菩薩のようなと言ひ得て妙ですね。

銀杏舞う浄土の風に誘われて

安芸田泰子

川柳塔社では毎年物故された同人の高野山合祀祭を十一月に実施しています。その頃霊園では銀杏が黄泉路を照らすかに金色に光りながら舞っています。

同病と聞いて親しい友になる

太田昭

同病相憐れむというが、同病と聞いただけでこの苦しみをお互いに理解しあえる味方を得た気分。この句の場合はもつと踏み込んで親友になるというのだから、よほどの病かもしれない、ともあれ早急なるご快癒を祈るばかりです。

古本に書き込みがあり金のこと

葉原道夫

向田邦子の小説か、笠智衆主演の映画の一場面を見るかのような句。老年にさしかかった男が書棚の古い本に、或いはふと覗いてみた古本屋の本に書き込みがあり、金のことがメモしてあるのを見つけ、書き込んだ人の姿を思い浮かべている。そこはかとなく哀愁を漂わせる男の顔のクローズアップ、やがて木枯しの冬景色へと場面転換、そこから主人公の若い日の回顧の物語が展開する……。

魂を丸洗いうる滝の音

升成好

滝のある山間地を訪れるだけで既に心は癒される。そこに轟々と鳴って落下する滝を見れば魂まで丸洗いされる思い。

同じ意味の単語でも古稀と古希、喧騒と喧噪、古里、故郷、ふる里などと作者の表現したい内容が微妙にちがってきます。漢字で書く心とひらがな表記のころとではまた作者の気持も違っていることでしょう。このような作者の微妙な気持にまで踏み込んだ鑑賞ができればいいのですが、とてもそこまでの能力はなく、不十分な鑑賞に終っている箇所もあることと懸念します。その点はどうぞご容赦ください。ともあれみなさまの句を例月以上に熟読させていただきます。

ポケットにいつも初心を持ち歩く

福井葉摘

いくつになってもこうありたいものです。たとえポケットに入るほどの小さなサイズの初心でもいいではありませんか。それが明日への希望に、活力になりましょう。大人になっても少年・少女の瑞々しい感性を持ちたいものです。

酒が酒飲む頃合に席を立つ

大隅 克博

充電に過不足のない酒二合

梶原 弘光

熱燗の三本までが良い薬

岩本 浩二

時節柄酒の機会も多い事でしょう、みなさま、ほどほどを知って楽しい酒のようでおめでたい。

電話してから電話に出ないよう願う

牧野 芳光

これまた映画の一場面を見るかのような一句。微妙なところの動きをこんなに見事に活写できるとは感嘆します。誰にどんな用件で電話したのか、句の読者は十人が十人それぞれの状況を想像することになるでしょう。いやー映画つて、いや川柳つてほんとにいいもんですね。

近いうちジャンボ宝くじ当てる

土橋 はるお

当てたいではなくて当てると言いきった意気やよし。しかし宝くじとは多空くじと揶揄されたり、運の無い多数の人が運を握る少数の人を支えることになる。かく言う私も少数派を支える多数の一人。

たましいが透明になる冬の旅

山岡 富美子

月寒江清という四字熟語がある。月の光が冷たく冴え、川はしんと清いといった冬の川の清冽な光景である。そんな雰囲気清々しい一句。冬の寒さは厳しいが、魂を透明にさせる凜とした玲瓏さが気持ちいいと作者は感じている。寒い冬には暖かい地方へ旅するのもいいが、寒い折には一層寒い地を訪れて経験の無い寒さを感じるのも旅の醍醐味であろう。そんな人生の例えの句でもあろうか。

一枚の切符残したまま師走

木本 朱夏

一枚の切符とは何か、読者の想像力次第で何にでも変化できる。大切な人への書き残した手紙かも知れぬ、やり残した仕事かも知れぬ。あれもやった、これも完了した、やれやれである。しかし何か残っている、今年中に片付けてしまいたい、とは言うものの、作者はそれを悠然と受け入れているとも感じられる。

食事を三度しただけで今日過ぎる

寺川 弘一

参った、私がモデルの句だと錯覚。

不粋だというまい腹巻に頼る

栗田 久子

この寒さ「御身大切に」です。私も冷える二階で厚手のステテコで武装しなおかつ、ちゃんちゃんこを羽織り、節電に協力しながらパソコンに向っております。

地吹雪へこころが瘦せる過疎の森

松山 芳生

日本の多くの地で過疎が言われ、限界集落が言われる。高齢者ばかりの農村、見棄てられる田畑。誰も面倒見なくなつて放置される森林、後継ぎに困る島の漁村など多くの問題がある。一方で職がいまま都会に溢れる人々がいる。こんな状況をこころが瘦せると作者はお詠みになった。まさに地吹雪である。

五分以内平常心の待ち時間

榎本 宏子

五分ですか、厳しいなあ。でもきつとその後、多少平常心から外れたとしても忍耐強くお待ちになったことでしよう。それにしても平常心の待ち時間とは素晴らしい表現ですね。私は自分の影を日時計としながら結構長く待ったことがあります。

水煙抄鑑賞

—2月号から

渡辺 富子

二か月間ころがカゼをひいてます

肥後 和香子

こころのカゼは、注射や薬ではすぐには治らない。しんどいですね。でももうすぐ春です。ものみな芽吹き、春風が優しく癒してくれると信じます。

だいじょうぶ泣いて笑って春になる

増田 純子

泣いても笑ってもきつと春は来ます。明けな夜はないと言う。どんな厳寒でも、春は必ずやってくる。「だいじょうぶ」に心の温もりを感じます。

被災地に未だ置き去り放射能

大和 峯二

東北大地震から二年になろうとしている。置き去りにされた放射能の不安で、人々はふる里にも戻れない。手抜き除染も報告され、怒りさえ覚えます。

距離おいて見詰めるだけの片想い

阿野 寿美子

いいですね。遠い昔の初恋を思い出します。遠くから眺めるだけで、胸がときめきました。遠くから見詰めるあなたの熱い視線は、きつと届いてるはずですよ。

もう時効ゆつくり嘘を咀嚼する

東横 ますみ

嘘にも時効がありますか。ありそうですね。あの時の嘘は、愛を得るための必死のものであったのかも知れません。今ではにっこり許せそうですね。

森を出てあなたの大きさを想う

相見 柳歩

あなたという緑したたる森で、過ごした月日。今その森を出て見ると、あなたのとてつもない大きな愛に気づく。森の記憶は、一生褪せることはないでしょう。

強情を捨てたらわたし居なくなる

荒巻 夢

強情は自己存在証明のひとつ。強情があるから生きてこられた。これからも強情を貫いて生きて欲しい。でも頑固すぎ誰も寄り付かなくなるのは悲しい。わたし居なくなるはもっと困ります。

一呼吸おけばやさしい味になる

岡崎 美知江

何事もスピードを求める。人の気持ちもカッと燃え、すぐ冷める。ここで一呼吸おくのはいいですね。難しいでしょうがきつと、やさしい味になるでしょう。

知らん振りされる親切身に染みる

上山 堅坊

人との関係が希薄になり、無縁社会と言われている。その中で敢えて知らん振りされる親切もあるのだ。この知らん振りは温いまなざしを受けながらです。

おしゃべりと言う常備薬手放さず

神野 千恵子

おしゃべりは女の何にも優る薬です。いらいらしたり落ち込んでいても、友とお茶をしながら、わいわいやれば不思議に消えていく。常備薬が気に入りました。

ぼつぼついいものですよマイウェイ

稲葉 洋

高度成長を支えてきた企業戦士。一線から退いてみると、あの熱気はなんだったのだろうと思う。これからは、身の丈に応じたぼつぼつの歩みで生きたい。マイウェイに限りない希望を感じます。



他者と比べない

スポーツの基本は「より速く」「より高く」「より強く」を目ざし、自らの体力と技量を鍛えることです。そもそもの出発点において、それは他者との比較ではなく、「自分自身との闘い」であり、ストイックな達成感を重視していました。その精神性の一端が、「オリンピックは勝つことではなく、参加することに意義がある」という言葉に表われています。

ところが皮肉なことに、その崇高なお題目を掲げた近代オリンピックによってナショナルリズムが刺激され、「勝つことが国家の名譽」となり、出場選手の使命にもなってきました。日頃は日の丸に関心のない人でも、オリンピックになると競技会場に掲げられる国旗に感動させられます。

このように、本来は自己との闘いであつたものが、いつの間にか他者との競争になつてしまつたのは、にんげんが生まれつき持っている「闘争本能」の成せるところでしょう。他者と比べ合うことによつて刺激を受け、より一層ファイトが湧いてくるのは誰しも経験していることです。

では、わたしたちが取り組んでいる文芸はどうでしょうか？ 言うまでもなく、文芸は他者と競争するものではありません。あくまでも個人の想いを表現するものです。

しかしながら、川柳大会では、他の作品と比較され、優れていると判断されたものは「天・地・人」とか「秀作」などのように位付けされ、スポーツの祭典と同じように表彰されます。このような様式は、川柳の出発点である「前

句付け」の遣り方を受け継いでいることはご承知の通りです。残念なことですが、「座の文芸」とも呼ばれている川柳は、誕生のときから「比べ合う」という形を背負ってきたのです。

文芸の本質からかけ離れたこのような形式を改革するのは川柳界に課せられた宿題ですが、連綿と続いている伝統を一朝一夕に変えることは至難です。であれば、今のところは妥協しながら、少しずつ改革の道を探って行くほかはありません。肝心なのは、皆さんお一人ずつの意識の問題です。

・文芸は他者との競争ではない

・句会や大会の競合形式には影響されない

右の二つをしつかり胸に刻み込むことです。この二つを理解し忘れないようにすれば、他者と比べて一喜一憂することはありません。拔けんがために「選者に迎合したあざとい句」を作ることもしません。誰のものでもない「自分の想い」を込めた句、勝ち負けとか抜ける抜けないというレベルを超えた、個性的な句を発表すればいいのです。それが文芸の基本であり、わたしたちが目指す最終目標です。

ただ、大勢の仲間の中には成績にこだわら過ぎる人も稀にいて、「句会や大会は勝負の場」という人もいます。闘争心が人一倍旺盛なのでしょう。ファイトがあつていいのです。が、そのような人の言動に巻き込まれてはいけません。

スポーツの崇高な精神性が、いつのまにか闘争本能に蹂躪されて「競技」となつてしまつたように、我々が川柳が「他者との競争」という低レベルな言葉遊びに陥らぬようにしなければなりません。常に文芸の本質（個人の想いの表明）を見失わぬよう、意識し続けたいものです。



高瀬霜石の津軽おもしろ景色

奇数月の連載になります。

東光見聞録 ⑭

— 謙信の巻 —

前回、山形県米沢市にある「東光の酒蔵」を訪問し、オチヨコを貰い、あとで半纏をも頂戴したことを書いた。

その続きの前に、米沢のことにちよつと触れたい。

米沢といえば「上杉」である。上杉家の歴史は古い。ここぞざあーつと上杉家のおさらいをしてみよう。

初代はご存知、越後の上杉謙信。2代目の景勝は秀吉に臣従し、会津に移り120万石の大大名になり、五大老にも就任するが、関ヶ原で西軍に加わったため、会津から米沢に移され、30万石に。その後、世継ぎ問題のトランプで半分の15万石になってしまいが、リストラをしないため藩の財政は逼迫。そこに、あの鷹山ようざんが登場するのである。

つまり米沢は、歴史上とっても有名な2人のヒーローを有しているわけだ。これは誠に羨ましい限り。

話は「東光」に戻る。

なにせ創業400年を越す清酒東光醸造元・榎小嶋総本店だから、代々の当主は米沢の名士である。

今の社長のお父上（つまり先代）が若かりし頃、ライバルの甲府の「信玄まつり」に乗り込んで、その大掛かりな「武田軍団行列」と、武田二十四将の絵幟を見て驚いた。そして発奮した。彼は「上杉雪灯籠まつり」などを企画・実行したアイディアマン。ピ・ピ・ピツときた

のだった。

話はまた飛ぶ。

濁点のあるなしで全く違った意味になってしまうこんな「言葉遊び」をご存知だろうか。例えば、

◇世の中は澄むと濁るで大違い

↓ハゲ（刷毛）に毛があり、ハゲ（禿）に毛がなし

↓人がチャ（茶）を飲み、チャ（蛇）が人を飲む

↓フク（福）はトク（徳）なり、フグはドク（毒）なり

武田信玄が上杉謙信に、こんな歌を送ったという。

「杉枯れて 竹類いなき あしたかな」

謙信は、濁点を少しだけ変えて返信した。

「杉枯れで 竹だ（武田）くび（首）なき あしたかな」

ライバル対決となれば、なにはさておき、武田 VS 上杉。武田には絶対に負けたくない米沢（上杉）の名士である。

「武田が二十四将なら、おらほは二十八将にすんべなす」と叫び、すぐに行動をおこした。

史実にはない二十八将である。悪く言えば捏造。こじつけ。その無理難題（？）を、地元の歴史家（大学教授）にお願いしたところ、彼も燃えたのだった。

謙信が川中島の合戦で功あつた家臣に与えた感状をもとに、間もなく二十八将の顔を揃えたそうだ。

その後「上杉二十八将」は、川中島模擬合戦などですっかり地元に着し、今に至っているという。

その先代が亡くなり、親戚（？）だから香典を送った。折り返し、「特製・東光」と、先代の足跡が綴られた小冊子が送られて来た。その中にあったエピソードから。

あま まんてき 阿萬 萬的さんのこと

豊中もくせい川柳会 江 見 見 清

萬的さんがお亡くなりになった。平成二十四年十一月十七日、享年九十五。萬的さんは、大鉄局に入られたお若い時から川柳を職場で始めたとお聞きしています。当句会には昭和六十一年八月以来、一昨年の五月の投句まで二十四年間のご出席でした。

句会での休憩時間には昔の柳人の思い出話、各地の句碑のお話、川柳を始めたばかりの時のお話をして頂きました。

多くの方がご存知の、千代紙を使った箱モノや自分の句を墨書した団扇を作られ、それを優秀句の賞品として何度も頂きました。あるいは川柳塔誌に毎月掲載される同人の句を個人別に、一年間まとめて可愛い表紙のミニ句集にして配られるなど、器用なこまめなお世話好きな萬的さんでした。

お休みになる一年ほど前からは、選者をお願いしても「私の句はもう古い句ばかりしか作れないので遠慮する」といわれて選者を辞退されました。

萬的さんののもくせい川柳会での入選句をいくつかご紹介してご冥福をお祈りいたします。

合 掌

古い町成程お地藏さんがいる 昭和六十一年八月 最初の入選句

水平線曙若い声がする 昭和六十二年一月

パイアグラほんまに効くのかなあ僕に 平成 十一年一月

世話焼きの女忘れるのも早い 平成 十九年一月

何の日知らんが祝日また増えた 平成二十三年五月 最終投句

髭そっていつもの朝の顔になる 同 右

盲人川柳愛好家集合！

盲人がつくる 盲人の為のテープ川柳誌「水仙」が毎月発行されている。間もなく三百六十号（三十年）を迎えます。

こんなテープ川柳誌をご存知ですか？ 毎月上旬に発行、郵送され、読後は投句作品や選句を録音して、最寄りのポストへ投函すればOK。切手は不要。

現在会員は宮城県から鹿児島県まで、約八十名。参加資格は全盲・弱視を問わず視覚障害者であること。所属柳社や柳歴は問いません。

投句や問い合わせは、点字、電話、テープでご連絡を願います。入会金として二千元の郵便小為替が必要。以後は終身無料です。

各地の川柳愛好の視覚障害者を

ご紹介下さい。

川 端 六 点

〒583-0004 藤井寺市藤井寺三十一-三三
電 話 072 (955) 9056

本社二月句会

二月七日(木) 午後一時
アウイーナ大 阪

二月句会は123名(投句9名)の参加で開催。初出席は、藤井宏造(尼崎市)山口ヨシエ(三木市)のお二人。句会に先立ち過日亡くなられた中宇地秀四さん(鳥取市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は、西出楓楽理事長の「川柳塔主幹六代」と題し、歴代主幹の思い出話と代表句などを紹介された。

麻生 路郎(在任 大正十三年〜昭和四十年) おれに似よおれに似るなと子を思い

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

中島生々庵(在任 昭和四十年〜昭和五十七年) へんくつはへんくつとして丸められ

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち
西尾 栗(昭和五十七年〜平成六年)

一歩出すれば吾れ旅人となる心
意見する儂がまだまだ遊びたし

橋高 薫風(在任 平成六年〜平成十二年)

労働歌謡が歌えば濃かろう
八十になつたら恋をしてみよう

河内 天笑(平成十二年〜平成二十二年)

ゆつくりとしとくなはれと放つとかれ
この森は初めてなのにな懐かしい

小島 蘭幸(在任 平成二十二年)

春ふわり長女の靴と次女の靴
大太鼓もハーブも持っている海だ

(まつお)

月間賞は、居谷真理子さん(和歌山市)

(司会)蕉子・善純(協取)千代・美花

(受付)武彦・葉々子(清記)勝弘

席題「洗う」 渡辺 富子選

岸洗う今は何もないうちに
にんげんの骨格見えるまで洗う

ナーバスな私を洗う春の音
洗うたら消える淋しいではないか

洗うには惜しい貴方の手のぬくみ
写経して心の髪を丸洗い

除染でも手抜きがされるジャパニーズ
あの人の匂い洗っても洗っても

嫌なことばかりにふれる手を洗う
洗いざらい話してからの無二の友

早春の水で洗っている野菜
土砂降りがすすき洗う今日のうつつ

洗っても背信の罪纏い付く
時々邪心洗いにする写経

何も彼も洗い尽くしてヨードン
真実は一度洗ってたしかめる

幸せは終身刑の米洗う

皿洗う明日を盛り付けするために
胸に付くあくや欲など洗いたい

手を洗う心の穢れ落すかに
洗いすぎて私の色が無くなった

傷口を洗ってくれたグレコの絵
日本を洗い流した竜馬の志

土砂降りの雨に失敗笑われる
思い切り失意ふつ切る顔洗う

潮風に洗ってもらう小さい罪
僕のとこ洗ってみても灰汁が出る

昭和史に洗い流せぬことばかり
洗うたびだんだん僕が消えている

洗っても消えぬ野生の血の匂い
染み付いた油が落ちぬ手が誇り

体罰といじめつぎつぎ洗い出す
自問自答ふやける程に洗った手

柔道界どんな洗剤使うのか
朝ミサに心を洗う声を聴く

石けんの泡と流そう今日のうつつ
洗ったら神通力が消えました

佳

万一に二三個の顔洗つとく
雪解け水で洗う心のうす汚れ

美しく洗ってお手許に還る
目を洗うたんに嫌なものが見え

洗っても落ちない過去がひとつある

あかね

順啓

すみ子

黒兎

美智代

和夫

紀子

信子

楓楽

真理子

完次

保州

ダン吉

郁夫

淳司

隆彦

五月

敏治

好義

万紗子

理恵
扶美代
多恵子
寿之

人

わたくしの匂が消えるまで洗う

蘭 幸

地

捨て科白洗直してから使う

義

天

それからの闇を洗うてきた絆

ア キ

軸

哀しみを洗ってくれる岩清水

兼題 「蓋」 樹本 宏子選

春の使者選抜野球火蓋切る

キヨミ

おしゃべりの口に蓋する諭吉さん

雅 明

落し蓋そこに秘密がある煮豆

ばつは

カップメン僕は四分待つて食べ

勝 弘

告発という手で蓋をこじ開ける

かずお

オゾン層破れ無蓋となる地球

敏 治

おばちゃんの口に合わせる蓋が無い

誠 一

蓋あけるまでが楽しい下準備

光 久

蓋とればおこわの香りは二十歳

みつ子

ブライバシの蓋こじ開ける週刊誌

玄 也

落し蓋とろろ煮込む甘い嘘

万紗子

びんの蓋あかずには賞味期限すぎ

野 薫

哀しみも愚痴も蓋して春を呼ぶ

ヨシエ

お椀の蓋開け閉めにみるお人柄

則 彦

蓋がずれ女房の愚痴が煮こぼれる

昭 好

余命には蓋今日からはニューライフ

靖 博

幸せと背中合わせの傷に蓋

口に蓋出来ず歴史が物語る

耐えられぬ柩に蓋をする訣れ

弁当箱の蓋を湯呑みにした昭和

顔色を伺いながら蓋をする

その辺でやめておこうと父が蓋

亡妻の梅酒の蓋に年月日

参院選済むまで改憲蓋をする

握力の若さがほしいビンの蓋

アベノミクス不況に蓋ができますか

耳に栓口に蓋して町内会

無言の帰国真相は蓋されたまま

丸く世を渡る本音に蓋をして

疑いの晴れた心の蓋のあく

煮え切らぬ男にそつと落し蓋

和解して心の蓋を開け楽し

綴じ蓋の妻に捧げる栄誉賞

落し蓋難いで老舗の味守る

蓋開けてみんと判らぬ事だらけ

めでたいな広蓋使い食事する

こも樽の鏡割りして祝婚歌

納棺師涼しい顔で蓋をする

お喋りの蓋が閉まらぬクラス会

蓋をしているのに飛び出した噂

アベノミクス日銀の蓋開けさせた

人

哀しみに蓋をしているのは男

葉 子

すみ子

保 州

宏 造

千 代

一 歩

朋 月

セツ子

能 子

富 子

忠 昭

ルイ子

楓 楽

朝 子

柳 弘

紀 子

由 一

武 彦

月 子

加 里

公 誠

野 薫

寿 之

かずお

靖 博

ア キ

オモチャ箱夜中に蓋が開くマーチ

パツと蓋取れば茶柱立っている

可能性の芽をつむママの落し蓋

風のざわめきようやく春へ動き出す

啓蟄に地面も風も動き出す

怒つたり誉めたりやつとサクラサク

ようやくと最後のバトン渡せそう

七年目ようやく咲いた赤い薔薇

体罰の闇にようやく声あがる

リハビリの一步ようやく見える明日

波瀾万丈ようやく風海になる

大事にしよやくと見つけた夫です

母看取りようやくとけた蟬り

小走りの人生ようやく歩をゆるめ

八十になつて老母のころ知る

亡き後に業績たたえ栄誉賞

柔らでもようやく割った炎の女

ブライドを捨てた軍手を白く干す

ポロポロとかサブタ剥がれ春はそこ

ようやくの男に虹が立っている

少しくすんだ赤がようやく好きになる

冬の朝ようやく落ちた木守柿

シマ子

賢 子

希久子

蕉 子

セツ子

千里

靖 博

まつお

セツ子

あかね

俣 子

万紗子

希久子

千 代

隆 彦

奮 水

誠 一

万紗子

義 楽

楓 楽

千 代

塩漬けの株もようやく遅い春
追伸でようやく書いた妥協案

古稀過ぎてようやくローン払い終え
アラフォーがやっと見つけた玉の輿

恥重ねようやくとどき着いた古稀
早春賦ようやく冬の去るさざし

やっと掴む愛と言う名のまぼろしを
ようやくに勝ちが見えたと落し穴

ようやくローン終わったとたん逝きました
ようやくの決心よろめきも覚悟

散る時にやっとため息つける薔薇
同じ苦を背負いようやく春が来た

苦しかったやつと断ち切る愛と憎
瘡蓋が剥がれようやく元の肌

身悶えてもだえて脱皮した巳年
ようやくと空気になれた夫婦です

佳
片道の切符ようやく春の音
推敲のいくばくかろうじて咲かす

いのち残照やつと本音を曝け出す
ようやく咲いた一つだけのシナリオ
纏れてた愛にもやつと針の穴

直樹
実
玄也
かずお
理恵
美智代
一歩
舞夢
見清
真理子
日の出
美智代
克己
朝子
千里

軸
辛うじて最終章へ辿り着く
兼題「紡ぐ」

川端
一步選

言の葉を紡ぎ指折る至福時
折折を糸と紡いで来た命

家族愛織りなししているサザエさん
美しい日本を歳時記が紡ぐ

一期一会魂つむぐ縁知る
苦勞して親子の愛を紡ぐ母

河内野にひっそり残る糸繰り機
天空へ紡ぐ命へ感謝する

思い出を紡ぎ幼い日に還る
三代が心を紡ぎえんやこりや

荒波にもまれて生きる糸紡ぐ
生業を紡ぐ無骨な手の誇り

失敗を乗り越え紡ぎ出す再起
五感から心の詩を紡ぐ趣味

反戦の意志を紡いだ鶴彬
悔しさを紡ぎ真つ赤な反旗織る

紡績に悲しい女工哀史あり
面白い話紡いで笑わせる
ビバークの命を紡ぐチヨコレート
苦楽の日来し方紡ぐ金婚譜
これからは何を紡いでいく日本
ボランティア紡いで見えた人の情
でこばこの愛を紡いで梅匂う
復興の願いを紡ぐ募金箱

キヨミ
賢子
保州
富美子
敏治
善純
扶美代
篤子
かずお
光久
寿子
富美子
ふりこ
哲男
淳司
奏子
玄也
いくひろ
六子
千代
寿之
耕治

赤い糸の横を紡いでいたらしい
ドナーカード明日へ命の灯を紡ぐ
糸紡ぐ乙女も越えた野麦坂
心よい嘘とまことを紡ぎ合う

被災者の心を紡ぐボランティア
暖かく紡いだのだろいい笑顔
思い出の糸を紡いで静かな日

言の葉で紡ぐいのちの一行詩
人生の山河を紡ぐ旅に出る

野や山を紡ぎ織り成す四季の風
夢紡ぐ母ゆつたりと掘炬燵

老春をほっこり紡ぐ酒二合
身を置いたとこで幸せ紡いでる

佳
清濁をあわせ紡いでいく絆
ひらがなをきれいに紡ぎ芥川

紡ぎたいページは太いペンで書く
山里に消えてしまった紡ぎ唄

九条を紡ぐ心を束にして
平和を紡ぐはだしのゲンを読んでみる

菜の花の黄色が春を紡ぎだす
今日という糸を明日へ織り紡ぐ
「この子残して」吐いたことばで子を紡ぐ

まつお
無限
いさお
哲子
唯教
宏子
良子
朱夏
よしみ
久美子
哲子
富子
葉子

兼題「ばちばち」

水野

黒免選

化粧水ばちばち叩く歳の数
まばたきで今日の約束とり交わす
天神さま僕の拍手 手が真つ赤
ばちばちと過去に訣別するのとど
浮き沈みとことん知った背に拍手
パチパチとアラブの春はきな臭い
ばちばちの拍手は義理とすぐ分かる
ばちばちと瞬きする間世が移り
すれ違ふ晴れ着女の火花散る
以心伝心ウインクだけで愛がある
ばちばちと目玉が嘘をついている
このへんでどない船場の五つ珠
ばちばちと妻の小言の静電気
ばちばちと火のつきそうな言葉尻
思いつきり拍手している少数派
つけまつげパチパチ春のニューフェイス
ばちばちと闘志を燃やす土俵上
ばちばちと火花闘志が爆ぜている
ばちばちの火の粉かぶりにゆく縁起
薪燃やし旅人む困炉裏端
ばちばちと燃える火種がケータイに
付き合いと義理がマイクへアンコール
大拍手うけて達磨に目が入り
乾燥の肌も心も静電気
スピーチの脱線だけに湧く拍手

淑子 賢子 ばっは 萌子 葉子 淳子 則彦 たもつ 希久子 柳弘 朋月 六子 定昭 瑠美子 求芽 朱夏 寿之 克己 朝子 隆彦 定昭 六子 千代 朝子 好子

パチパチパチ五役もこなす村芝居
ばちばちと炭火熾れば郷のこと
ばちばちと貴方の拍手だけを聞く
ばちばちと手の鳴る方へ行くが吉
神の火のばちばち散華春を呼ぶ
豆を炒ると春の弾ける音がした
爆ぜる音聞かせて戦語る老父
静電気パチパチわたしの心かも
燃え上がる過去がばちばち未練抱く
学芸会拍手もまばらです過疎地
囲炉裏の火弾けて旅はいま佳境
ばちばちと思ひ絆を切る鉄

佳

聖書手に銃放つ音響かせて
埋み火がばちばち弾けわらべ唄
ばちばちと弾ける青い好奇心
火花散らした友が夕陽に消えました
ばちばちと燃え尽きましよう吾亦紅
人
すこし爆ぜるためにしじまに置く背骨
地
拍手喝采そしてピエロの無表情
天
拍手受けそれから思い荷を背負う
軸
静電気はじけて留守の夜しじま

万紗子 敏治 昭 森子 よしみ アキ 哲男 紀乃 善純 富美子 美智代 武彦 よしみ ヨシエ 扶美代 森子 あきこ 柳弘 楓楽

兼題「親」

小島

蘭幸選

弓取りの母最後まで見てるだろ
親独り住んでる郷が遠すぎる
雪子報子の住む町を思いつつ
親父ギヤグ連発寂しがらだろ
介護しても返し切れない親不孝
母に似てよかった丸い笑顔です
恩のあるやさしい親が四人いる
親バカがすっかり板につきました
かあさんより先に逝つてはならんよ
親として何点くれるかな我が子
あたたかい茶の間父母座つてた
母親の部屋はいつでも開いてる
無学だが僕の自慢の親である
息子言う親父みたになりません
親の背なたとえ反面教師でも
ずい分と親を泣かせて来たつばめ
百歳の母を背負えばわが命
子も親にわがアルバムに似た写真
おふくろは漬物買ったことがない
代々の親バカ子バカ梅匂う
魂のキャッチボールをする親子
まだ奮飯免のまま親になる
男親は女親より少し損
ちちははの声遥かなり遥かなり

耕治 千里 朱夏 楓楽 則彦 美智代 宏造 幸泉 ひとみ 善純 みつ子 雅明 一步 善純 雅明 千里 森子 隆彦 時雄 求芽 セツ子 寿之 まつお いさお

もう一度母に会いたいしじみ汁

義

子らを守ったつぎはぎ翼誇らしい

理恵

酒覚えてからは父の味方する

時雄

イケメンは母短足は父ゆずり

まつお

親という覚悟で立つた崖がある

あきこ

子が売れて親もときどき役がつく

修

親よりもっと大事な人が出来て春

扶美代

親の年までゆつくりと生きようか

月子

母親がやはり回転させている

信子

大よりも頑固な父が吠えている

寿子

父と娘のシーソーゲーム終わらない

幸泉

ほろほろと母ほろほろと砂時計

義

咳ばらいまで父に似る耳の底

天笑

佳

子が出来て僕の唯一の親孝行

万紗子

水仙の香りの中に亡母の顔

美花

嫁がせた部屋の真ん中立つてみる

扶美代

温もりの記憶に亡母の卵酒

よしみ

叱られてばかりや実の親やろか

六点

人

両親が十年日記買っている

宏子

地

亡母の貌から風景が濡れてくる

あきこ

天

横綱を産んだ貧しい母だった

居谷真理子

軸

父ひとり今でも坂の上に住む

句会 燦 燦

1 月句会を読む 芳 賀 博 子

細胞の数ほど傷の跡がある

富美子

きくところによれば人間の細胞の数は約六十兆個。なんとまたたくさんの傷の跡、というよりそれほどの傷を受けてなお、立ち上がり、笑っていかうとするニンゲンの再生力に驚く。

こんなにもお日様あふれなげ値上げ

武彦

ほんとなぜでしょう、となにが値上げとは書かれていないけれど頷いてしまふ。こんなにもお日様が溢れているのに、いつまで続く景気の底冷え。

あふれつつある老人の一人なり

完司

句の後に一瞬の間(ま)がある。「で？」と自問しているような、問いかけてくるような間の妙。

ラジオネームはみかんふる里捨てきれず

和子

ラジオは本音のメディアといわれる。であればこのラジオネームもついこぼれ出た本音の一つかも。みかんの特産で知られる故郷を捨てるように後にして、もうどれほどの歳月が経ったのだらう。「捨てきれず」に滲む「忘れたくない」思い。口ずさめばふっとみかんの香りがする。

中心を少しずらすと叶う夢

美智代

なるほど。ど真ん中を狙い定めるより、少しずらした方が夢は叶う。きつと経験を豊富に積まれたがゆえの説得力。

太陽が寿退社した職場

雅明

結婚しても仕事を続ける女性が増えた。とはいえ寿退社には理屈抜きのおめでたさが漂う。ユーモアたっぷりの祝福の一句。さて今月より本欄を担当させていただきます。厳選された全二七六句にパワーを得つつ、どうぞよろしくお願い致します。

あつ！腰痛が消えた

澤井敏治

二十年前の五十五歳の時から腰痛に取
りつかれた。日常生活に困るほどではな
いが、麻雀・ゴルフ・テニス・マラソン
からは絶交状を突きつけられた。やむな
く、水中ウォーキングに転向した。しかし、
ウォーキングゾーンは混んでおり、空い
ているスイミングに移った。長距離を泳
げるようになっただけではもの足らず、
バタフライまで習い始めた。ここにも腰
痛が待ち構えていた。再び医者通いが始
まった。一進一退、遂に五年前には椎間
板狭窄症でコルセットの常用者となった。
年間一六〇回のリハビリ。一割負担の歳
ではあるが、時間のロスには我慢が出来
なかつた。

スポーツクラブで「ヨーガ」のレッス
ンを再び受けることにした。「ヨガ」をサ
ンスクリット語では「ヨーガ」と発音す
るそうである。以前にもやったが、一セッ

ト五分程度の簡単な動作の繰り返しであ
り、六十歳代には長続きしなかつた。そ
の頃の腰椎は何らかの原因があつた。日
にち薬が効いていつの間にか治つていた。
しかし、七十路になると、「特別に悪いと
ころはなく老化(大隅克博氏吟)」の通り、
思い当たることがない。朝起きると痛い
のである。医者曰く「原因がない? そら、
加齢ですな。気長に通つてください」と。

ヨーガでも「簡単な動作を毎日続ける
こと」を義務付けられた。要は、インナー
マッスルの強化である。ストレッチ体操
とさして変わるところはないが、そのや
り方が全く違う。(以下『ヨーガ禅話』『雑
誌道友』からの抜粋、著者の佐保田氏は、
ヨーガは心身一如の原理に立っていると
言う。この「如」とは「したがう」とい
う意味であり、「一如」とは「したがつて
一つになる」と読ませる。体と心は元来
一つであるべきものである。しかしそれ
が分かれるときに病氣や不幸が生まれる
と言う。(中略) 体をアクロバットのよ
うに奇妙な形に変形させたり、荒行をす
るのは、ヨーガの外道である。そのため
には以下の四原則が重要であると、佐保
田氏は説いておられる。

1 動作がゆるやかでしずかであること

【ゆつくり時間をかけてやるほど良い。ス
ポーツ体操との差異はここにある。】
2 呼吸と動作とが相伴っていること【呼
吸と関連させて行う。】

3 心と動作とが結びついていること【自
分が動いているその動きへ自分の全精神
を込めること。うわの空でやってはいけ
ないし、音楽をかけながらは邪道と言え
る。耳を傾けるべきは、自分の内側であ
るからだ。】

4 緊張よりも弛緩(リラックス)の方
を大事にすること【自律神経の緊張と弛
緩が双方同じ強さになって、調和してゆ
くと健康になれる。弛緩すること、リラッ
クスをなおざりにしてはならない。】

半年も経たないうちに、整形外科への
リハビリ通いを忘れるようになった。「鰯
の頭も信心から」という言葉があるが、
この程度の動作でよくなると信じて続け
られるかどうか、ただそれだけである。
取り敢えず、参考図書としてスポーツマ
ガジン社の『ヨーガ入門』(佐保田鶴治著)
を紹介しておく。ストレッチ体操でも良
い。やり方さえ「伸ばす」のではなく、「伸
びるまで待つこと」を基本にして、「継
続は力毎日酒を飲む」ように、三六五日
欠かさず続ければ叶うと信じる。

老心新境

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

ローズ川柳会(兵庫)(前月分)木村貴代子報

酔うほどに妻がきれいに見えてくる
こころ辺りは紅葉の出湯霧走る
襖引く仏間に冬陽招き度く
居ながらに温泉めぐりにしています
登頂果す脚に褒美の湯治宿
日本に四季あり四季の露天風呂

靖鬼報

柳柳あまがさき(兵庫)(前月分)加川

体調の良い日は薬飲み忘れ
近頃は喜怒哀楽を置き土産
子熊見て逃げの速力自己ベスト
宝物は頭に詰まった思い出さ
毎日が夜勤のような地下勤務
離党結党新党に沸く選挙戦
この世にも未練あるから薬のむ
隣から落葉の事でまた苦情
ゴルフ帰り畳の部屋に呼ぶ指圧

りこ 泰子 健二 佐紀子 美也子 野薫 雪菜 あかり よしひさ

みちづれにならぬつもりが半世紀
貧しさのうちの宝は笑い皺
金婚式ガマンと笑みの記念の日
突っ張って反抗しても子は宝
傍らにぶつきたらばうな甘えん坊
この世にもあの世と同じ地獄ある
某月某日白いベージュにある涙
街中が市民マラソン皆笑顔
子が育ち解いた肩に夫が乗り
走ります今なら乗れる終電車
宝くじ並ぶ普通に生きた顔
動かない上司やれやれ言うばかり
あの時のことはわただけの宝
意のままに動く五体が宝物
宝物みたいな磨く象牙牌
人夫に師走の風を読んでいる
ばあちゃん僕らの宝と孫がいう
この世から天国席を予約する
娘が嫁ぎ暮然と夜の二人酒
今が旬この世の幕はまだ遠い
肩の荷を下ろすときと歳をとる
失って気付く若さという宝
遅刻する電車の中で走っても
あなただけ貫つたガラスでも宝
へソの緒が宝のようにある箒

和歌山三幸川柳会

武本

引き返すことは出来ない霊柩車
干上がらぬ様にボジョレー補給する

寛十郎 美代子 洋子 龍 菜々子 幸香 シマリ 勝巳 哲夫 奮水 和子 かずお 見清 ヨシエ 正和 比呂志 楓花 柳明 祐康 キヨミ 哲男 初音 五月 朋月 美籠 碧報

エンディングプラン発酵させている
も一人の自分途中で後ずさり
花野への途中ふたりの日向ほこ
無駄足になっても拾うものがある
途中から割り込んできたのはあなた
ドミノにも途中に一つ頑固者
今わたし何をお話してたっけ
審判の旗は途中で裏返る
二度とない命途中で諦めぬ
後期高齢途中下車などして居れぬ
途中から気付き背伸びを止める
途中からそつと外してみた手綱
秒針と届く臓器を待っている
そわそわと出掛けてしゅんとして帰る
座つても立つても居れぬ嫁が来る
そわそわを嘲笑つてるコンバクト
動揺を隠し通せぬ胸の内
ロマンズを知ってそわそわする仕種
猫までもそわそわして居る婿入り日
そわそわと充電すませ待つメール
またタッチアウトになった夢を見る
人よりも多く転んで夢を追う
この僕を夢中にさせるものがある
くじけずにプラス思考で掴む夢
夢はまだ捨てずにおこう再検査
マニアルをとび出してから弾む夢
朽ちるまで夢を抱いて生きている
老いてなお後退りする夢を追う
東の間の命を咲かす四季の花

眞智子 昭枝 富子 美羽 美子 町子 登美代 イセ 起世子 純子 智三 義泰 昇 ひろ子 高夫 美枝子 孝子 かずみ 保州 宏夫 准一 当代 義雄 菜摘 絹子 元三 幹子

まだちよつと言ひ分残つてゐる類つべ
ちよつびりの氣付葉が効いてくる 八重子
ちよつと来い緊張したが褒められた 次根
ちよつとちよつとと師走の鬼が肩叩く 侃大
和子

岬川柳会(大阪) 八十田洞庵報

好奇心満ちる人生旅づく 和香
旅の人無事を祈りつ別電車 桜琴
集まつて元氣を貰う老い仲間 年子
チャンチャンこ着てフロアでティタイム 洋子
夏はての疲れはどつと秋に出る 圭子
木枯しにせかれせかれて冬支度 清一
へそくりを隠した筈が先読まれ 寛
温もりがもつと欲しいの一人鍋 富美子
口だけは一つで良かった三児の母 智子
欠席で借りた仮病に取り付かれ 治
すすきの穂飛んで淋しい秋の風 恵美子
吉野山秘仏の顔が猪に見え 覚庵
丹精しやつと出た芽は虫の糧 澄恵
夢抱きりハビリ励む車椅子 伸子
結論は玉虫色で分ち合い 貞夫
分けてくれた慈愛を思ふ月参り 和美
事分けて話して解かす早合点 洞庵
木と紙と畳に住んで老い静か 茂平

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

古日記あの頃母は若かった 栄恵
空白の日記が続くその理由 汎美
十年日記八十路の僕に喝をいれ 笹舟

見なければ良かった亡父の日記帳
六十歳から川柳日記書くつもり 千代美
大笑いした日の日記字も笑い 力
悔いひとつふたつと星は光るのです 蘭幸
悔いいくつ残して聞くと星は光るのです 房子
悔い一つ褒められたらずで嘘をつく 弘子
除夜の鐘悔いを一つずつ消そう 笑子
一言が多くて悔いる今日も暮れ 規代
自画像にご挨拶して筆を置く 半徳
恋終わる少女大人の強さ抱く 幸子
今年も終わる箸二膳の豊かさよ 慶子
終り無き青春を追うまだ卒寿 淑子
「もう終りましたか」耳の栓を抜く 年子
涙した一年でしたもう終わる 輝恵
夕時雨喪中はがきを書き終る 静風
白蛇くる青い地球を抱き締めて 厚子
五才若く父はメガネを変えました 歩美
冬の空いつも探している帽子 栄香
靴のひもきつめにしている氣負い 比呂子
幸せを運ぶ蛇ならウエルカム 史子
十二月街が宝石箱になる 千枝
太陽がにっこりとして水平線 一路

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

ヘルパーをまだ要らないと拒む母 義人
共白髪同じお墓は拒まれる 野蒜
拒否をせぬかわりにイエスとも言わぬ 照彦
絶対にトテテタには反対だ 石花菜
拒否しても本音が顔に書いてある たけ代

村上玄也選

人間が騒ると起きる土埃
嘘見抜く母の瞳は潤んでる 次根
何もかも流して読経聞く念珠 紀美恵
耳打ちがやがて嵐となる予感 厚子
黒幕は一人静かに蜜なめる 和子
少しずつ手抜きしながら老いてゆく 博一
都合良い時だけ確かめる絆 哲男
小言ならまだしもうちは無言劇 ちかし
裏口も知つて正面から入る 淳司
常識を試されている無礼講 圭一郎
(告)いさお

佳句地十選 (2月号から)

倉益一瑠選

立ち止まり私がわたしらしくなる 夕胡
遠景はいつも空腹だった頃 隆樹
白紙には出来ぬ白紙の裏ばなし 森子
素つ裸で生れて五欲身に纏つ 宏子
鉛筆を削り戦の準備する 無限
親しくて時どき邪魔になる仲間 忠
背かれた酒に言いたいことがある ダン吉
裸木が希望の花芽抱いて立つ 朝子
瘡蓋の下から覗く負け惜しみ 妙
花の散る訳を知らないまま老いる 文子

この世には見切りをつけて千の風
最近は何れやすいのか赤い糸
近頃は暇もて余す糸切り歯
テレビでは何度も切られ生きている
思い切り抱きしめましたその昔
ばつさりと髪を切る女の覚悟
おだても研いでもカボチャ切りにくい
言い足りぬ言葉断ち切る自動ドア
ハイタッチ程の軽さで縁を切る
ガンでなし嬉し涙がポツリと出
温かい看護にながれ出る涙
癌転移母の姿に涙する
解散に総理の涙見たような
親父似て涙もろくて活火山
若かった涙出る程笑ったな
鯛ヒラメ蛸の涙も混じる海
苦節十年涙をバネに今がある
助手席で安全願ひ口づくむ
安全の文字が辞書から消えて行く
安全は叩いて渡る石の橋
原発の安全神話ふっ飛んだ
安全の誤算が招く原子力
安全を打音ではかる頼りなさ
百円で家内安全祈願する
心にも安全ベルトいつも締め
安全な日本になぜかオスブレイ
羊水の海で聞いているブラームス
安全な人の話はつまらない
きみが好き安全地帯出てしまふ

滋 陽の助
紀の治
紀美恵
岳人
久江
重利
玲子
美ツ千
富恵
重忠
清
公恵
耕治
悦子
完司
泰山
和子
道子
貴恵
美枝
龍坊
玲枝
勝憲
久芽代
美代子
節子
芳光
くにこ

安全は六メートルの塀の中
川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報
充実の一年だったカレンダー
いろいろな馳走に惑う迷い箸
方言ではほほ笑む里の母思う
すみわたる空を見上げて笑顔咲く
差し向ひ積る話に花が咲く
年中無休私忘れた母の世話
富柳会(大阪) 古田 千華報
IT化迷惑メール大洪水
シンブルに生きる真上の太陽
間違いとやつと気づいた土踏まず
慌てない時計を止めてひと休み
思慕一途もしが右往左往する
似顔絵のもしもしやの好奇心
大勝負もしもの席は取ってない
立ち位置をずらして秋は真つ盛り
恋人が出来たぞ熱い茶が美味い
満洲に征った夫の年齢を読む
二の足を踏んで逃した恋がある
本心を今試されている踏み絵
もしもでは無いと地球が呻いてる
炊飯器開けてびっくり米のまま
今もしも貴女の本音聞けるなら
腹立てぬように新聞ひらく朝
虎の尾を踏んで転んだのはわたし
すわ地震微動だにせぬ肝っ玉

三津子
はつ恵
放任
弘
いさむ
よしみ
ひかり
清
紅紫朗
佳子
七朗
和子
登子
慶子
よしみ
寿之
正治
華
奏子
伸雄
武人
千恵
彦次
未知
恵

袈裟切りにしてやりたいな某国家
陽だまりでもしもの話して平和
散り急ぐ一気呵成に冬の顔
地団駄を踏んで耐えてる片思い
マルクスもムーミンババも酔う屋台
鈍行のリズムへ秋の音ばかり
二の矢研ぐもしもに深い闇がある
彬碑に添ひ紫の百日紅
宇治十帖ひととくむらさきのページ
風海もしやを何度待てばよい
陽炎も男も素つ気なく消える
追憶の日々陽炎にとけてゆく
平日に限定秋を食へ尽す
ひとつずつ町の灯の点く平和の絵
情熱は平な胸に溜めてある
海鳴りの聞こえる町の私書箱二
秋ですな天はわた雲ひつじ雲
南大阪川柳会 津守 柳伸報
肩に手が怒りだんだん溶けてくる
沖繩の話が出るんだん各政党
12党乱立怒る茶権率
稼ぎいい妻は茶碗で酒を飲む
よく稼ぐ医者で病気をまた作る
共稼ぎ貯めてはるなと言われてた
汗流し稼いだ金の使いみち
稼ぐこと上手になつてからの鬱
アルバイトせつせと稼ぐ訳がある
稼ぐ気があれば何でもある仕事

千華
アキ
高鷲
壽峰
欣之
鬼焼
信子
ダン吉
浩子
すゞ代
帆子
いさお
希久子
誠
瑠美子
義子
森子
正春
ななさ
和雄
栄子
典子
勝弘
たもつ
昌紀
庸佑
シマ子

正月も稼ぐ神社は無税なり

稼ぐのが趣味とは寂し過ぎないか

ゴミ仕分け夫の方がうまく成り

思い出を語れば多いゴミの山

出るゴミも少なくなった暮らしにも

大黒柱粗大ゴミとは言わさない

ごみ一つない部屋に来て落ち着かぬ

ごみ箱に捨てたあなたが見当たらず

美しいドリーム貴方の膝枕

綿菓子で釣るドリームは父の策

苦労とは思わぬいつも夢がある

ドラム缶見た夜の怖い怖い夢

言い訳がなめらかに出来る何かある

肩書がとれて口調もなめらかに

なめらかなでない話だが心打つ

口はさむ余地なし妻をただ見ている

なめらかな墨堂堂と金一字

なめらかに溶けて夫婦という絆

川柳らくだの会(鳥取) 岸本 宏章報

人生は夢見るだけじゃ暮らせない

夢を断つ病魔悲しい人の世は

小回りが効かなくなった古希も過ぎ

風に乗り聞こえる街の息づかい

きつと来るあの人待つも老いの恋

浅い思慮破れ障子の穴ふさぎ

理に溶けず情けに溶けて涙する

口紅が濃いくてキスの邪魔になる

ライバルに刺激を受けて胆据える

忠昭

楓楽

克己

タカ子

百合子

ルイ子

弘子

郁夫

柳弘

柳伸

修

恭昌

弘風

更紗

一步

秀子

志華子

集一

寿賀子

富貴子

仁子

清

登美

一弘

玲子

大鯨

孝子

リハビリへ先ずくねくねの線を書く

橋だけが真つ直ぐだった通学路

川柳さざやま(兵庫) 北澤 桐民報

生きる知恵本音にうそも少し混ぜ

要支援二級の生きる申し無さ

年の功老人力を当てにされ

知恵かつて土俵へのほる力こぶ

内緒です里の力を借りたこと

この先もたよりにしてます太い腕

よい知恵はないかと酒を注ぎながら

その知恵を伸ばしてみたい母の腕

ちらちらと心を見せて赤い糸

冬支度炬燵にみかん出来ている

力強い味方一本提げて来る

垣根越し紅葉舞いくる寡婦の城

悪多発知恵屈折の世の乱れ

一年がだんだん早くなってきた

お金でなく知恵で解決心晴れ

雑談の友の言葉に知恵拾う

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

節電に昭和が顔を出して来る

それとなく範を示して気づかせる

下駄が好き昭和の父の散歩路

手作りのおせき話っていた昭和

バブル期が弾けてこぼれ出た昭和

廃屋は昭和のままに古時計

何だつけさつき見て来た掲示板

宏章

久子

美緒子

純子

美紗子

哲男

稠民

真由

勇

多美子

開子

可住

かほる

幸子

ちかゑ

照代

美智子

桂子

久子

長一

純子

美智代

春代

勝

そこやそ妻が指示する痒い背な

昼日中雨戸が示す留守の家

新玉に示した誓い乗り遅れ

ヨダレとろり落ちて目覚めたバスの中

まいったなとろりとろけるその笑顔

体操と言えぬとろりと動いている

ヤレヤレとろりほどける仕舞風呂

せっかちもとろり弱火の京料理

朝酒にこたつでとろり三が日

子らの声明るさ戻る地震の町

ランチ後にレシート回る五人連

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

棚ボタで政権与党駆け込み

領いて聞けば講師に捕えられ

私にも持病とナース手を振った

お花見へいざやいざやと瓢お重

入院の老妻偲び米を研ぐ

殺人鬼さえも人権言いつのる

懐の豊かなときは出る笑顔

三人め曾孫誕生四股を踏む

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

金ラベル鼻にツーンとワサビ漬け

習ってもすぐに忘れるキーボード

おしゃべりが満開となる初句会

予定は予定明日の事は分からない

モナリザの前でシャッター押す笑顔

還暦の今も迷路に惑わされ

幹治

信男

康子

順子

郁子

契子

正子

黒代

柳兎

重子

輝夫

蜂朗

四郎

實

勝視

高明

哲男

節子

雅美

週行

まみ

美千代

幸子

百合

どっこいしょ増えて娘に叱られる

かつ子

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚 恵子報

ゆき

富美子

千代

寿々子

亜弥

喜周

ちかし

麗

蘭

鶴子

初枝

瑞枝

恵子

高知川柳社 小川てるみ報

哲史

京子

てるみ

圭二

千鳥

進

木村貴代子報

何もかも貴方任せも楽でない

くしゃみ出そう悪口うまく噛みこらす

つなぐもののお年賀だけになった友

貴代子

純白に輝く未来呱呱の声

哲子

恋らしい輝いている孫娘

いわゑ

思い違いをいつばい積んで生きている

年代

川柳の輪(大阪) 岡本 薫報

三楽

先走る智に遅れ取る人の情

昭好

早すぎる正月過ぎて節分だ

敬子

頼られるうちが華です爺と婆

一幸

頼られる程のものなし書き遣す

泰子

早すぎて惜しまれて逝く勘三郎

あや乃

すき勝手ゆうてくるくせにたよりすぎ

克衛

頼り甲斐あった親父の広い背な

薫

スピードを落せば世の中見えてくる

勇太朗

逞しい妻を頼って日々安堵

みちる

仲立ちを頼った友が恋がたき

淳司報

お迎えを待つと言いつつ医者梯子

輝子

お正月福の神まつ商店主

武男

ランドセル四月一日待ちどおし

ともこ

聞き飽きた小言が今になつて効く

幸子

争いの地に住む子等に福あれと

ふみ

餌につられ選んだ後で知る苦さ

登美子

抜け目なく世間を泳ぐ出世魚

孝代

iPS新薬誕生待ちわびる

けい子

五分程待たせて見せる好きな人

克三

特売場女殺気に怖じけ待つ

光

バス待ちにちよつと一杯して遅刻

篤

バレンタインチョコを撒き餌に糸垂らす

正博

釣ったのに餌が要りますわが魚

光弘

ガッツポーズ練習積んできた誇り

久美子

少子化を嘆いて猫が仔を五匹

正子

行き場無い心の痛み冬火花

(木)正子

家族みな笑いこらげて福を呼ぶ

隆彦

頑として列には付かぬ利かん坊

弘光

あのサイン勘違いした待ちぼうけ

和子

がれき跡希望のような緑の芽

正美

誉め言葉少しに期待する努力

三和子

赤紙の父を待ってた母も逝き

和代

春を待つ蕾に試練今朝の雪

敬二

小さな福胸で発酵させて春

芳野

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

玄也報

外国人に恥じる乱れた日本語

俣子

朝寝坊さんばら髪でごみをだし

かりん

古里を捨てご先祖の名を汚す

千代

恋文の誤字を今でも恥じている

愿

恥などを知らぬ女子会皆胡坐

玄也

足踏みでトイレの列に耐えている

健吾

母の影とみ越え少女母となる

澄空

習いごと一歩踏み出す勇気持ち

五月

スカートの裾を夫がすぐに踏む

のん子

度忘れがひどくなつたな竹を踏む

明子

麦畑踏んじゃ駄目だと孫が言う

さくら

国境侵犯地団駄踏んで見えています

和幸

二の足を踏んで逃した青い鳥
回復へ一歩踏み出す日本国
赤絨毯踏めば忘れる主義主張
ミシン踏む母の記憶を甦げに
階段を踏み外すまで有頂天
ステッパが一歩がバスの乗る
子役から場数を踏んで大舞台
ホームレス嬢すぎて疎まれる
祇園には祇園の蜆京舞妓
おままこと小さな母にみる蜆
身についた礼儀作法に品がある
父さんのようになると嬢けてる
優しさが蜆の基本なんだろう
どん底に落ちて泣かぬいい蜆
言葉より親の背中が効く蜆
虐待を蜆と義父は繰り返す
さわやかな風が無欲になれと言う
淋しさも悲しさも消す南無阿弥陀
叫んだら却ってつらくなる蜆
レギュラーがどじを踏むのを待っている

和夫 世紀子 敏治 としお 誠一 像山 八千代 舞夢 ばっは 雅明 唯教 時雄 ダン吉 日の出 清晋 好 清 朋月 扶美代 天笑

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

左手の小指男の声で泣く
忘年会不平の棘が突き刺さる
木の上にあります僕の現住所
もの思い雪を見つめて年忘れ
野球部が吹雪けちらし走ってる
根っからのピエロでござる木に登る

しのすけ きよし 龍馬 小とみ 信子 霜石

雪が降り爺の出番がやとくる
負の記憶忘れ新たな年へ向く
子が巣立ち台所にも活気消え
樹の太き目線で計る勘のよさ
おいおい丸くなる管影法師
鉛筆を削ったあとに香り立つ
そしてまた祈りを込めて打つ木魚
名匠の命が生きた曲げわっぱ
御点前の茶室落ち着く木の香り
木の枝をコケシに変える友に技
足の裏にまず感謝する年忘れ
産声が明日の日本に火を点す
うわばみのように飲んで下着を脱ぐつもり
おいおいと泣いてたまるか北の葦
沙羅双樹心貧しき風ばかり

一湖 きよし 初枝 ひとし 美鈴 則彦 芳彦 一吞 井蛙 花匠 黙然 慕情 一花 五楽庵 柳弘報

川柳塔なら 坊農 柳弘報

最後には辿りつきたい天国へ
甦げな記憶を辿るわがルート
孫ひ孫山程残し花ひつぎ
辿れるかあなたの築いた足跡に
天理教の町は異国の顔を持ち
饅頭に酒もいただき武蔵流
思い出を辿れば里の山や川
裏道で蜜を舐めたい太鼓腹
入れない手柄話の輪の中は
ゼネコンが甘い汁吸う復興費
ストレスが吹き飛ぶ様な秋景色

おたか 彰治 ささ恵 和夫 眞澄 優 保子 郁夫 あり 紀雄 積子

この道を辿れば極楽見えますか
ふる里を辿れば母のわらべ歌
秘め事は閉ざされてこそ蜜の味
二歳児がドヤ顔見せて名前書く
蜜月が終わる頃には子を抱く
放物線辿って優しさに出会う
おしゃべりな母が私のルーツです
失敗を辿り明日のニューブラン
腕白の頃を辿った帰りの道
白い雲ぽっかり笑みをくれました
洗濯機壊しノーベル賞ゲット
一滴の蜜に信念まで曲げる
近道を辿って見事落とし穴
捨て石は無欲手柄を焦らさない
蜜の味憶えた熊は墮落する
妖精の森に誘われ魔女になる
六根清浄唱え辿っている古道
矢印の道を辿っている不安
前向きに辿れば見えてくる希望
錦秋のまほろばの国冬隣
黒幕は一人静かに蜜なめる
小鼻ひくひく手柄話が始まるぞ
苔を着て石が座っているお庭
煙になりはった灰になりはった

弘風 舞夢 勝弘 萌子 柁子 蕉坊 堅郎 次郎 洋弘 柳治 完次 良己 克己 惠美子 富子 ダン吉 朝子 寿之 博一 理恵 真理子 成子

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

ゲンという遺書かきつづけ啓治逝く
警察のなかに欲しいな交番所

鮎子 峯二

山が好き命捧げて親泣かす
 フクシマ再生八重の桜と白虎隊
 ガレキ処理手抜き除染を問われてる
 党の検閲なくては出せぬ中国紙
 ゴードンさん死去男女平等ありがとう
 V字回復本物やろかこの株価
 知り過ぎた顔が賀状であらたまる
 次々と余白が埋まる予定表
 陽が昇り今日やることがあつて幸
 節くれた十指朝夕陽を拝む
 太陽の様な母いて座が温い
 太陽に汗した顔にある誇り
 太陽の分け隔てない暖かさ
 鯛大根のよう相性のいいふたり
 サークルの中で弾けている金魚
 まんぼうのような夫の寝正月
 食べないでイクスの鯛が目を逸らす
 夜七時半額まつて刺身買う
 回遊魚あちこち句会顔を出す
 腐っても男は鯛だ胸を張れ
 皆メダカ皆んな先生皆生徒
 水漏れがしているような物忘れ
 改竄に冷水ぶっかけ守り抜く
 水割りが湯割りが採めている平和
 うぬぼれた心にしみる寒の水
 校長の事情聴取もザルに水
 辞書練って知識の水を絶やさない
 川辺に住み水の怖さと生きている

たかこ 和代 弘子 隆昭 九条男 桃花 柳弘 忠昭 小恵美子 克己 更紗 たもつ 鉄心 紀乃 大気 一志 直子 勝弘 秀夫 花笑 哲男 六点 一行 敏治 ばっは 篤 敏子 賀世子

喜びを待ち兼ねている拉致家族
 正月があるからリセットもできる
 喜びが汗と涙に濡れている
 組板に乗せて品格確かめる
 喜びの日のまな板がよく弾む
 川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報
 赤い服慌てて老いることはない
 蜘蛛の巣に引つかかっている赤い糸
 赤ちゃんの未来に託す平和の世
 賀状いっぱい食べてポストは赤くなる
 一期一会あなたと逢うた赤い糸
 いらぬ事言つて赤恥懲りもせず
 執念の糸をほどよく溶いて春
 逢える日を信じ真つ赤に塗り潰す
 ゆらゆらと信じてただけではないクラゲ
 潜水メガネでこの世にゆらゆらと浮かぶ
 ゆらゆらと風になつた良い日和
 ゆらゆらと無駄な力を抜き生きる
 ゆらゆらと引き返すにもかかわらず
 お祝いの裏に平和が付いている
 送受信息と交わすおめでどう
 お祝いの手はお日様の匂いする
 百歳に迫る壺の祝いの膳
 居酒屋でひとり傘寿の誕生日
 金婚式転ばぬように手をつなぐ
 招待はないが祝電打っておく
 祝い事差し引きゼロを包んでる

昭 信子 宏 穩夫 朱夏 克子 美子 和香 紀久子 富美子 佐一 寿子 ほか 道夫 あきこ 紀子 泰女 英子 秀子 徑子 小雪 千雪子 千雪子 愿 保州 准一 ダン吉

祝と書くたびに小遣い減つてゆく
 川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報
 運勢のとおりにどうにか生かされる
 込入った事が苦手で浅く生き
 茶碗割れる今日一日を慎重に
 開運に小銭バラ撒く初詣
 蛇口全開過去を流して一人ぼち
 短冊に花と命をしたためる
 運不運掻き混ぜ今の笑い顔
 嫁いでも恋愛運が気にかかる
 茫々の国土人権よたよたと
 運勢に逆らっている生きている
 福袋一度も買ったことがない
 生きている証くすりの袋積む
 長すぎる生命線をけつてみる
 よたよたの漁師しつかり船の上
 敵前に行くよたよたしめてみせる
 運勢を占っている薄水
 短冊に初めて書いた五七五
 短冊にしたためておく独り言
 桃太郎の桃は臨月であつた
 雨が降る日は運勢も湿りがち
 書き損じの短冊ばかり溜まる冬
 袋小路抜け出せない悩んだ日
 かわけを投げて運勢たしかめる
 よたよた歩きお互いが怖くなる
 年金も息切れしてるポチ袋

大輪 弘子 彩子 幸代 茶子 孔美子 宣子 実満 咲和 照彦 盛桜 小鹿 幸恵 ひろこ 蟹郎 完司 美ッ千 (岩)和子 美代子 富江 江かおる

火の用心短冊かけてある厨
辛抱をいっぱい入れた知恵袋
ふたありの秘密が通う箸袋
身辺整理の袋とゴミと同居する

はびきの市民川柳会(大阪)徳山みつこ報

春の陽を浴びて目覚めたこぼれ種
裸木が芽を出す順に春が来る
四季のない二季の列島春を待つ
早い春にのろまな頭すぐ察知
水仙を一本活けて早い春
冬に耐えみどりの春を待っている
一年中春であつたらばけるかも
復興を待つみちのくの遅い春
業牡丹の一万株の大蛇かな
カタログに誘惑された旅プラン
新婚の宿へも一度金婚で
アルバムを開くと旅が飛んで出る
旅行好き家のベッドがすねている
旅行前うきうき気分寝られない
宝くじ世界旅行の夢を買う
行程にトンネル避けた旅をする
月旅行時間も軍資金もある
いい旅をしよう山頭火のように
エコエコと黄門様の印籠か
早寝遅起きわたくし流のエコである
原発のどこがエコだと言いますか
取り敢えず持ち歩いてるエコバッグ

くに子 満 みさ子 惣子 庸佑 アヤ子 久仁子 登志子 ヨシ枝 敏 かつ美 いさお 美喜 泰子 千鶴子 悦子 章司 雄太 フジ ちづる 六点 美代子 里喜雄 扶美代 ダン吉 光男

川柳さんだ(兵庫)

堀

正和報

エコライフ先祖の知恵が光り出す
欠点を包んでくれる人と居る
尺八の葬送曲で出る箱
いよいよなにに通帳だけは離さない
年賀状干支に因んだ一句添え
大学は出たが就活狭き門
川柳の色紙を飾り胸を張る
また一つ歳を増やして武者震い
いよいよに無口な男デンと出る
飾らないありのまんまが美しい
情がある欠点ばかりの男だが
終章を鉛筆で書くあたりがとう
どんな娘が住むのか窓のシクラメン
胎動に鈍なわたしも決意する
飾るより磨く努力が人の価値
入り口の仁王さまにもご挨拶
雪化粧まとい御霊の眠る森
欠点を晒し流れに添うてゆく
欠点を曝せばこの世生きやすし
余白には夢の続きを飾りたい
増えてますシワと薬と嫁のぐち
百科辞典ネットに負けて飾り物
社長室入る前から最敬礼
大歌手も飾りだけではちません
金箔で飾る傘寿の祝い箸
しめ縄を飾る姿に身を清め

みつこ 章子 哲男 好文 キヨミ 歳子 宣子 順子 淑子 真由 朋月 光龍 光久 茂 千津子 哲夫 ヨシエ 徹 ちあき 雄太郎 清司 雅尚 雅 見 喜久子

鍋料理家計ピンチで肉不足
応接間全集の列夢の跡
年男出番ですよに胸騒ぐ
熊の手の女性に揉まれ夢心地
偶然が必然になる恋でした
iPS重い扉をこじ開ける
やれやれと思った途端風邪をひく

京都塔の会

樹本 宏子報

古道具山の様です想い出が
省くものたんとあります皮下脂肪
力学の法則君に恋をした
嘘言えず言葉省いておくマスク
がらくたも思い出詰まる宝物
幾山河法が埋めたり壊したり
省いても老いの荷物は多すぎる
戦争を知らない人の勇ましさ
コレクションがらくたに埋れる至福
ガラクタになった石のない指輪
がらくたになった気がする退職日
主婦業は省く才能持っている
いやなこと全部省いてお正月
がらくたの中に光った妻がいる
結局は窓際族にならじよう
平然と白紙に戻す削除キー
以下省略と切り捨てられぬこの命
叫ばなくとも九条は胸の底

裕美 廣子 雅司 健二 ひとみ 正和 加寿恵 昌乃 弘之 宏子 義昭 求芽 万紗子 啓子 満子 輝美 かずお 文代 益子 昭 則彦 葉子 英旺 美津子 欣之

お宝をがらくたにする鑑定団
氏名のみ以下同文と省かれる
蛇腹から七福神がお出座しに
完全試合野望を砕く足の先
錆落としの酒を離せぬ十二月
小さい手奏でる音に癒されて

川柳大坂

森松まつお報

どやどやと領海犯すチャイナさん
ゆつくりとどやと論す母のこえ
ランドセル悪い事まで習ろてくる
亡母の背で学んだ知恵で生きてます
学び合う友エールで勇気づく
おばちゃんは聞いて喋って学習し
一応の予習して行く美術館
川柳で学ぶ心を持ち続け
片思いだとええ振りしようとも
青空にすまぬと思う再稼働
無理なんかしなくていいと高い空
夢追えば余白ひろがる春の空
空しさと満足感の老いの道
頭の中いつも新鮮維持したい
巣立つ娘の紅新鮮な華と炎え
新鮮な女房と盛大好きです
新鮮な世界見つめる好奇心
新鮮な気持ちになった初詣
億のつく鮎の中にある魂
切れますわ錆びた頭を研いだから
深いゴジラにファン惚れ直す

綾子 庸佑 比ろ志 弥生 勝弘 柳昌 五月 万紗子 彦太 まつお 比呂志 一步 美花 川童 喜楽 一風 紀雄 堅坊 芳香 信醉 鉄心

原発は一步もひかぬ全廃で

西宮北口川柳会(兵庫) 久保田千代報

うれしくて二十四時では足りない日
法螺ふいて舌遊ばせて生きのびる
一抜けて角とれてきた柔和な目
結び目がすぐに緩んでいる野合
枕木が結ぶ望郷への想い
転んでも二人三脚まだ夫婦
一日をおそろかにして楽隠居
湯豆腐の湯気ゆらゆらと冬深し
誰に言うこともない一日の疲れ
回復を祈る裸足の百度石
胴上げをして大方が涙ぐむ
点滴が落ちる奇跡を祈りつつ
割りきのメールで孫達と結ぶ
三が日過ぎればもとの二人だけ
何時見ても祈るかたちは美しい
返り血をいとわぬ人と結ばれる
エンディングノートなしにさらばするつもり
被災地の祈りが届け二世松
産声等待って握っている拳
五七五下の五文字にある命
一日の記憶辿って床に着く
長い日も短い日あり同じ一日
襪系解いて二十の袋帯
一日はあつという間の砂時計
あつけないジャンボ素通りしていった
あつけない折れておくのも処世術

司 義子 美籠 遠野 無限 敏夫 じろう 比ろ志 求芽 朋月 哲男 光久 耕治 正和 忠 章子 弘子 哲子 茂 利子 伯備 キヨミ 盛夫 勝弘 武彦

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

「春の海」聴いてのどかにする一日
スビーチの結びを飾る五七五
あの汗は何だったのか予選落ち
拉致の母祈りは深い誕生日
一日の終り心を空にする
あつけない一生と言われぬように
良い事があつて鏡にもらう笑み
マスコミは平気で二人の仲を裂き
信頼があるので人生丸く生き
ほどほどの幸せと言う膝頭
八十路すぎ森羅万象ほどほどに
ほどほどの妥協もせずに頑固者
何事も平気で話す評論家
土壇場になると出てくる馬鹿力
ほどほどが分からぬままの手術台
ほどほどの人生航路九合目
「春の海」聴いてのどかにする一日
スビーチの結びを飾る五七五
あの汗は何だったのか予選落ち
拉致の母祈りは深い誕生日
一日の終り心を空にする
あつけない一生と言われぬように
良い事があつて鏡にもらう笑み
マスコミは平気で二人の仲を裂き
信頼があるので人生丸く生き
ほどほどの幸せと言う膝頭
八十路すぎ森羅万象ほどほどに
ほどほどの妥協もせずに頑固者
何事も平気で話す評論家
土壇場になると出てくる馬鹿力
ほどほどが分からぬままの手術台
ほどほどの人生航路九合目
精いっぱい飾ってみても育ちばれ
飾り気のない人にまづ惹かれます
飾り付け終わる迎える無垢の朝
外面を飾ってみても中身なし
松飾り雪が降ってもシャンとする
変わる世へはだかのままの山や川
麦食えもバックヤローも懐かしい
新婚時代姑小じゅうとこつちやまぜ
懐かしい顔と名前が一致せず
宏造 千賀子 美津子 毅 能子 みつ子 千代 かつ子 英子 好栄 恵美子 澄子 ちよえ 清泉 照彦報 智恵子 けいこ 悠子 貞子 和子 康子 萩江 喜美子 英子

懐かしい便り逢いたい気がつゝのる
携帯もテレビも髪も薄くなり
人間を横着者にしたテレビ
テレビ相手に愚痴つてみたり笑つたり
停電にでかいテレビがベソをかく
食べられる料理出てくるテレビ欲し
阪妻がテレビシネマで暴れてる
お笑いのテレビちつとも笑えない
天職と思つて農で生きてきた
上向いて涙を拭いて天を見る
腰伸ばし天を仰いで見る銀河
天と地を一気に回す逆上り
天寿まで夢いっぱいの予定表
江戸カルタ天知る地知る育児法
幼児からテレビの教え早い知恵
無理難題羽織袴で来いという

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

授かった長寿きらきら生きるべし
必勝に向けて光つた目の本気
婚活へメイクきらきら勝負する
わが子だけキラキラ目立つ園児の輪
暗闇にきらきら光る母の星
きらきらとダイヤモンドのようないい笑顔
元氣だが老いは隠せぬ背の丸み
食べて寝てよく働いて元氣です
母さんの元氣で家が回つて
診察の結果の声が弾んでる
元氣やなあと呆れられてる医者通い

風露 由紀子 石花菜 龍枝 次男 醉芙蓉 鬼一 茶一 重忠 瑞子 日出子 美代子 玲子 祐子 恭子 照彦 志華子 弘子 昭 弘子 満子 善作 捷也 舞夢 すみ子 日の出 桃花

八路坂元氣を出して登りきる
頑張るぞ元氣印の力瘤
そこそこの元氣自然体で生きる
何とかなるものよ元氣でさえいれば
五〇円の縁大事に賀状書く
年一度安否確認年賀状
施設からもう出せない年賀状
用を足しあとうせ忘れ又も行く
ノール賞はもう過去前を向く学者
スキップも時々いれて散歩道
ひとことを返してからのきつい坂
かへの時期お金と身体整える
ふきのとう何か言いたいことがある
この指に止った幸を慈しむ
夫婦喧嘩するのも仲のよい証拠
あれやこれ引き算してる冬の部屋
内緒ごと出来ぬ私の多汗症

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

解凍をすれば愚かな過去が出る
水ひとつ炬燵で雪見ハイボール
幸せを冷凍保存する二月
あの人の話に少し嘘がある
人づてに聞くふさふさの悪いニュース
残されても一人で生きているのは女
ばつさりと人間割つて澄ます耳
負けチームにうるうるしてる人心
削除キー押して消したい人もいる
初詣人の頭へ神頼み

柳歩報

浩二 滋彦 希久子 理恵 紀昌 恭子 げんえい 公平 眞澄 千歩 楓楽 蕉子 義 集一 知之 富子 正雄 桂子 幸子 寿代 町紅 千里 久絵 とも子 芳恵 湫丘 注湖

人間味豊かで温い人当たり
悪いのは私以外の人である
許されて羽の軽さで飛ぶ予感
横道があつて爆発する予感
悪い予感バッチリ当たりバビバペボ
鼻唄が出そうな朝のいい予感
毎年のことです愁の予感
サラダ菜に包まれていい予感
ご多幸を祈ると記され予感抱く
いい予感出がけに見えた冬の虹
どつぷりと日暮れる里へ冴えた月
どつぷりと川柳うたい生きていく
どつぷりと不平不満は肩籠に
毎日の普通にどつぷりつかつて
新妻もやがてどつぷりひざを組む
どつぷりと晩年色に染まつて
毒か薬か権力の裏にいる
熊の胆で何でも治す戦中派
お人好し毒にも薬にもならぬ
腹八分後は薬で二分埋める

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

生かされて朝日に祈るありがとう
点滴に家族の祈りとけ込ます
十五歳期待を背に島を発つ
病室を往つたり来たりする祈り
鯨鯨を吊す美食家を吊す
銀しやりの味極上のかまど飯
待たそうか待とうか恋の水たまり

長吉 芳山 玲子 雪代 涼子 ちえこ 柳歩 美智子 禮子 知恵子 左余 輝山 民子 ゆき 幸代 博子 弘充 昌枝 草庵 一風 高鷺 清 扶美代 草風 壽峰 加央里

幸せのかたち汲めども尽きぬ愛
日々折る人哀しくて愛しくて
糸切れた風になりたい日のわたし
折るだけでは夢が叶うと思わない
きつと来る切子グラスが音を立て
平凡という一日を踊る春
無に返るそして期待を練り直す
春を待つ瓦礫の下で零れ種
ぶんぶん人間臭い婆姿が好き
無の境地折れば神はまい降りる
無能コーチが期待の星をみな潰す
極楽の酔いから醒めてフツと婆姿

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

着ぶくれてテレビ体操まなならぬ
大好きな人と一緒に年をとる
テレビしか遊び相手がなくなる
初雪は母となった日思い出す
僕がいて世の中うまく回ってる
半額になってから買うカレンダー
幸せの土台を作る親ごころ
六億は使い切れない宝くじ
嫉妬心強く隠すのに困る
連想が負の方へ向く去年今年
命令が腰から下へ届かない
早口で人の話もって食い
床の間の飾りにならぬ白髪首
私とあなたは赤の他人から
大鵬が逝って哀しい卵焼き

紀乃 賀世子 雄太 慶子 華子 森子 紀雄 朝子 賢子 耀一 欣之 玲子 芳光 芳山 くにこ 照彦 紀の治 風露 由紀子 大鯨 鬼一 石花菜 美恵子 忠良 蟹郎 麦青

私を人肌にして差し上げる
どの色で咲くか思案の古希の春
気にかかる音痴になった洗濯機
歳重ね夢も身近な事になる
母さんキャンセルした団子鼻
植樹祭緑あふれる花回廊
生薑洗う中国の土粘土質
材料費気にせぬ主人料理好き
清拭のナースと話す私的なこと
元の姿は連想せずに食べる肉
我が胸のマンガローブが消えてゆく

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

近いうち婿を貰いに蟹持って
近いうちそれでも待てば長かった
尖閣の買物何故か高くつき
福袋買って貧乏神も買い
福の神今年はやってくるはずだ
雪の下草たちが待つ春の陽よ
法律に触れた経験などはない
五十年お節もやと褒められる
メガネかけルベ使って辞書をひく
経験を生かしササユリ咲かせてる
お蔭さま身体にメスは入れてない
経験の豊かな医者に診てもらおう
七転び八起き達磨のスクワット
経験も役に立たないよく転ぶ
経験で妻の機嫌がすぐ分かる
近いうちきつと行こうと何時も言う

美ツ千 幸子 けいこ 雄大 重忠 恒子 久子 鈴野 仁美 すみあ 完司 蟹郎 菖子 圭一郎 一瑠 完司 幸安 忠良 節子 重忠 茶子 公子 清帆 一粹 昭弘 和子

経験談ブルーシートをめくりあげ
怒鳴るより囁く方がよく効いた
川柳同友会みらい(鳥取)吉田
救われた命とことん生きて行く
店先でT P P が待っていた
身だしなみ一分半の化粧する
腕組みを解いたミサイル秒を読む
党名が三日で変わる関ヶ原
栄転は今の会社のすぐ二階
新党が浮くは消えるは忙しい
手に馴染む箸と茶碗があればよい
これ以上何を望もう生きている
それは駄目妻がすべてを規制する
昇給はいつもがっかりさせられる
買ったあと半額になるお惣菜
日本の医療費憂い方がいる
独り居の気楽と怠惰隣り合う
高台に立つと魚群の夢を見る
柿の実が挽られていく歩道側
今生の別れにと食う大松葉
大根の礼におでんを持って行く
接待に笑顔惜しまず追加する
新しい総理に期待してみるか
ままならぬものに他人と我が命
核心に迫るベン先熱くなる
軸のない合意いそいそ旗立てる
立ち位置がだんだん端になってきた
願い事立ったまんまじゃ失礼じゃ

くにこ 美恵子 陽子報 葵 一聴 美津子 安子 久江 慶一 寒之 純宏 陽子 久司 温子 章子 みどり 美恵子 三郎 信之 勝之 恵美代 敦子 嘉子 華蓮 菜美 一眸 はるお

くねくねの盆栽式を盛り上げる
くねくねとするには骨が硬すぎる
儲かりまつかさっぱりですわ路地の裏
和代 遊子 公弘

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

ようやと出席したがくはできず
ちよつびりと勝つてちよつびり負けてやる
わがくちでわが納得するくせになる
宏之 律
忘却と聞こえは良いがただの呆け
冬景色でのも寒い身もちぢみ
ひろし
じつと待つ自動ではないドアの前
登美枝
総選挙鉛筆持つ手が未だ迷い
公一
細く長くへび年もがんばろう
多美子
ご無沙汰は歳暮の礼のときに言う
未延子
紀の治

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

老いの身を委ねる妻は逃げ腰に
待ち侘びるケイタイ握り締めたまま
勲
何もかも君に委ねる惚れ具合
堅坊
末席がずばり盲点突いてくる
庸佑
後は頼むと言つてそうと覗いてる
かずお
嬉嬉として番号を見る宝くじ
千恵子
目出度さを祝う千両赤赤と
志津子
選者射る一語を探す言の海
(永) 玲子
サクサク孫のメールに腕まくり
健二
いそいそと老楽の恋進行中
紀子
任せたと云つて口で指図する
歌留多
病院に母を委ねた五年間
美津子
いそいそと野良着も弾む野菜高
徹

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
病得て委ねたいのち輝かす
葉子

武彦

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

愛憎の恩讐彼方遺影見る
夢でいい一度嫁はん怒鳴りたい
大寒の温い毛布につながられる
委ねきた息子は嫁に委ね切り
円満と言うが我慢をしてるだけ
シンメトリー遊び心が見当たらず
ストレスの分まで白紙委任状
あこがれの君アルブでセピア色
巴子
寄り添つて対の水鳥寒の入り
千鶴子
あこがれも賞味期限があるらしい
千代
大鵬を偲び昭和はまた遠く
武臣
おしゃべりとビザでもやま吹きとばし
千枝子
いそいそと朝から電気当てに行く
耕治
葉子

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

欠点も美点も吞んで今がある
予定表の隙間に主婦をしています
欠点が魅力とみえたのは昔
久仁雄
一歩引けば相手の心見えてくる
たもつ
世渡りへなくてはならぬ変化球
光久

欠点がひとつもなくて友はなし
やさしさの周りに地雷埋めてある
腹八分わかつているが手がのびる
昌紀
欠点も個性と母は譲らない
加お里
欠点を探せば十指にも余る
美智代
足早に過去と未来がタツチする
扶美代
一言が多いと言われ五十年
千代
チャームポイントになる欠点のへんしん
蕉子
痛みの分かる人となら手も腕も組む
義子
欠点が素顔に見えた若かった
智恵子
生意気に命令をするカレンダー
いわゑ
大口を叩いて弱さ見せている
みつ子
楓 楽

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

下駄履きのレトロが街を起こし行く
ちらはらと聞いたマドンナのその後
蛙 昭
風邪引いて家で謹慎しています
いさお
謹んで神と約束した命
和子
豊かな日本戦後祖父母のお蔭です
和美
謹んで猫もお客を待っている
絹子
兆候を見逃さぬ目を持つ名医
勝彦
年寄りもちらはらスマホ持ち出した
香也
雪国の景色レトロな水墨画
玄也
謹慎の九官鳥がしゃべらない
香代
放射能豊かな土地を羽交い絞め
淳風
二重蓋してもちらほら匂う嘘
章子
魔線のレールの話聞いている
信二
謹厳な師が笑わせる安来節
幸吉
原発を再開します謹んで
ダン吉

三代に渡り柱で時を打つ

愛の鞭いつの間にやら暴力に

趣味一途心豊かに暮らす老い

中国が豊かな資源盗りに来る

息子にも嫁にも白髪見えたした

三が日済めばちらほら参拝者

ちらほらとマネーウイルスブータンに

息子の頭ちらほら白髪あつと引く

飛行機が電池に苛められている

命断ち師の暴力を訴える

冬眠の僕にちらほら梅便り

謹んで今年の屠蘇もうまかった

ちらほらと恋の花咲く孫娘

消費税弱者対策ちよつとだけ

絶縁の筈がちらほら聞く便り

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

穀報

喜びの朝はなおさら青い空

喜びを妻と分け合う小正月

ほっこりと賀状の中に手書きあり

健診の数値改善青い空

大吉を喜ぶ顔の苦勞じわ

プライドを水に流した喜寿の坂

喜びも寂しさもあり娘が嫁ぐ

凝りに凝り終の作品シンプルに

御苦勞様その一言で凝りほぐれ

縫う前にはや肩が凝る糸通し

大吉が出るまで巡る初詣

大輔

珠子

隆昭

保太

忠州

ひろ子

宏之

弘子

宗博

みつ江

美枝子

当代

みね

康信

義泰

穀報

能子

繁義

妙子

忠貞

実夫

弘子

武臣

美穂

文子

(大)和子

龍平

後手が届かぬ凝った背が憎い

少しほめ釘をさすのも処世術

ありがとう何より勝る褒め言葉

褒められてあつさり抜いた胸の棘

褒め言葉メモして孫の帰り待つ

褒めながら介護している優しい手

減塩の妻の料理を褒める医者

褒められて妻のベースに乗せられる

物忘れ夫婦そらつて笑いこけ

伝統芸一直線に追うオタク

手を借りて歩行訓練ひたすらに

湯煙に浮いてる顔は阿弥陀様

火の恋を忘れた筈がまだ消えぬ

焦点が絞られきれない浮気性

毎日がこんな自由でいいものか

君以外何も見えない眩しすぎ

孫帰りが破れ障子に陽の光

宝くじ当たらないから夢がある

あらいやだ私ご飯を食べたかな

赤ちゃんを囲むほんわかいい笑顔

屠蘇きげん父はおせちの謂れ説く

セシウムの川はふる里鮭帰る

毎日がこれでいいかと自問する

冷や飯は覚悟男の愚を磨く

川柳あまがさき(兵庫) 加川

靖鬼報

びつたりの相性だったあのころは

夫と娘のお陰で今日も生きている

道子

穀子

(古)和子

洋一

美恵子

敏夫

利子

康子

義博

寿朗

千賀子

保雄

邦子

武彦

ひろ

清之

順子

登美子

照子

盛夫

光久

無限

無

無

無

洋子

亀与子

ため息をつくと呼ばれる診察日

年賀状わざわぎ呉れる元の彼

あなたーと用もないのに呼んでみる

相性の悪い人とは距離をおく

私の倅せはあなたの笑顔

星占い相性のわるい人と住む

幸を呼んでるような蛇の舌

お呼ばれに着て行く服はどれにしよう

猫帰還わざわぎ立つて戸をあける

戯れに咲く花切れぬ花鉢

相性など言っておれない婚活中

朝帰りがわざわぎ起きて待つてみる

元日のコーヒーマイルだ厳かに

チエーンまで買つてわざわぎカニ食べに

いつだってそつと隣りにいる貴方

なんで又俺を呼ぶのかお巡りさん

父と子の風揚げ浮ぶ遠い初春

験のよい遠い神社へお賽銭

あの人はもういないけど呼んでみる

新年の訓辞が胸をぐさり刺す

相性がよくて笑顔で生きられる

参道の覆轍しに人を呼ぶ

おせちにもワインがいいと言う娘

逝く時はほつくり願う初詣で

おしゃべりが出来て笑つてはけ封じ

わざわぎの出迎えいらぬ黄泉の道

立つ坐るそんな仕草に出る育ち

何度見る温い添え書きある賀状

よしひさ

柳明

雪菜

泰子

初音

幸香

和子

寿美子

佐紀子

龍

美代子

楓花

葉々子

五月

ひとみ

寛十郎

美也子

祐康

見清

野薫

ヨシエ

奮水

正和

朋月

あかり

哲夫

かずお

勝巳

呼び捨てて距離の縮まる同期会
よく笑ううちは閻魔も呼びに来ぬ
さり気なく闘志を見せる初鏡

純男
哲男
美籠

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

高らかな鈴の音聞いている不安
鈴振って介護の父とティータム
ヘンクリに触れると鈴が鳴る仕掛け
アメリカから鈴を転がす由紀さおり
寒空で鈴によく似て光る星
鈴の鳴る木覆うれし七五三
鈴付けて夏の陣へし走り出す
今年の絵馬へビの首にも鈴がある
しびれたなころがすような鈴の声
嫁にやるネコに別れの鈴をつけ
やさしさに出合うと胸の鈴が鳴る
ポケの鈴元気で居ろというあかし
猫に鈴昔話とねずみ言う
無学ゆえ鈴の導く方選ぶ
迷子札に鈴猫じゃないのよ珠子
誓いあう二人で振った神の鈴
逢いたくて鈴を鳴らして待っている
ゆつくりと確かな明日へ杖の鈴
旅立ちの鈴の音が鳴る田舎駅
鈴虫にあたえた後でキウリもみ
鈴の音を聴いて癒やして右脳
久々の映画心の鈴がなる
凍て付いた音の風鈴雪の朝
吉野路を鈴を頼りに二人旅

ダン吉
綱枝
ちづる
榮
ヨシ枝
紀雄
登志子
一文
悦子
信二
みよ子
武義
弥生
良子
龍一
瑠美子
あかり
雄太
恵美子
壽峰
扶美代
高鷺
アヤ子

馬子唄の鈴が耳から離れない
美しく話して鈴の様な語尾

城北川柳会(大阪)

近藤

ラストラブ賞味期限の来ぬうちに
本読めば目薬歩けば湿布薬
容赦なく伸びる花芽を打つ氷雨
原点に寡黙な父の家族愛
蛇行して小さな幸に巡り合う
川柳は七七よりも五七五
疚っさん済んで浪速が動き出す
伸ばす手の温さ信じて車椅子
ケータイで話す故郷の方を向き
息吹けば無くなる程に伸ばす箔
また一つ歳を預けに初詣で
人間の原点呱呱の声を聞く
まだ返事書けずに伸びる無精髭
黒豆がうまく煮上がり至福とき
原点は心の座標に置いてある
ライバルの前では背筋伸ばしとく
落ち着けぬパンツのゴムが伸びている
もう一度原点に立つ志
子を送る母つま先まで伸びる
けな気にも雪をこたくて福寿草
青春の顔だにきびが咲いている
巳の年に福がとぐるを巻いて来る
惚けぬうちばち書くか遺言書
初夢に幸福駅に行く列車

一步
美代子
正報
集一
典子
美智子
正子
郁夫
勝弘
克己
寿子
和夫
千恵子
柳弘
倫志
洋志
麗
縣
義昭
堅坊
朝子
賢子
賢子
宏
昭
弘
風

事務所便り

投句したのに「川柳塔」や「水煙抄」に掲載されていないという苦情を頂戴することがあります。

郵便物は、受信簿に毎日記入、カウソントのうえ課題毎に分類して16日に合計数を照合、各選者へ送ると言う作業をします。

昨年春はほぼ同じ日に各地で投函された10名近くの方の郵便物が届かず調査をしました。結果は、最寄りの郵便局長の原因は不明という文書でした。やるせない顛末ですが、投函時には恐れ入りますが宛名や差出人、切手等の点検を今一度お願い申し上げます。

(山岡富美子)

こだわりの捨ててんびり古希の彩
老化順調減っていくのも年賀状
はつぽつと立ち上がるにもどっこいしょ
わたくしの漢字一字は恋とする
はけぬようはけさせぬよう家事二人
八十になればはつぽつ禁酒する
原点を訪ねて思う父母の恩
原点は褒めてもらったあの日です
一日の原点朝の蛇口から
止めているのに猪口に手が伸びる
年の字は金が仇と裏で読む
かずお
正

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	16日(土) 14時締切 底う・危うい・あべこべ ユニーク	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 ねやがわ	17日(日) 14時締切 壁・恥・広場・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	17日(日) 14時締切 笛・掴む・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	17日(日) 13時開場 税金・門前払い・裏	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	18日(月) 13時40分締切 尖る・特技・温い・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	19日(火) 13時30分締切 税金・チャンス・選ぶ ときめき・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	20日(水) 14時締切 銀・走る 安請け合い(読み込み不可)	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
川柳クラブ わたの花	22日(金) 10時開場 底力・贈る・味・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	23日(土) 12時30分開場 数・掴む・こころ	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日) 14時締切 宿・声・煙草・パワー	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日) 13時30分開場 ベコベコ・派手・ごっそり	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋
南 大 阪 川 柳 会	25日(月) 18時開場 がたがた・フライパン・踊る 雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	25日(月) 14時締切 しっくり・定・起こす	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松 露 川 柳 会	25日(月) 19時30分締切 指・立話・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城北会 川柳会	2日(土) 13時開場 白紙・目線・ひとまず 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏鏡典子
富柳会	2日(土) 14時締切 路・戻す・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳会	2日(土) 14時締切 丸い・ネジ・喜ぶ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 な	6日(水) 14時締切 咲く・女・満足	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳塔 さかい	8日(金) 13時開場 駆け引き・伝える 折句=まぐろ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川柳会	8日(金) 14時締切 誇る・飯・最後・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	9日(土) 14時締切 うんざり・涙・知恵	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	9日(土) 13時45分締切 歩く・流す・レンタル ぼちぼち	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳塔 打吹	9日(土) 14時締切 椿・あくび・スカスカ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	10日(日) 14時締切 応援・品・続く・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	10日(日) 14時10分締切 兼題=足・あつさり・教科書 課題吟=定食	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 泉原道夫
西宮北口 川柳会	11日(月) 14時締切 飛躍・着る・とんち・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 忘れる・土曜・わいわい 自由吟	尼崎女性センター テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	12日(火) 13時30分締切 手紙・育てる・まさか	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール 蜷池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 みちのく	16日(土) 16時開場 折り・ありがとう・仰ぐ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯

柳界展望

★第26回堺市民芸術祭川柳大会は平成24年11月24日、堺市民会館で開催。同人秀句次の通り。

しまっておこうとても切ない嘘だから

★第39回堺まつり協賛誌上大会同人の天位は次の通り。応募者143名。

ビビビビ ビートルズ
ビビビビ ビートルズ
ビビビビ ビートルズ

一発がきいて人間とり戻す 倉益 一瑤

泥田にも生きもの抱いている温み 奥谷 彩子

一生を泥とくらし来たモンペ 小白金房子

目に見えぬ危機パソコンも原発も 山岡富美子

目の端に山の高さを入れておく 高島 啓子

世界一周わたしは亀に乗って行く 高田美代子

一人旅木霊がいつも耳にあり 岩本 笑子

★京都塔の会、平成24年度最優秀賞は、藤井則彦氏(同人・豊中市)に決定。多得点賞は、

①61点 清水 英旺

②58点 藤井 則彦

③56点 今井 弘之

④52点 片山かずお

④52点 榎本 宏子

▽ご芳志御礼△

○コーキ封筒(株より封筒ご寄贈頂きました。

▽出 版△

◇新家完司氏(副主幹・鳥取県)は句集「平成二十五年」を出版。A5判138頁。新葉出版発行。一〇〇〇円＋税。

◇「大山滝」(3) 発刊「大山滝句座」(代表・新家完司) B5判・208頁

▽催 し△

○木津川計氏は4月13日(土)2時から、芦屋ルナホ

1ルで「菅根崎心中」以後「初演。問合せ先電話079717113151

▼計 報▲

■中宇地秀四氏(同人・鳥取市)は1月30日逝去。享年85。2月2日の告別式には同人・前田楓花さんらが参列した。

▽お詫びして訂正△

▼1月号P98、1行目(順不動)↓順不同。P114

下段3行目、頬かむりの中の日本一の顔 水府は、

頬かむりの中に日本一の顔 水府

▼2月号P3上段7行

目、河崎ひかり↓川崎ひ

山崎

紹介者

森脇美和子

次回3月7日(木) 午前10時

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

かり。P107上段6行目、(志)千代。7行目、代

太陽の勘三郎が目を閉じる↓太陽の勘三郎が目を

閉じる。P124中段17行目

万歩形↓万歩計。P35上

段5行目、疑問符を解く

まで粘る老いの膳↓膳

▽新誌友紹介△

大田市 山崎 美千枝

紹介者 山崎 美千枝

大阪市 柳原 享子

紹介者 柳原 享子

大阪市 澤井 敏治

紹介者 澤井 敏治

安東美代子

安東美代子

紹介者 新田 富子

池田たか子

新田 富子

田中ケイ子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

新田 富子

第10回 大野風柳賞作品募集

雑 詠 5句 (未発表作品)

審 査 大野 風柳

審査方法

※選句は記名選とします

※5句一組として総合力で賞を決めます

表 彰

※大野風柳賞 1名

(受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通宿泊費)

※準 賞 3名

(風柳表装半折作品・賞状・副賞一万円)

※奨 励 賞 7名

(風柳色紙作品額・賞状)

※7月7日(日)の柳都全国大会席上にて表彰

締 切 4月25日 消印有効

投句料 1000円 小為替同封

投句先 〒956-8691 新津局私書箱15号

柳都川柳社宛

※発表誌6月号希望の方は500円加算のこと

第2回 東北川柳文学賞

▼応募資格

東北6県在住者(大震災の避難先は可)

▼応募要領

未発表新作10句(題材自由)を1篇とし、全体の題をつける。応募は一人何組でも可

▼応募用紙

A4の原稿用紙に縦書き。タイトルと住所・氏名・電話・所属結社を明記

▼投句料

1篇あたり1000円(現金・郵便小為替)

▼選 者 佐藤 古拙・西出 楓楽 他

▼締 切 4月30日(火)当日消印有効

▼賞 大賞=賞状・記念品・副賞として句集の発行権(100冊)授与

▼応募先・問合せ先

〒980-0011 仙台市青葉区上杉2-4-8

朝日プラザ上杉313

川柳宮城野社内 東北川柳連盟

TEL/FAX 022-227-0575

第12回 宿場町やかげ川柳大会

と き 5月18日(土) 9時開場

ところ 矢掛町農村環境改善センター
多目的ホール(矢掛町役場のすぐ前)

会 費 2000円(発表誌・記念品・弁当)

兼 題 各題2句 11時30分締切

「宿」 従 野 健 一 選

「妻」 牧 野 ねえね 選

「掛」 福 力 明 良 選

「流」 門 脇 かずお 選

「陣」 新 家 完 司 選

「鼻」 前 田 一 石 選

「席題」 江 尻 容 子 選

事前投句 投句締切 4月30日(火)

投 句 料 1000円(小為替)

投 句 先 〒714-1222

岡山県小田郡矢掛町西川面2556

田中道博・田中 恵 宛

問い合わせ先 紫しめの 090-7136-8807

江尻容子 0866-82-0378

主 催 矢掛川柳会

蛸壺川柳社 60周年記念川柳大会

日 時 5月25日(土) 午前10時30分開場

場 所 アスピア明石9階午線ホール
TEL.078-918-5600

明石市東仲ノ町6番1号

アスピア明石北館

(JR山陽電鉄、明石駅南側を東へ3分)

会 費 1000円(記念品・発表誌呈)

兼題・選者(各題2句) 出句締切 12時

席題なし

「エース」 宮 本 喜 明 選

「にっこ」 戸 田 わか子 選

「驕る」 長 島 敏 子 選

「器」 黒 嶋 海 童 選

「遥か」 西 出 楓 楽 選

「志」 田 中 新 一 選

「命」 赤 井 花 城 選

披 講 午後2時より

問合せ先 蛸壺川柳社

〒673-0046 明石市藤が丘1-24-12

TEL/FAX 078-922-5494 上原 翔

編集後記

★友来たる 古きレコー
ド回すべし 薫風

★人形浄瑠璃「文楽」で語
られる義太夫節の開祖、

竹本義太夫（一六五一—

一七一四）の墓は、川柳塔
の事務所から徒歩一五〇

歩の超願寺にあることは、

以前にもこの欄で取り上
げた。墓石は破損が激しい

と聞く。

★その修復費用捻出のた
めの特別公演が四月五日

午後六時半、大阪国立文楽

劇場で開催される。橋下徹

大阪市長の文楽への補助

金削減などの厳しい発言

があつてから、文楽を守れ

と入場者が増えたことは

喜ばしい。

★新家完司句集『平成

二十五年』の鑑賞は樋口由

紀子さん。「川柳カード」の
発行人、というより現代川

柳の論客として、リーダー

として常に発信し続けて

いる。また俳人・歌人など

にも人脈が広い。川柳塔と

作品の傾向は異なるが、今

後ともお付き合ひ願いた

い川柳人のお一人。

★今号から新しいコー

ナーが始まる。本社句会の

作品鑑賞欄である。名付け

て「句会燦燦」。川柳界の

一部には、句会作品をか

るく見るむきもあるよう

だが、なかなか捨てがたい

作品も多い。キラリと光る

コーナーになることを信

じている。

★「句会燦燦」の鑑賞者の

芳賀博子さんは、（故）時実

新子さんに師事、現在川柳

「宙」会員。坪内稔典主宰・

俳誌「船団」に「今日の川

柳」を連載中であり、山陽

新聞柳壇の選者も務める。

これからの川柳界の一翼

を担うホープ。お楽しみ

ひとこと

辛抱

昔から短気は損気、辛抱辛抱と
語呂合わせして教えられてきまし
た。私は幸いにして入院治療する
ような大病の経験はありませんで
したが、遂に入院するはめになり
ました。

病は辛抱が最も大事といわれて
一年あまり毎日が歩く練習で、家
族に励まされながらリハビリに専
念してきました。

病院をホテル代わりにして不自

由な体でのリハビリも楽ではあり

ません。幸い入院でのリハビリは

四か月で済みましたが、その後が

大変です。二日置きのリハビリ

と療法士さんの訪問治療です。

転んで左手を骨折一ヵ月リハビ

リを休むと退化して歩けなくなり
出直しである。自由に歩くことが
いかに難しいことか、辛抱の毎日
が続いています。（井上 桂作）

★川柳塔誌は難波の波屋

書房、堺の天牛書店でもお

求め頂ける。先日、波屋書

房に伺った。どんな方が手

にして買ってくださいなの

か：：想像すると胸が熱

くなる。読んで楽しい川

柳塔」を目指しています。

ご意見をお寄せください。

（朱）

▼100歳の詩人、柴田トヨ

「くじけないで」展が昨年、

神戸で開催されました。

しつとりと心に沁みる詩

ばかりで優しい気持ちに

なり、詩集をつい買い求め

てしまったほどです。

▼92歳からある新聞への

投稿を始め、98歳で発表し

た詩集「くじけないで」が、

160万部を記録し、その詩が

多くの人に勇気と感動を

与え続けているそうです。

また各界の著名人がトヨ

さんの詩を書いたため、

展示されていました。

くじけないで

ねえ 不幸だなんて

溜め息をつかないで

陽射しやそよ風は

えこひいきしない

夢は

平等に見られるのよ

私 辛いことが

あったけれど

生きていてよかった

あなたもくじけずに

▼100歳になっても感動し

て詩を詠めるって素晴ら

しい。後期高齢なんて言っ

ておられないと、つくづく

思っていました。（能）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)」

地名

市都
道府
道
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「同じ」(3月15日締切)

5月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓
雅
号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓
雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (2句)
一路集 (3句)
初歩教室

「厚い」(3句) 太田 昭 担当
「ケース」 井上 森 選
「迫る」 山口 高 選
「息抜き」 鴨谷 瑠美子 選
「奥」 森田 盛 共 選
「新」 新家 完 司 選
「西」 西出 楓 樂 選
「小」 小島 蘭 幸 選

5月号発表 (3月15日締切)

檸檬抄 「リサイクル」
一路集 「真ん中」「耐える」
「しつこい」
初歩教室 「東」

6月号

本社3月句会

とき 3月7日(木) 午後1時開場・1時40分締切り
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。―
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「地球脱出計画スタート」
兼題「囁む」 江島 勝 弘 選
「傾知」 矢倉 五 月 選
「ベルト」 宮内 朋 月 選
「泥」 村上 玄 也 選
「ほんのり」 小島 蘭 幸 選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)

本社4月句会

5日(金) 午後1時から

兼題「凹む」「とろとろ」「奉仕」
「賢い」「紅」

第31年度 夜市川柳募集

第10回「嵌る」天根夢草選
ハガキに3句 3月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇一三年平成二十五年三月一日発行

発行人 小島 和幸

編集人 木本 朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室

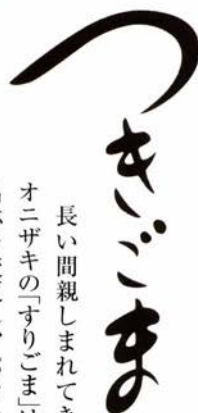
発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七九一三四九〇番
振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス

<http://www.senryutou.com/>

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>